

寺川明

泉石を以て自然の景象を模するもの、之を庭園に於て見る。丹青を以て江山の烟霞を描すもの、之を繪畫に於て見る。山野の花卉を瓶裡に藏し、天與の色香を座に於て見る。また之を挿花に於て見る。而かも自然の泉石を小盆の裡に收め、江山の烟霞を拳石によりて造り、天巧と人工と相俟て、能く天地の大觀を一室の内に眺むるは、盆石盆景等の技に於て始て之を望むを得可し。

此技古來我國に行はるゝこと久しと雖も、未だ他の庭



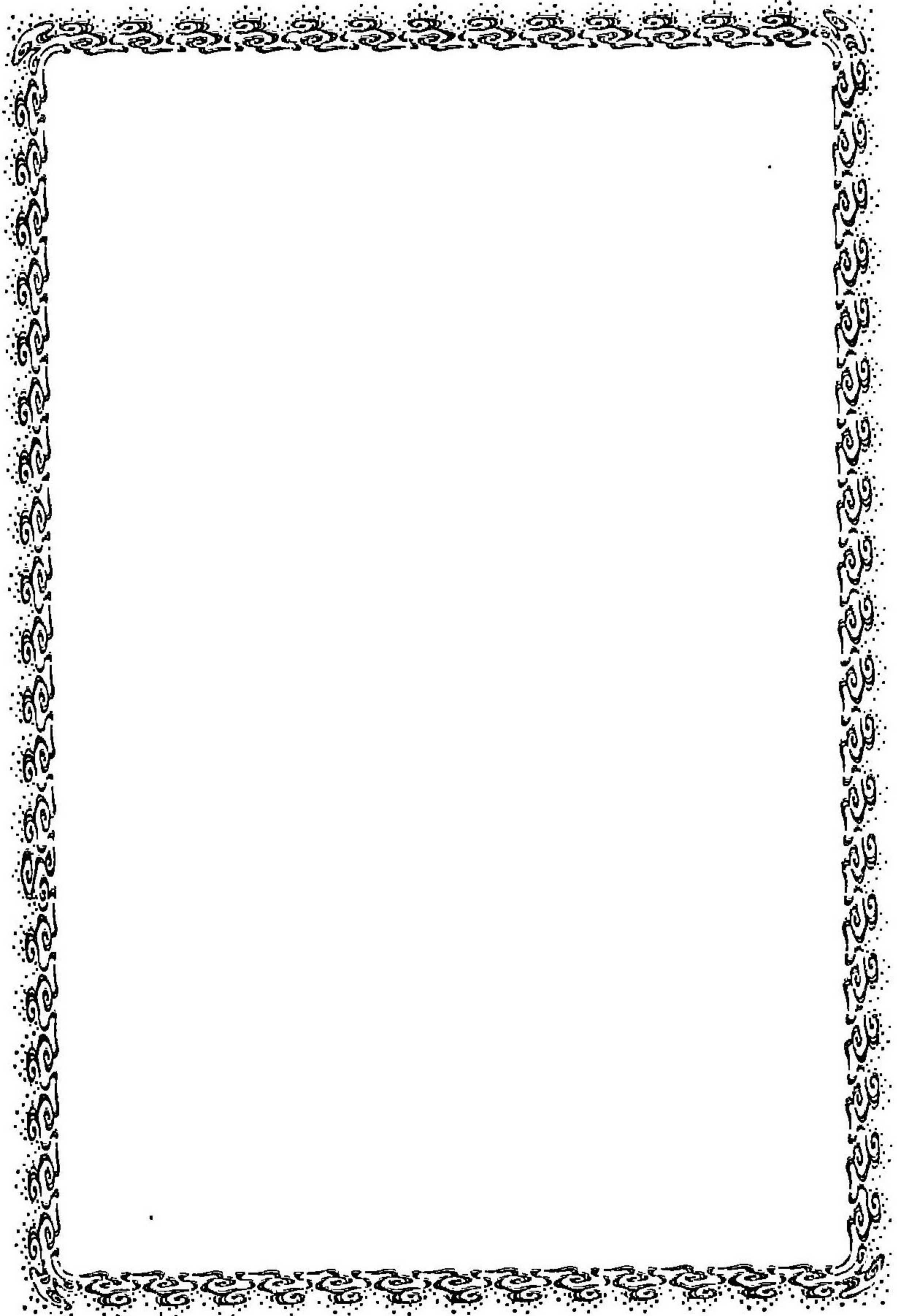
園、繪畫、挿花の如く盛に賞せらるゝに至らず。蓋し天然の風景を賞し、人爲の美術を愛するは、日本國民特有の美性にして、住居に餘地あれば庭園を設け、壁間に空隙あれば畫幅を掲げ、器の水を貯ふべきものあれば花卉を挿むこと、上下を通じて皆な然らざる無し。況や自然の石塊を配置して江山の景象を造り、天地の大觀を盆裡に收め、之を座側に賞すること、人誰か之を好まさらん。而も未だ普く行はるゝに至らざるは、石を得るの難く、器を具ふるの易からざるが爲のみにあらず。胸に名山大川を藏し、手に自然を融化するの妙技を有せざれば、其の技を繼まゝにする能はざるに由

らん

然とも人若し其道に入らば、石は奇を貪るの要無く、器は多くの費を要せざるも、能く石塊を排置して室内を飾り、自ら樂みまた人を喜ばすを得ん。頃日江原、津川、鋏形の諸氏、此技の作法を詳説し、秘訣圖解と名けて世に公にす。世の此技に志さす徒の爲に、獨習の典型を興へ、國民の品性を美にするの裨益は必ず大なるものある可し。故に書成るに及び、一言を題す。

明治癸卯七月下浣

坪 谷 水 哉



盆景 盆石
盆山 盆庭

秘訣圖解目次

第一章 總論

- 一 沿革.....一
 - 二 區別.....九
 - 三 道具.....一〇
 - 四 流派.....一〇
 - 五 盆景と挿花の關係.....一三
 - 六 掛額.....一五
 - 七 盆書.....一六
 - 八 雜錄.....一六
-
- ## 第二章 盆景
- 盆—寄羽根—浪羽根—打羽根—月打具—定規—浪打具—匙子—埃除.....一八

軸—澁紙—篩—器具匣

第三章 砂石類……………二七

澄石—添石—那智石—薩摩黒—積石—散在石—粟石—鑽石—切子—
根石—寶石—砂類—浪粉—貝殻—珊瑚片—鱗狀粉

第四章 打方……………三六

打—立—砂打方—四季の砂打—雪—雨—雑—石を立てる方法—四季—
—雑—島—山—月—雨—山—波打—鳥—散石—川—橋—月—雨—雨—
中—雨後—雲—晴雲—霞—雪

第五章 盆景圖解……………五一

江の島—富士山—住の江—山崎—待兼山—鈴鹿山—濱名—神島—小—
餘綾木—丹鹿島—須摩浦—吉野川—宇治川—淡路島—芙蓉嶽—志賀—
松—青葉山—磯尻峯—鴨立澤—野中清水—那智の瀧—高津山—淡香—
沼—明石浦—日笠浦—輪島—筑波山—玉島川—大和田浦—三種浦—
新宮城—金華山—白山—明洲浦—和田岬—早川—吉野池—大井川—

枝の濱—堅田浦—白菊濱—名艸濱—遊浦—磯間浦—和歌の浦—清瀧—
川—田袋浦

第六章 盆石秘訣……………九九

波の傳—春波の傳—夏波の傳—秋波の傳—冬波の傳—雲—糸遊—浮—
雲—夕陽—銀河—雲の峯—月—四季の月色—波浪—結婚—祭禮—佛—
式

第七章 盆石圖解……………一三三

正月 三箇日……………一三三
正月 祝……………一三三
五月 絶間池……………一三四
八月 柱渡……………一三五
十一月 大和田……………一三六
婚禮 千峯川……………一三七
任官 位山……………一三八

轉宅 長居浦

一三九

第八章 盆山法

一三〇

器具—砂打—石—砂打法—五徳—三威—結論

第九章 盆庭總論

一四二

盆庭法—土質—草木の性質—草木の移植法—播種法—害虫驅除法—
挿木法

第十章 盆庭各論

一五六

土—石—小石—砂—草木—山—橋—盆庭造り法

第十一章 盆庭圖解

一六三

伊勢二見ヶ浦の景

一六三

京都加茂社の景

一六四

相模箱村ヶ崎の景

一六五

駿河富士川の景

一六六

美濃長良川の景

一六七

武藏中野深大寺の景

一六八

播磨箕子ヶ浦の景

一六九

遠江三保松原の景

一七〇

武藏日野玉川の景

一七一

下總濱野海岸の景

一七二

武藏府中本宿裏富士の景

一七三

相模多古の浦の景

一七四

下總銚子の浦の景

一七五

武藏關屋の里の景

一七六

武藏綾瀬橋の景

一七七

甲斐猿橋の景

一七八

近江堅田の景

一七九

近江唐崎の景

一八〇

近江石山寺の景

一八一

近江筆捨山の景……………一八二

陸前松島五大堂の景……………一八三

丹後天の橋立の景……………一八四

安藝宮島の景……………一八五

下野日光杉街道の景……………一八六

紀伊磯間浦の景……………一八七

山城宇治川の景……………一八八

紀伊和歌の浦の景……………一八九

遠江濱名橋の景……………一九〇

攝津和田岬の景……………一九一

常盤大洗海岸の景……………一九二

相模七里ヶ濱の景……………一九三

岩代阿武隈川の景……………一九四

駿河宮原の景……………一九五

大和保津川の景……………一九六

下野日光中禪寺湖の景……………一九七

山城愛宕山の景……………一九八

攝津有馬屏風岩の景……………一九九

攝津新清水の景……………二〇〇

和泉松ヶ崎濱の景……………二〇一

攝津岡本の景……………二〇二

丹波由良川三軒家の景……………二〇三

河内髪切山の景……………二〇四

大和燕國寺村長興橋の景……………二〇五

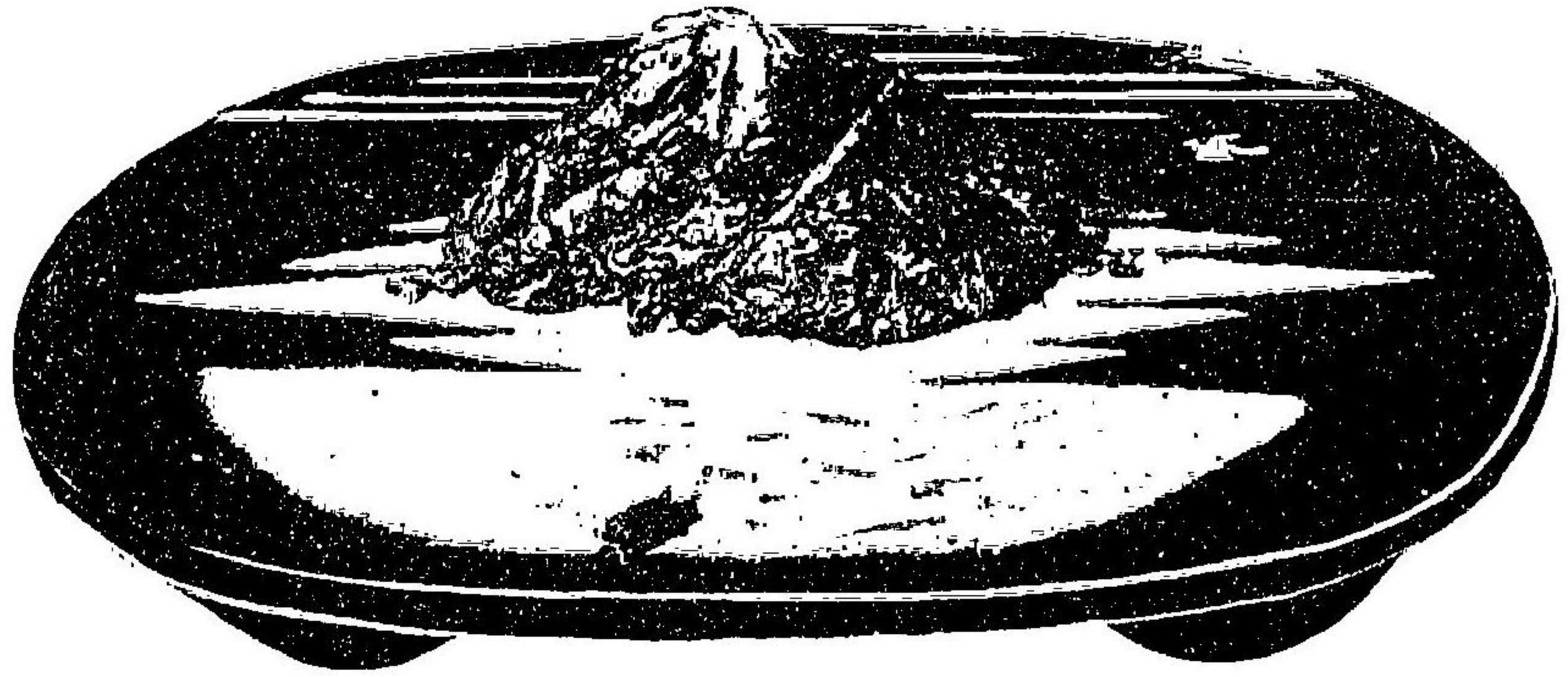
常陸筑波山の景……………二〇六

三河志賀須香渡しの景……………二〇七

和泉吹飯の浦の景……………二〇八

信濃芙蓉湖の景……………二〇九

景 盆



山 菜 蓬



川 野 吉

目 次 終

山城扇要の景	二一〇
水邊の蘆の圖	二一一
澤邊の蘆の圖	二一二

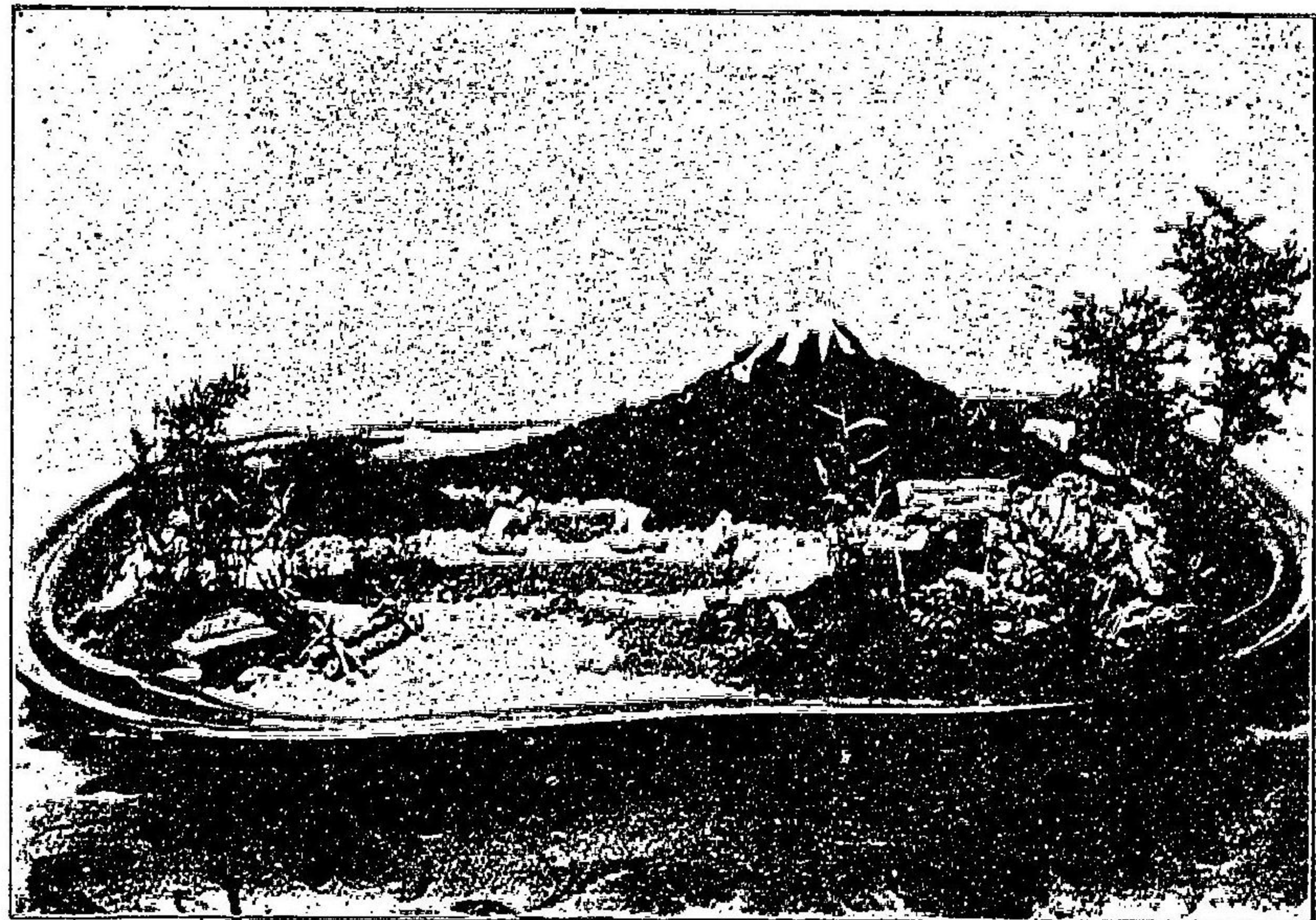
宇堂の村寒



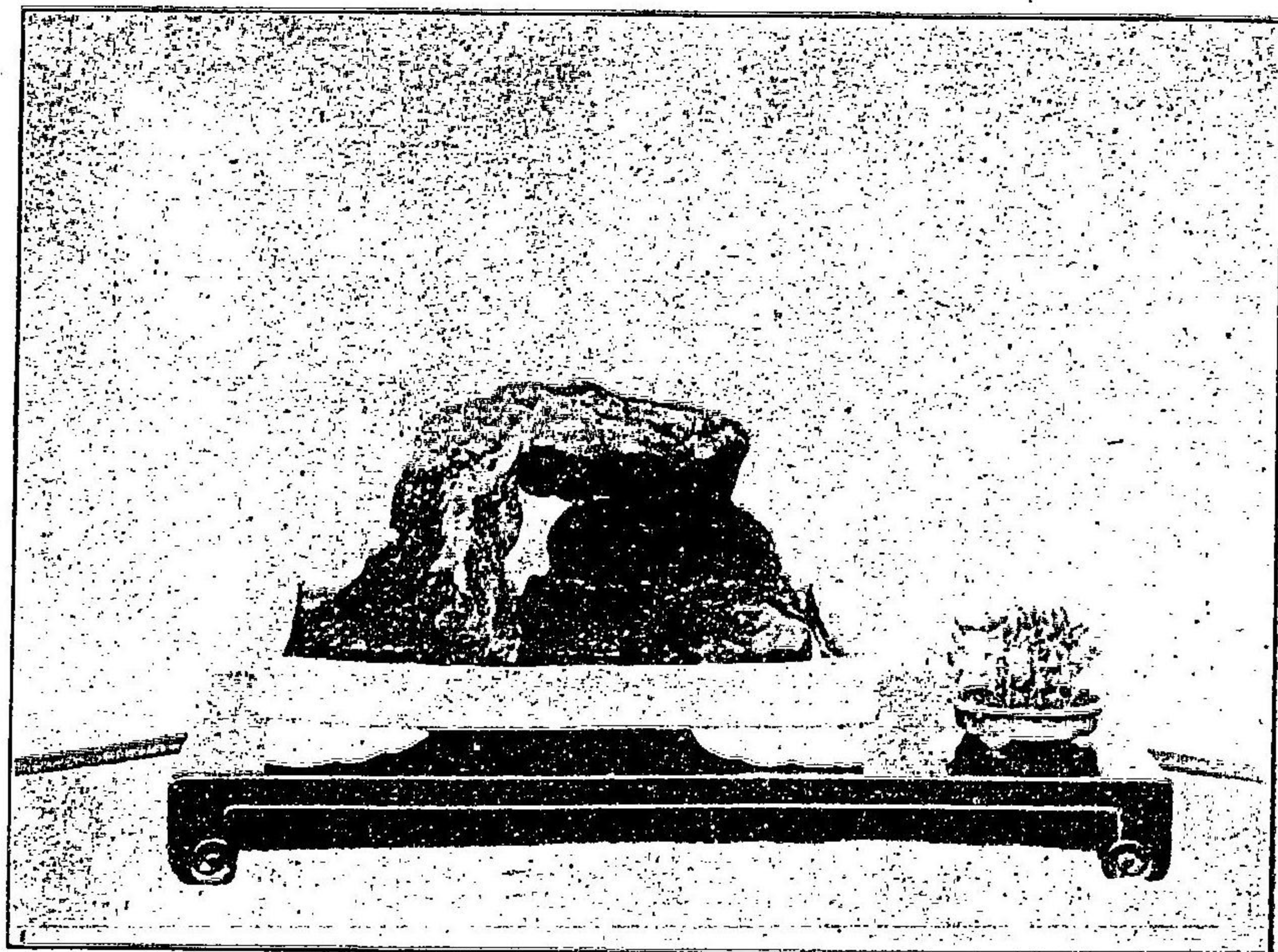
銚子の海濱



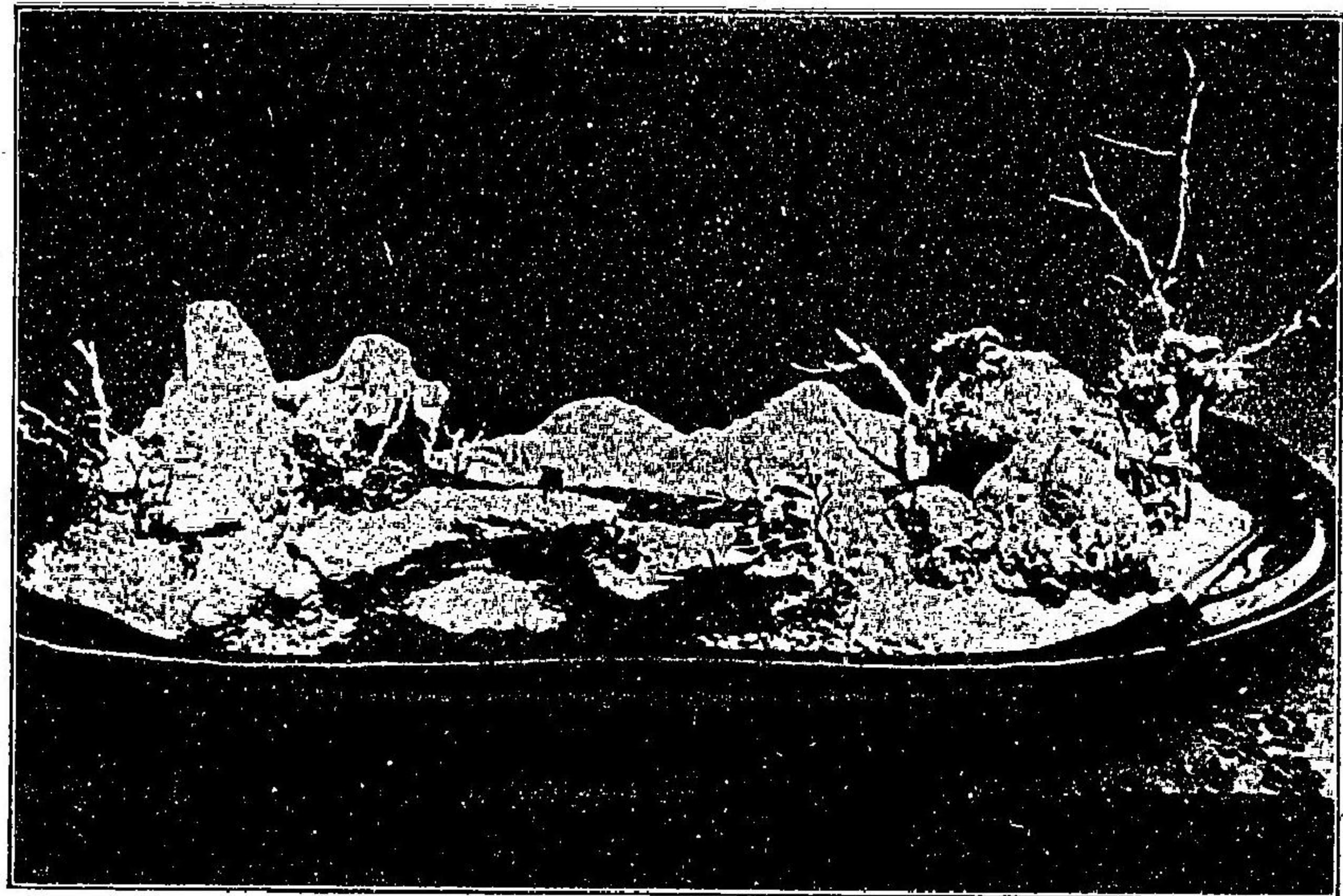
景水山の舟雪



富士川の富士



獅子の子の洞



水 山 の 中 雪



屋 茅 の 村 僻

益景益石
益山益庭
秘訣圖解

江原春夢
津川叡蔭合著
楸形蕙哉

第一章 總論

國家動亂するときは人皆な武道を修め、國家靜穩なれば文藝起るは素より自然の然らしむる處なり、平城時代の泰平は實に能く文學を發達せしめたり、特に美術的思想は著しく進歩し柿本の人麿、山邊の赤人等の歌人輩出し以て純朴にして清楚なる而かも渾厚にして一種の神韻を自然に有する和歌を鼓吹したり、又萬葉集は大伴の家持の手に依て編集せられたり、續ひては五十韻文字の發明ありたり、天文測度より以て樂器弓箭等に至るまで皆な漢土より輸入せられ文明の氣運漸く起らんとせり、夫より以後平安時代に於て續日本紀は菅原の道實

の爲に四十卷の大冊となり、弘法大師は假名文字を制定す又勸學院、學館院は建設せられて公家の子弟を教育す、小野篁も亦實に當時の人物にして、藤原緒嗣等は日本後紀四十卷を撰する等文教鬱然として起る、尙ほ藤原氏時代の文藝の發達進歩近くは元祿時代の狀況は皆な國家平穩なるときにして無事なるときなり、而して平氏の時代に至りては、群盜小賊四方に起りて良民を苦しめ官府を破壊する等國家漸く不穩の風雲に依て圍包せられんとす、此時代よりして武術大に起り戦亂殆んど絶へざることを徳川氏に至る迄で干戦日に映じ軍旗風に翻る從て武術の發達著しく大古莖の城を築きて以て堅城とせし民も大石巨巖大濠巨材を用ひて之が備へをなし、混棒の兵は火器の兵となる等國家其風狀に從て或は文藝或は武藝の發達進歩するや爭ふべからざるの事實たり要するに平穩なる時代に於ては兵器は收めて馬革の裡にあり、各人皆な身命の安からんことを欲して益々文藝を起すなり然れども一朝平靜の波は一局部の動亂に依て漸やく戦亂の怒濤に變せんとするや平素武を修むる輩は時機至れりとなし奮然蹶起して干戦を弄す此の如くにして大亂となり武人揚々得々として自己の時機を誇る

に至る

今や我國は泰平無事にして臣民王化に浸潤し、各々其培に安するや久し其間文藝の發達は非常の迅度を以て來る現今の事業と昔日の事業を比較すれば優に月髓の相異なるあり、然り而して美術の發達特に著しく或は何會くと稱して技術の増進を奨勵す從て國民一般の思想は漸く美術に傾かんとす否な傾きつゝあるなり、乃ち直接國家一身に利害の關係なき茶の湯、挿花、繪畫、盆石、盆山、盆景等の技を修むるもの續々として輩出するや雨後の笥子の如く然り之れ大に慕すべきの現象なりとす、然れども流行は遂に技術の發達にあらすして却つて之が墮落の原機たらんとす即ち流行に從つて僅々の日月を以て直に慢然挿花の師匠なり點茶の宗匠なりと自己の研究未だ十分ならざるに既に師として人に教へんとするの輩甲乙處に標榜を掲ぐるに至つては之又憂ふべきの現象ならずや特に盆石盆山盆景の如きに至つては其技の何たるを解せず僅に一夜漬的修業を以て既に師と稱し匠と稱して傲然江湖に臨む、其淺學の極途に盆石盆山盆景の區別を破壊し皆な悉く盆景なりと思ひし之を後輩の弟子と稱するものに傳ふ

教師既に五里霧中の裡に其技を授く弟子安ぞ其正鵠を悟るを得んや只師傅の儘に又盆景と稱し公會の席上に於て得々として其技を誇る其拙行や寧ろ嗤ふべく其愚や寧ろ憐むべし勢既に斯の如く滔々として皆其渦中に卷引せられんとす實に最初の一犬虚に吠へて萬犬之を實とし猶々として吠號するが如し此を以て根本的美術なりし技も遂に墮落して玩弄的の技となり、彼の童幼に依て愛玩せらる、函庭と一般の觀念を人の腦裡に置かしむ、故に今日盆景を見るものは云はん此盆庭以て賞すべしと豈に事理を知るの士安んぞ之を黙過するに忍びんや、然れども既に自身其源泉を知らざるの所謂現今の盆景家は之に甘んじて喜色を満面に洩え乃公は乃ち當今の大家なりと稱して益々拙劣野鄙にして趣味なく風致なきものを作る勿論盆庭たれば敢て妨げなしと雖も之を盆景と稱するが如きに至ては斯道の墮落は停止する處なきに至らん之れ此書を編して以て一夜漬的天狗師匠に反省する處あらしめ尙ほ後輩の弟子をして斯かる誤解の拙技を修得せざらんことを望むなり、其果して然るや否やは通讀せざれば未だ之を知るに由なしと云はん、然り食はすして其苦甘を知らんとするは難しとする處なりと

沿革

雖も金豹は能く一斑を推して之を察するを得ん必ずしも亦難きにあらざるなり

一國の人民としては其國の歴史を知るべきなり、否な寧ろ知らざるべからざるなり歴史は乃ち沿革なれば國民は其國の沿革を知らざるべからず、自れの國家が如何に變遷しつ、以て茲に至るかを知らざるは之を是野蠻と謂ふなり、野蠻の人は種は智識なく理想なし是れ其の昔日を知らざるの結果として現今を比較對照して行くが如きこと無きに由るなり、されば其沿革を知るの必要は實に文明となるべき楷梯なり野蠻文明の分は其沿革を知ると知らざるとにあるや何人も首肯する處なり

盆石盆山盆景に於ても亦然り、其の沿革を知ると知らざるとに由りて野蠻となり文明となる而して近來の師匠と稱する輩中此の沿革を知らずして野蠻となり居るもの甚だ多し、實に野蠻の野蠻たる者に至ては之を利用して否害用して淫樂的の道具となす其暴又甚しからずや、嗚呼神聖なる教育的技術も之を修業す

る輩の沿革を知らざるに由て墮落せしめられんとす、是れ沿革を茲に記して以て之が救済の計を爲さんとするなり
抑々盆景とは近世の稱呼にして其始元は盆石と稱せしもの、漸々進化して盆山となり終に盆景となりしなり、即ち我國盆石の紀元とも稱すべきは今を去ること殆んど一千二百年程以前にして推古天皇の御宇にあり
仲哀帝の皇后にましませし息長足媛は三韓を征討せられしより以來大陸との交通開け文物制度大に進む以後三韓世々獻貢せしが四百年の後推古帝の時代に及んで唐より獻貢ありたり、此時に乃ち盆石の我國に傳はりし始めとす、蓋し支那人種は元來此石材を非常に尊寵して天然の形態奇なるものは名石として之を盆中に立て元且より以て除夜に至るまで常に之を座側に置き、若し祝日あらば即ち之を出して祝する等非常に之を尊愛するは當時工藝上の進歩は幼稚にして種々なる美術品を製作するに至らざると石材に諸記録を刻すれば能く萬世に亘りて消滅することなく實に木材の如きもの、一朝火に逢ひて灰燼となるが如きに比較すれば水火共に之を消滅せしむる能はざるを以ての故に斯く尊寵して祝

の具とせるなり
支那人種の理想既に斯の如くなるを以て、須らく之を日本國に獻上して皇室の萬歳を祝せんとし、使を以て之を我國に齎らせしなり
此時に當りて我國民は未だ一般に美術的の理想なかりしなり、故に宗室の月卿雲客等敢て之を賞することなく殆んど無用の玩物視せられ空しく皇倉の裡にありしなり、縦合倉裡にあらざるも僅かに飾り置かれしにて敢て尊寵せられたるにあらず、然りと云へども唐帝よりの貢物なれば必ず拙劣なる鈍石にはあらずして所謂五山の石なる名石なり、漸々美術的の理想は國民の腦裡に生じ間々五石若しくは三石を用ひて山の形態を作るに至る、而して其用石は二三種類のみにして淡薄なるものたり
思想の變遷は時代の變遷に隨伴す國民の美術的思想漸く進みて此に盆山なるものを生ずるに至りしなり、斯くして社會文明の風潮は日本全國に擴がらんとして、國民の思想又開けんとするの氣運蒸々たるの時に清御原天皇實の御謚號あらす其何帝にましますかは詳かならざれど傳に清御原とあれば斯く申さん之を

要するに當時御諡號を記するの長きを慮かりて斯く傳へしならん清御原とは西
 京の地名なり、世に此の類の稱號渺なからず、只其まゝになし置きて他日の研
 究に譲らんとす住吉の浦に行幸あり、竹屋中納言光昭供奉す、其光景や海濱一
 帯緑たる松原白砂と相映じ遠く海を望見すれば淡島糺糊として烟霞の裡に横る
 西北の方に舞子淡參差として見ゆるあり磯の浮木に友を呼びかわしなどする千
 鳥の景拙筆の盡す能はざる處なり、實に塵外の別天地とも稱すべし、叔威斜な
 らず親しく歎美の御詔あり、還御追想せられては其光景の絶なるを仰せ出さる、
 長く斯の如き景を存せんにはとの詔さへ漏れ承り、中納言豫め供奉の砌りに拾
 ひ取りたる濃砂を用ひて之が景を盆に打ち以て天覽に供す、其の妙手眞に住吉
 にあるが如し、濃の千鳥啼ひて聲あるが如く、波浪起りて淡海動かんとするの
 概あり、叔威の程斜ならず常に御座の邊りに置き日夕御覽あり、是に於て益景
 の術勃然として起り公卿雲客の間に賞用さる、竹屋中納言代々之が術を御席に
 講ず、漸く民間に傳はるに及びて竹屋流なるものあるは蓋し中納言の遺法に依
 りてなすを云ふなり、此時より益景は起りしものなるや明なりとす

以上は實に此益景の沿革を概記せるものにして之に依りて之を見れば益景は其
 起原益石益山より新らしきを知らん而して現時此三法を混淆するものは尙ほ其
 の區別あるを知らざるの致す處なり、本論に於ても其區別の小部は了知せらる
 るならんが尙ほ次の條に於て其區別の點を述べんとす

區別

今や吾人は益石より益山を経て以て益景に至るまでの沿革を記述せりと雖も未
 だ之を以て世間幾多の誤解者をして全然其誤解を脱せしめ能はずと信ず、救麥
 を辨するに難しとなすの徒は宜しく本論を熟讀すべし、既に辨じ得るの徒と雖
 も一層確信を生ずべし、先づ益石、益山、益景と稱して上には等しく益なれど
 も或は石と稱し山と稱し又或は景と稱す、其間互に相違するの點あるべきなり
 沿革に於て記する如く始め支那より傳はりしときは五山の形にして益に唯一箇
 の石ありしのみ、之より少しく進化せしものは山と水を打つなり夫れより轉じ
 て終に遠山を打ちたるを益景とす、故に益石は石のみの淡薄なるもの益山は水

の様を之に加へしものにて少しく繁なり而して益景とは遠山を打つものにして三者中一番に繁雜なるものなり、而して此區別を知らざるに於ては益石を以て益景となし益山を以て益石となす等の失態を來たす今や此の解釋を得て之を今日の益景と稱するものに叫せば思ひ半ばに過ぐるの事實あらん、尤も其異なる點は斯の如くに極て僅の處なれば遂に混同するに至るなり

道具

益石、益山、益景に於て使用せらるゝものは益、羽根、金剛、匙子、砂上、砂、根、等なり
石は那智石と稱すれども先づ越後の國鍋が浦にある石を第一とす色黒色にして且つ龜甲狀の斑紋あり、之に次では甲州御代山の産より近江益石谷等の産あり尙ほ静岡地方の方解石あり、皆天然の形態を傳ふと雖も止を得ざる場合あるときは人工的に之を切りて使用することあり

流派

宗教に眞言宗あり禪宗あり天台宗ある如くに物皆な流派あり、而して此益石益山盆景に於ても亦各々流派ありて各々其説く所を異にす、今其流派を擧ぐれば即ち下の十四流となる

- 竹屋流 風早流
- 清原流 東山流
- 石州流 遠山流
- 日野流 相阿彌流
- 寶生流 生田流
- 高野流 細川流
- 宇田流 光悅流

而して其源は即ち竹屋に始まり漸々傳はりて互に改作せしものなり、内にて竹屋流、風早流、日野流は同一なりとす是れ皆な竹屋中納言の子弟にして或は日野家或は風早家に養子となりしもの、其の實家の法を用ひて之を友とし、只其流名のみを變せしものなり、又相阿彌流の如きは、竹屋流の法を變せしもの、尙ほ流儀に關しての詳細の事實は他日を俟て述べんとす、流派は異なるも其大體に至りては敢て異なるなし、故に又將來に於ては改良せられたる流派の出づるなきを保せず又豫期し置くべきことなりとす、此の覺悟なくして徒に舊習を墨守して其の時世に適すると適せざるとに關せず一意以て師傅に拘泥して其廢

れたる舊套を脱することゝなさるゝが如きは愚なりと云ふべし、如何となれば若し一に師傅に準據して世俗に鑑むる處をなさざれば從て衰微するの悲境を呈す是れ頑固なる所爲なり既に盆石より改進して盆山となり、盆山より改進して盆景となるの沿革あれば又盆景より改進して他の名稱を附するも可なり、他の流派を立つるも亦可なり、要は一種の玩弄的のものにあらずとして美術的の神聖なる技術とし國民をして之を修むるの間に儀容禮式の思想を涵養し以て國風を起すにあるなり

時に之を近來の女子教育に應用せば一面は以て美術の思想に富ましめ、一面は以て高德を養成するに足らん、其輕躁浮薄の行動を變じて沈着鄭重の行動に變せしめ、以て女子の徳操を精神的に了解せしむれば處女性墮落の醜態を耳にすることなげん、實に以上の如なるを以て斯道を修めんとするものは之を一遊技なりと輕視することなく之を社會風俗の上の應用せんと務めざるべからず、苟くも社會の風潮に從て之が教授の法を改進せしめて、古術にのみ拘泥すれば終には斯道の敗類して拾集すべからざるに至るやも蓋し計り難し、否寧ろ計り易

きなり

然れども温故知新とは古聖の金言なり之を以て能く各秘術を探究して以て新秘術を案出すべし、是れ總論に於て各區別を立つるに拘はらず後章に於て盆石或は盆景と思意せられんとする點あらんも是れ各秘傳と稱するものを此は盆石にては相違せるなりとして一々區別するは却て不便なるを以て其儘盆石は盆石として記せり

盆景と挿花との關係

挿花をなす者盆景家に向ひて曰く挿花と盆景とは其關係猶親子の如く常に離るべからざるものなりと、而して盆景家は常に曰く然り盆景と挿花とは天ありて地ある如く日ありて月ある如しと、其關係實に然らん、然れども如何なる理に由て斯くの如くなるやを知る者は曉星の如く寥々たるなり

今其源を尋ねんに今より百三十年程前天明年間に堀氏、勅命に依り日本全國を旅行し普ねく奇景名勝を順覽して此れを圖繪に編せんとす、至る處の住民に付

きて其國の名木珍花と稱するものを持ち來たらしむ時季に應じ土地に隨つて集り來るもの各々異なる、後旅行も終りて都に歸り名勝中の名勝を擇んで盆景に打ち之を天覽に供す

而して其傍に其名勝の土地附近に於て珍重なる草莽を挿生として附し以て趣味をして一層深からしむ、是れより以後盆景と插花との關係は生せしなり、故に插花と盆景との關係親密とするも各獨立して二人を以て其盆景を作るべきにあらざるなり、即ち盆景家は又插花の法を心得て作りたる盆景に付して出すべきなり言を換へて云へば盆景として出すには插花を付すべしとなり、斯くの如くなれば又插花の點に心を附して此景には如何なる花を生くべきかを考へざるべからず、尙ほ其季節に關係して季節以外の花を使用せざるを要す、而して斯く論ずれば此處に龜戸天神の景を打たんとするに季節梅花の時ならずして夏の場合には梅花も用なしとす、又向島の如き春には櫻花爛漫たれど、冬季は即ち花なしと云はん斯様なるときは必らずしも其土地に生ずるものに限らざるなり宜しく時機と場合に應じて作るべし

掛額

盆景術の應用として掛額なるものあり、其は黒塗の縁なき盆に山水、動植物を描きて之れを掛けるに適せしむ、此法に用ゆる砂は極小さく所謂粉と稱すべきものにして、其色澤には種々あり此砂を盆面に散布して任意の象景を打つなり、是れ一見不可思議にして重量ある砂が能く後の盆面に整然として附着し居るの理なきが如しと雖ども又理なきなり、然れども此處に此の秘法と稱するもあり其は淡く溶きたる糊を使用して巧みに砂を止むるなりと、斯く其秘密を知れば實に馬鹿氣たる次第と云はんが是れ等しく秘密として師匠間に行はる、所なり又此外に空氣止の新法あり之れは前法の如くに糊細工にあらず盆景法熟練の結果として打ち得るものなり從て前者は之を摩するも比較的強く固着すれど、後者即ち此法に由て打ちたるものは僅かに一蠅の來りて之に觸る、も亦能く固着する能はずして剝落するに至るといふ

盆 書

盆石、盆山、盆景の外に獨立して盆壽なるものあり。此れは一種遊戯的の玩弄物にして種々の色砂と種々の小道具とを羅列して以て作るものなり。故に兒童の愛玩用にして盆石盆山盆景と之を同一にして説くの價値なしとす。然らば掛額と同一種なりと言はんか、是れ又掛額と比較すべきものにあらず。掛額は實に盆景の應用にして自から一種熟練の秘密ありて存すと雖も、盆書は元來玩弄的のものなれば趣味なくしても可なり、之を極露骨に忌憚なく評下すれば稍や高等なる砂繪なるのみ乃ち砂文字の進化したるものなりとす

雜 錄

香 爐

元來此盆景、盆石、盆山は冠婚葬祭に於て或は祝し或は悲むとき其祝意を表し其哀悼の意を示す等に用ひたるものなれば現今にても亦之を行ひて折に觸れて

は之を打つことあり。此場合に於ては乃ち妄りなる景色を打つものにあらず夫に法則あり特に追善の盆を打つときに當りて彼の香爐を岩窟の上に置きて之に香を投じて烟を出さしむるは多くある場合なり且つ秘傳に於ても亦此の如き圖なしとせず。然れども凡そ盆景盆石盆山孰れにもせよ、其景色は必ず一定の名稱を有するものなり決して偶像を描くが如きことなき法則なり。故に此法則に従へば岩窟上に常に香爐ある景色を擇ばざるべからず。然れども此の如きは未だあらざるの景なり、有らざる景を打つは法則の許す處にあらず。依て之れは宜しく其香爐を岩窟上より除かざるべからず。若し岩窟上より除く時は手向くるの儀に背くとせば、縦令之を除くも他の方法を以て香煙を立つれば可ならん。其方法とは海岸の鹽燒の景の如きを作りて其より煙りを出すべし。又は民家炊煙の景の如きあり共に煙りを要するなり。然るときは拙劣ならず。是を以て必ずしも師傳を墨守すべからずと云ふなり

波

波を打つにあたりては大に注意すべきものあり。波は一年の間常に同一の方向

にのみ起るにあらざるなり、實に一日の内に於ても満潮干潮の關係あり、又季節に依りて風の方向は變ずるものなり、之に隨伴して又波浪も其方向を異にす故に何時も一定の左より右に流るゝものなりと信じて盆を打てば矛盾撞着の景あらんこと明なりとす

河の波は河流が四時も左より右に流るゝとして其源流が右にあるも意に介せず一向無頓着にて打たらんには河の流は皆な源に向て流るゝものとならん何ぞ笑ふべきの甚だしきや

第二章

盆景器具

元來盆景は美術的の技術と稱すべきものにして、所謂自然の風光を寫出するものなれば實に天真爛漫たるべきや言を俟たざるなり、其れ然り此を以て徒らに人為的の打法に拘束せられ何々の景には何々の定規或は何々の羽根と一々多種の器具を使用して其補助を得るにあらざれば以て一の盆景をも打つこと能はずと云ふが如きは最も不便とするところなり、故に器具には敢へて確然たる種類

を作り以て何々の器具と稱し百事之を使用せしむることをなさざるも漸く熟練するに至れば一も定規或は月形等の器具に依頼することなく而かも盆景として價値あり趣味あるものを打つこと彼の初學者輩の千辛萬苦の結果總かに一面然かも價値なく趣味なき盆景を打つよりも易々たるなり、論じて此所に至れば特に一章を費して器具を記載する必要なしと雖ども初學者輩の参考として其概略を記載すること、なせり

盆

技術の名稱既に盆景なれば盆は斯道の器具中にて第一位を占むべきものなるや明なり、盆中最も多く使用せらるゝものは小判形短楕圓形扇の地形にして隅切葵形等は多く使用せられざるもの、如し而して低き足の附たるもの足の附かざるもの等にして其色澤に至ては最も黒色を可とす是れ黒色なるものは他色に比して數等風致と趣味とを與ふればなり黒色に次では綠色なりとす倘夫れ其大さに至ては一定せざるを以て詳論する要なしとす

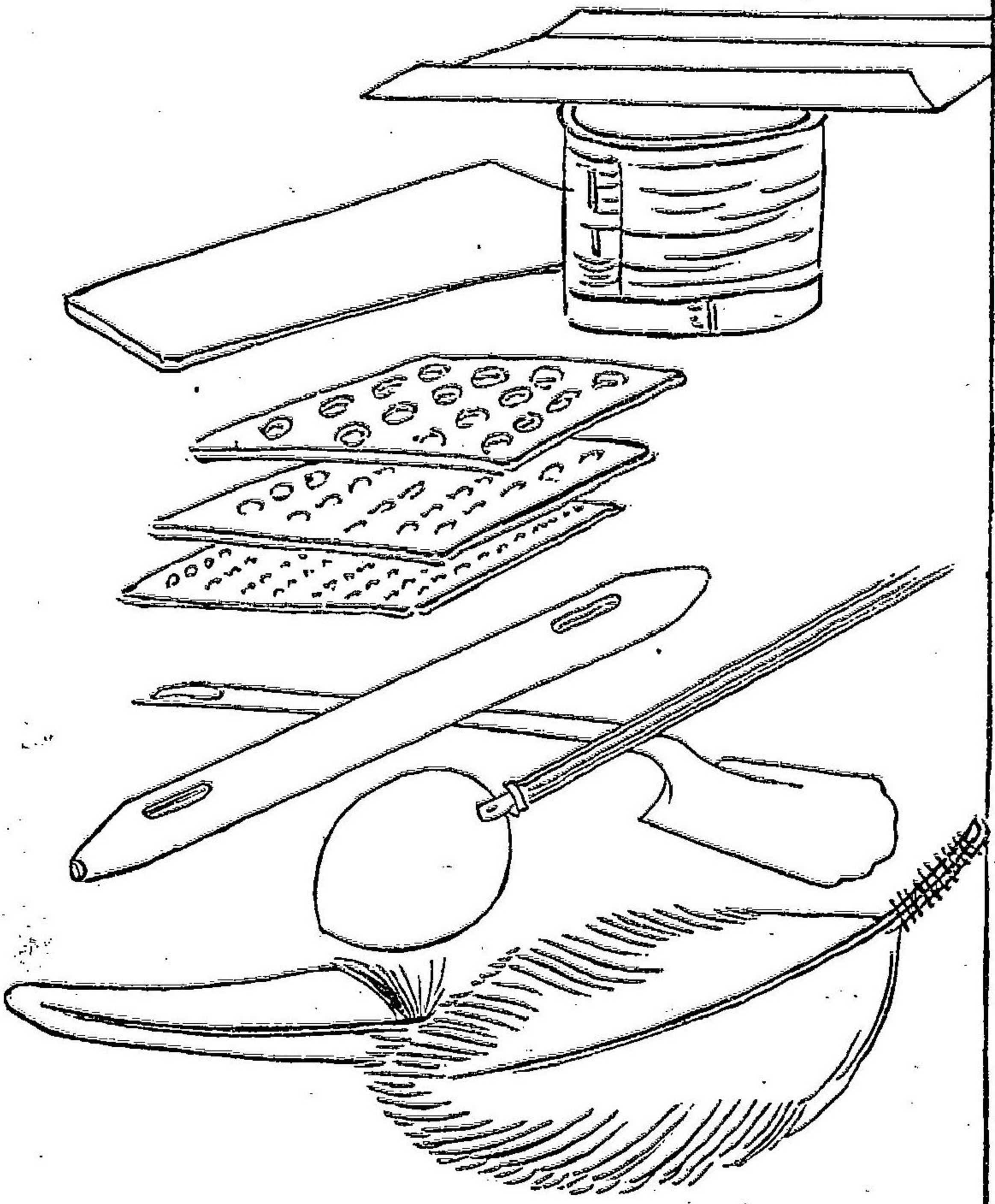
寄羽根

寄羽根は浪粉の如きものを寄するに専ら使用せらるゝものにして其大さは打羽根後文にありの如くに大ならず而も羽片の弾力性強きを要す換言すれば腰の強きを可とするなり其理由は明かならん即ち粉を寄するに羽根全體柔軟なれば其目的を達するに難き故なり然れども亦全體強靱に過ぐるも不可なり、夫故に腰の強き縁邊の柔かきものを撰ぶなり、其形状は羽軸と稱して羽根の中央に基礎部より尖端までを貫通する堅固なる骨質様のもの、左右熱れか一方を剪り取りしものを用ひ、又全體完全なるものを用ゆるも可なれば使用者の撰擇に任ず而して其数は三四本にして可なり

浪羽根

波浪を打つに使用せらるゝものにして大さ又寄羽根の如く共に大ならず、而して波浪を打つの目的たるを以て其羽端も亦自から他のものと異なる即ち前者は軸の一方を剪取せしが此浪羽根に於ては羽邊全體を鋸齒の如く截るなり其の齒の深さは一分乃至二分にして尚ほ任意の淺深ありと雖も大概は以上の如し、前述の羽根に於ては其色澤の何如を論せざりしが此浪打羽根は少しく論ずる所あり

道 具 一 式



り即ち其色は黒を最も適當のものとし間々他色のものあり白の如きは殆んど用ひず、尙打羽根なるものあれど今混雜を避けん爲に其は次章に於て述ぶべし

打羽根

打羽根とは浪粉を打つに使用する、ものにして種々の形状を有すと雖も通常三四本を所有すれば足れりとす、其餘は隨意に製作するも可なり、形状は羽根其儘なるものと軸の一方右片或は左片を截り取りしものと羽片の尖端若しくは邊縁の部分を剪みて一様に揃へたるもの等種々あり
其使用法は一本の差し替自在にして何れの羽根にも適する様なる金屬製或は木製の軸あり之に羽根を挿入し目的とする浪粉の如きものを軽く掬ひて其軸を拇指と人指指との先にて軟く摘み沈着に左手の指を以て右手の甲を軽く打ちつ、右手を動かして目的を達すべし、此際大に注意を要するは浪打及其他如何なる場合と雖も一所にのみ打粉を堆積さしめざるることなり此は初學者輩に於ては手練未だ熟せざるを以て殊に注意して行ふべし
而して其羽根の大きさは大略一寸以上四寸以下のもの二三枚を所有せば足れりとす

す

月打具

月打具とは月面を表はすに使用せらる、器具にして平打或は抜打の二種類あり而して平打とは其型を置きて上邊より砂を打ちて後其型を撤去すれば其型のありし所のみ砂を止めざるものを云ひ抜打とは之に反して其型に圓筒或は其他の形状を有するものにして砂は此筒中に注入するものとす型を撤去せば筒の形状を現出するものなり

而して平打の器具を使用する場合は多く満月にして、其圓型の大なるは直径一寸二分、中型は直径八分、小型は直径五分の器を用ゆ、又抜打の器具は弦月若しくは新月を打つに用ゆるものにして、之れを三日月打とも稱するものなり、以上は稍々規則的の觀あれども必らずしも之れが使用を要するにあらざるも可なり

定規

盆器上の一器具として使用せらる、ものに定規あり、其用途に隨伴して形状及

び名稱を異にす、而して其種々は一定せざれども通常左の如し
 線定規 單に直線を引割するに用ゆ
 橋定規 橋を打つときに使用す、又境界を描割するにも用ゆ
 打定規 霏々たる吹雪體々たる積雪を打つに用ゆ
 寄定規 波濤を打つに使用するなり
 以上の定規の材料は木材にして各自に製するもの此外種々あり

浪打具

黄銅若くは銅にて造る、用途は激浪奔波の状を打つにあり、大さ大中小を以て一組とす、之を以て浪を打たんとするには、先之にて浪粉を糊ひ右手の拇指と人指指とにて軽く擠み右手の甲を左手の指頭にて軽く連打ちて盆面に浪粉を撒くが如く布が如くにすれば可なり、此場合には充分沈着きて爲すべし

匙子

黄銅若くは銅製のものにて造りたるを用ゆ

埃除

下繪の補助と自己の手練と雅致なる思想とに依て打たれたる盆景を床若くは机上に排置するに一兩日間は敢て憂ふるに足すと雖も日子を経過するに従つて空中に浮遊せる塵埃は惜氣も無く來つて盆景に堆積し之が爲めに精美のものをし、て大に其品性を損することあり、此憂を防禦する目的に埃除を使用するなり、故に該器も亦斯道に於て必要のものたり、其形状は助炭の如く下一面を残して他を悉く厚き紙にて張りたるもの、然れども紙にては透明ならざれば硝子にて張る時は埃除けとなりつ、又看るに一々之を除去せずして可なれば一層便利なり

軸

軸は黄銅若くは木製にして浪打羽根等を挿入する爲のものなり形状四角柱と圓柱とあり先端に角或は圓の孔を有し之に羽の軸を挿入す

漚紙

既に打ちたる盆景を掃ひたる沙石を貯藏し置くに使用するものなり、又小なる盆に景を打たんとするが如き場合には下に敷く等にして其他には用途少なし

大きき方一尺五寸より二尺程とす

篩

盆器上に此器を使用するは砂及小石を分別せしむるなり故に其網の目に大小の差異あり、銅或は黄銅製の金網を以て張り直径二寸、一寸八分とす、其網の目は五分のものを大とし逐次其半を減ず又紗張のものあり直径二寸、一寸五分、一寸、等にして目は金網のものより順次に細くなる

以上の記述に依て斯道を學ぶ者の準備すべき器具は充分紹介せられたり、之等の器具を一は火鉢の抽子に容れ一は他の箱に容れ置かんか甚だ不規律にして往々紛失を來すものなれば宜しく一器中に收容するを要す、之には器具匣あり

器具匣

其構造は人に依りて各々好む所ありと雖も、大抵高さ二尺幅一尺横幅二尺五寸にして全體を五段の抽子に分つ
第一段 定規、打羽、月打具等を容る、處高さ三寸

第二段 小石砂類を容る、處にして高さ三寸内面を區劃し置くべし、否ざれば砂の混交する憂あり

第三段 石類の稍や大なるものを入る、處高さ四寸

第四段 羽根類、筒、濾紙等を容る高さ八寸

第五段 茅屋、鉢山形、橋等の各種小器具を容る、なり高さ五寸

第三章 砂石類

前章盆器器具類と題し、盆の種類より以て之を收容すべき器具匣に至るまで十有餘種三十有餘品に就て其形態及使用法の一斑を説述せり、而して今此章に於て論せんとするは即ち砂石類なり、故に人或は言はん砂石も亦器具なり何ぞ特に章を分つの必要あらんやと、勿論砂石も實に器具ならん然れども此は前章に於て論せし器具と同一の觀念を有すべきものにあらざるなり、即ち器具と言はんよりは寧ろ材料と言ふ方穩當なり、材料と器具とは又自から相違の點あるものなり、此れに由て特に前章の器具類と章別したるなり、讀者怪疑の念起らん

こと期し難きを以て茲に之を説明するは著者の老婆心なるのみ

置石

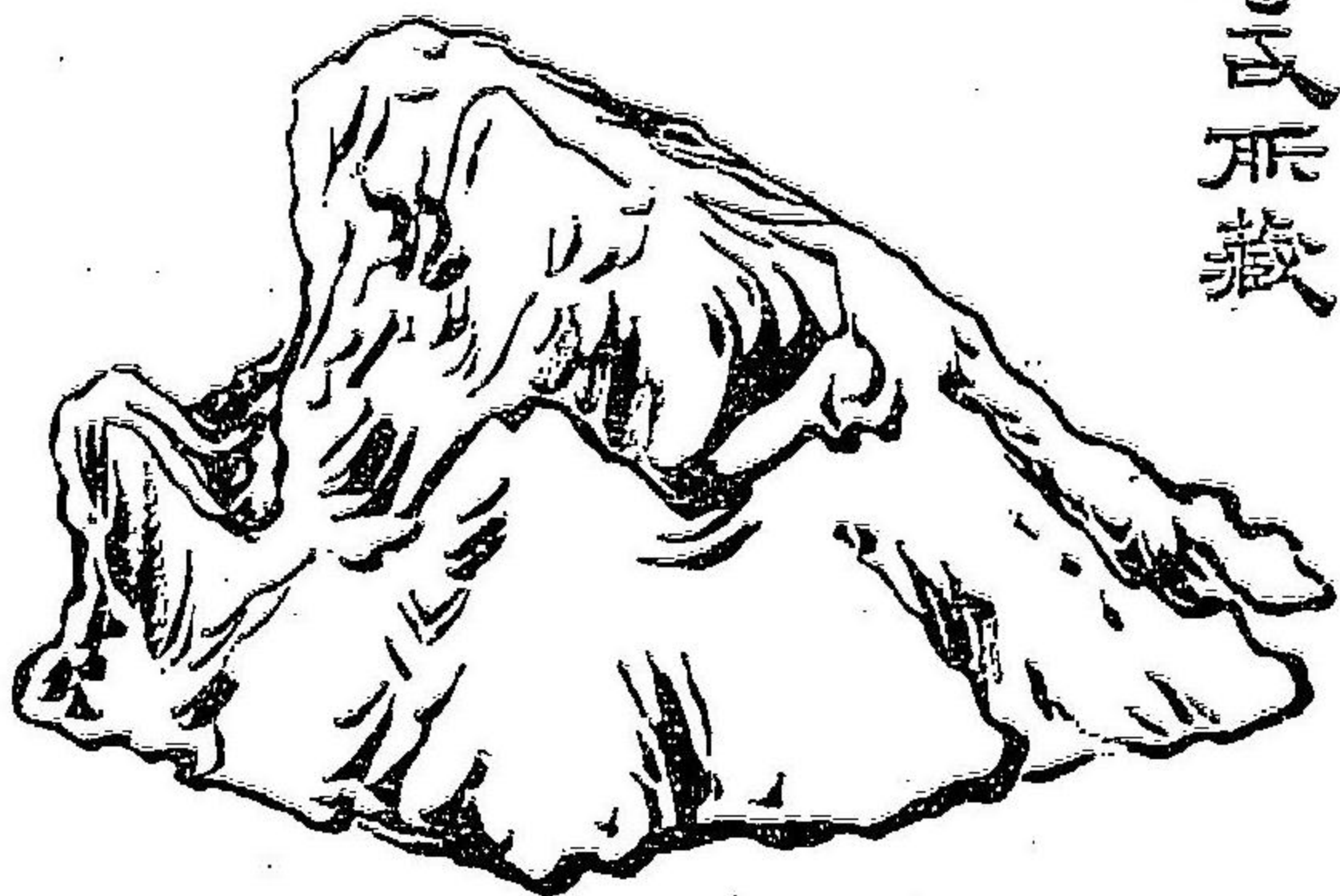
置石は大きき五寸乃至七寸五分までにして高きは三四寸のものを適當とすれども自然的形態を具備するものならんには必しも以上の大きさに限らず或は小なるもの或は大なるものも可なりとする故に其形態の愛すべきものは宜しく用ゆべし只だ嫌ふべきは死石なりとす死石とは乃ち人為的に故意に其形態を構成せしものを云ふ此のものは縦合如何に愛すべく見ゆるも排斥して用ひざるものとす其外谷川の石は後文那智石の外に使用せらるれども海石は使用せざるものとす又盆景に使用する石を嫌ふは其外見一寸愛すべきも石として難相あるものは排斥す而して此置石の用途は他あるもの斑點あるもの山形なるもの等あれど大抵島嶼の主部を構造するか或は山を構造するにあり

添石

置石にて山若しくは岩窟島嶼を構成し其根をぬめるの目的に根石或は添石と稱して使用せらる其大きには中位のものなり然れども又其中位の中に大中

鞍馬山

奥野氏所藏



伊豆七島



小の三種あり、使用には大中小宜しく參酌配合して差異あらしむる方粒の整然たるを使用するよりも風情ありて趣味一層に深しとす、其色澤も置石との色合に比較して宜しく配合するを可とす

那智石

此の種の石は置石として用ひらるゝものにして産地は紀州那智の海濱なり而して色澤純黒なり多く金銀等を試験するに用ふ、其那智より産すると其色澤の純黒なるを以て之を那智黒と稱す、又普通に之を脂石と云ふ蓋し光輝ありて滑なること油を塗布せるが如きに依りてならん、其形狀大小は素より天然のものなれば千差萬別同じからず、其大きさに従つて荷荷粒、豆粒、小豆粒の稱呼あり、凡そ此石は益景にて最も他石より多く用ひらるゝものにして斯道家の尊重するものなり、尙其小豆粒を小分せしものを那智小石とす、那智胡麻とは直徑僅に半分にして那智小石の更に小分せられたるものを云ふ而して那智胡麻とは即ち那智胡麻石を畧して稱するなり

薩摩黒

前述那智石は實に此章石類の主座を占むべきものなり、而して若し那智石を缺く場合には此薩摩黒を代用するなり、産地は薩摩にして其大小の點は矢張那智黒と大差あるなし、又用法に至ても殆んど薩摩黒に異ならざるなり故に詳論するを要せず

積石

名稱に依て判断し得る如く此れは只だ島嶼の全部若しくは一部分を積み立つるものにして特に那智黒薩摩黒の如き名稱を有するものにあらざるなり、其大さは直徑五六分より一二分までとし、色澤は白色に黒點を帯ぶるものなり、又積石としての用ひの外尙ほ散在石、添石の用を爲すものとす

散在石

散在石は海面に散在せしむるものにして色澤は種々ありと雖も先づ茶褐色なるものを宜しとす、其大さは乃ち直徑一分若しくは一分半より三分半位までのものを使用するなり

栗石

白色にして稍や茶色を帯びたる小石に混するに其形態より色澤に至るまで殆んど粟に似たる小石を以てしたるものを粟石と稱す。此の石は洲の岸若しくは島の岸などに打ち又は根の目的として使用せられたる添石と添石とに間隔を生じたるが如き場合には之れを蔽ふに用ひらるゝものにして其用途の廣きを以て、益景家等重物の一たるなり、而して此粟石と細小になしたるものを粟粉と稱し海の景には多く使用せらるゝものなり、此は粉の條に於て述ぶべきなれども特に粟石との關係を明瞭に知らしめん爲之に記す

鑛石

銀鑛及銅鑛及鐵鑛等の鑛石は主として山若しくは島の主部を構成するの材料なり、又添石として用ひらるゝ其大きさは前述諸石を標準とせば推するに難からざるべし

切子根石

前述の添石に用ひるものにして、其の質は擇ばず、只其大きさの揃ひたるものを要するのみ、大きさは直徑一分より一分半まで色澤は白黒なり

寶石

以上記載せしものは普通に石と稱するものなりしが尙此外に寶石をも使用するなり、其名稱の大畧を列擧すれば
 色澤綠にして麗はしきこと孔雀の如き孔雀石なり
 瑪瑙此は其色澤青あり赤ありと云ふ如く種々あり
 紅寶石はルビーとも稱し紅色なる鋼玉石を云ふなり
 玉髓とは淡灰色或は紅色黑色等の色ある石なり
 黃寶石は黃紅或は淡藍色等種々の色ある半透明石なり
 深紅色或は褐色若しくは黒色の石にして柘榴石と稱す
 液石は通常白色なれども先黄、綠色にして不透明なり
 石英類とは水晶、黃水晶、紫水晶、黒水晶等を云ふなり
 蛇紋石透明にして綠色灰色等あり紅褐色を現はし數多の斑點或は紋形あり、
 螢石と稱して透明無色なるものあり黃色綠色淡紅色あり
 其他尙竹葉紋理石等あれども敢て説述するの必要なければ畧す、以上は何れも

島を構成するか或は之が添石として用ひらる、又玉髓、瑪瑙は乃ち豫備石と稱す蓋し稀れに使用せらる、ものにして常には只時へらる、のみなればならん石類は先づ之にて擲筆し次の砂類に移らんとす

砂類

浪粉

浪粉は實に盆景術上の一必用材料にして之を缺きては苟も完全なる盆景を打つこと蓋し期し難からん、鑛石、寶石は殆んど多くの場合にて用ひられざるも浪粉は常に使用絶ゆることなし、今其浪粉は使用せらる、場合を概列すれば明皎皎たる月を打つも、白皚々たる雪を打つも、雲を打つも雨を打つも小島を打つも將又遠山を打つも霞みを打つも皆な浪粉の使用に據らざるべからず、而して勿論浪を打つにも使用せらる、なり、以上の如くなるを以て此粉は必要なるものなりとす其色は白き粉末なり之れに緑紅等の着色を爲せるもの色粉と稱し密なるものを打つ場合に使用する

貝殻

白色にして其大きさの大小差異あるものを云ひ海濱の景を打つに使用し或は潮干の風情を打たしむるにあり材料は貝殻なりとす

珊瑚片

細き且つ小なる棒状をなせる片粒にして秋の野山に散る楓樹や樹々の紅葉を打つときに専ら使用するなり、蓋し其色紅なる故ならん

鱗状粉

鱗状粉とは瑪瑙の粉末或は玻璃、雲母等の粉末にして島或は海岸に應用するものなり

以上記述せしは實に著者が識者に據りて或は見或は聞きたる所のものにして所謂俗の俗たる所にして専門諸先生に就て之を叩けば誹難の點あるや素より甘受する處なり著者は以上の器具類を以て説明し盡せりとは信せざるなり只普通社會にて習慣的に爲されつゝあるものを記述せしなり、其の法則等に至ては博識の先生に據りて得たる論説を報道せんとするなり讀者幸に大早計を爲す勿れ

然れども今少しく著者の所見所聞を記述して以て讀者の參考に供せんとす或は裨益する處あらんと信するなり

第四章 打方

打

盆景に於て砂を以て一景を作くるを打つと云ふ

立

同じく盆景に於て石を取扱ふを立つると云ふ 而して通常盆景を造るを打つと云ふなり即ち打とは前者の砂を打ち後者の石を立つるを總稱するが如くなりされば之より以下に於ては矢張り之に従つて單に打つと云はん只別々に云ふときのみ打つ立つと區別するなり

砂打方

先づ何事を爲すにも其の着手前には斯々の次第を追ふて後に斯々になすべしと思案するは之れ當然のことなり 而して此の砂打方に於ても亦然り實に其の初

めに當りて思案すべきは氣候なり、氣節なり、即ち此れは何季時分なる故に斯すべきなりと云ふことを考ふること必要なりとす、此考慮なくしては盆を打つこと能はざるなり、宜し能ふとするも其は無意味の玩弄物となりて觀るに足らざるなり故に殷々たる瀑布の景、滾々たる流水の様、皎々たる明月、皚々たる積雪、爛熳たる紅花、秋山の紅葉等種々様々の場合に應じて石を見立つるを要するなり、此の見立に次いで即ち砂を打つべきなり、其は第一番に地砂を撒きて砂の大小なるものを任意に打つべきなり 凡そ人の面前に於て砂を打つべき場合には石の表面を人に向け裏面を自己の方に向けて打つべきものとす

四季の砂打

一年四季の中庭の梢も色めきて東風吹く頃は何人も氣のそはくと浮立ちて野山の遊びに目を暮らすなり之れ春の長閑なるときにして磯打つ浪の音も亦何んとなく静かにして千鳥波の上を遊びては友呼びつゝあるなりそれ故に磯より彼方沖合は洋々たる波浪は高く上りて最も閑麗かに見ゆるものなり、又濱の此方

や彼方にも里の童はへ打集い数の獲物をほこりげに打ち振りつ、遊ぶなど實に
 春は長閑なり、既に春の晚れ緑陰濃やかに若蓮池の面に浮ぶ頃に至れば海上自
 から夏の風情を呈し磯の浪音沖合の波も亦同じく静かなりとす、秋は金風颯々
 として梧桐の葉を訪れて疎林を動かす海波は高く或は荒く或は静かなり、北風
 凜烈として肌へも裂けんとするの冬季は海波凄しく又さびし、即ち四季の海は
 以上の如き風景なるを以て従つて其心して打てば可なりとす、今其法を述べんに
 は春は沖の浪磯の浪より高し洋々としてうら、かなる體を可とするなり、時節柄
 として汐干の景もよし、夏は涼しき様子を添へ浪は小さく細くきれいに打つべ
 し、秋は波の高きと其響きと打交へて荒き時もあり静かなる時もあり湧々洋々
 として廣濶に打つべきなり、冬は磯の波荒々として沖の波高くして凄然たり寂
 寞たる光景に打つを可とせるなり
 月の砂は置石によりて見立て打つべき者とす故に一々詳細に或は何石何石と之
 を此餘白限りあるの書籍に於て説明するは到底なし能はざる處なりとす、然れ
 ども法としては白色の砂を使用するなり乃ち寒水石の如き石の粉碎せられたる

ものなり、而して此れは三日月なり此は満月なりとの區別するは之れ打つ處の
 砂粉には敢て關係せざるなり、是れ一般に月を打つには白色なる寒水石の粉末
 を以てするべければなり、只其形状に差異ありて以て之を新月若しくは満月に
 區別するものなり、若し此れを初學の考察を以てすれば月は元來黄色なれば此
 にも亦黄色の砂を打つて作るも可ならんとするやのことあり、勿論其光色より
 云へば或は然らんも之を多く法とする處にあらざれば矢張り寒水石の白色に若
 かすと云ふべし、斯く論じて此處に至れば又一の疑問を生ずることあらん、其
 は旭なり、旭日は其昇らんとするや紅色なり、然れども之亦月の如く、其色に
 關係せずして白砂を用ゆるものなるや如何にと云はんが、旭日は月と其光度と
 異なる、而して之も同じく寒水石の白砂を使用すれば、其打ち上りたる景は
 月の景なるや將又旭日の景なるや二者混淆して之を看別するに煩あり、故に是
 れ月と同砂を用ゆべからざるや釋然として明かなり、然らば如何なるものを使
 用するやと云は、乃ち珊瑚の砂を使用するなりと答へんとす勿論之を小理屈的
 に云は、其珊瑚にも或は白く或は赤くなりたるものもあれども既に白色の寒水

石は之を用ひずと云ふ所より推論するも其赤珊瑚粉を使用すべきや明なり

雪

雪景を打つに使用すべき砂は之も月の砂と同様に寒水石の白砂を以てするなり、實に雪は所謂白皚々たる銀世界たれば、其趣向計劃も緜々漠々として遙か彼方の山々は杳として之を明かに眺る能はざる如き心意あるべし

雨

雨中の景色を打たんとするに使用する砂は地砂をばさびくと打てば可なり、又雨後の晴れたる景には砂を洗ひたるが如く看せしむるものとす

雑

遠き景色を打たんとするが如き場合に於ては小砂を使用するなり、又近き景色を打たんとするには乃ち稍や大なる砂と小なる砂とを宜しく配合して使用すべし

石

石を立てる方法

天地間に存在する處のものは何物と雖も表裏あり紙片の如き薄きものにては尙且表裏あり、天地陰陽に應じたる盆景の石材に於ても亦然りとするなり即ち表あり裏あるなり而して其表になるべき面を方位の南とし裏となるべき面を北となす、既に南北あり必ず東西あるべきなり即ち其左面を以て西とし右面を以て東とす、而して置石を盆の真中に置くは眞の法なれど或は左に偏し或は右に偏して置くは稍や畧法と稱すべし、尙ほ詳細の事實に至ては一小冊子の鮮白なる之を羅列して一々之が方法を報道する能はざる所なり

四季

春は草木將に芽を出さんとして四方の群山青色を呈し漸くにして百花爛熳として野に山に至る處長閑なり、夏期や既に來れば山色の青色は變じて黒色となり涼風の吹く處談聲を聞くなり、残暑の暑さも早や過ぎて黄雁の一群は金天に翔る山野の景は錦を以て織るが如く其美麗なること賞賛するも容易に之を賞賛し盡すこと難きなり、蓋し此比に

は他に花もなく又未だ白妙の雪も見ざるなり
奥山の紅葉の色益々濃く日毎に賞する人絶へざりし其賑ひは昨日となり、空吹く風もあだ寒くなりし雪片庭に舞ふは冬の季節なり

雑

縦合時に於ては積雪は見ざるとも日陰の麓の白きはよしとするなり、若し時に於て雪もなき場合に於ては其山下には雪あるをよしとせず、日陰の雪と云ふべき石は表面は一面に黒くとも、其裏面は一面に白くあるものなり

山の中位を一體に周匝する雲は可なりとす、若し山麓にあるは雲にあらざるなり

一見谷川の如く見ゆる白色は山上山下の處を嫌はざるものとするなり

一色の石とは青色一色 黒一色 白色一色を云ふなり、然れども此の以外の一

色は使用せざるものあり

神事には神に縁故ある石を立つるを以て法とするなり

佛事には支那の靈鷲山の如きは形どるべきなり

祈禱をするが如き場合に於ては降神石と云ふ石あり之を使用して打つべきなり
祝言のときには陰陽石などの石あれば之に従つて使用するべきなりとす
尙ほ其他百般の事實即ち人の將に旅行せんとするが如き家屋の新築落成せしが
如き、除目せしが如き、知人の追善供養をなすが如き等に關して打つべき益景
は夫々其法其式あり今此を一々詳述するは甚だ煩なり且つ一家の秘傳として容
易に衆人に發表すべきものにあらざる故に此石に就ては先づ擱筆すること、せ
ん、尤も後章専門先生の論説に於て或は報道せらるゝやも知るべからず、何れ
にもあれ此等詳細の事實否事秘傳として代々傳へられたる諸法は順次専門先
生に就て修業し其結果として得るにあらざれば、縦令今此處に於て説述するも
趣味なく風致なく只一方法のみとして終らんのみ、秘事は矢張秘する方宜しと
すれば敢て記述せざるも幸に怪む勿れ

島

島を形成するには其島の見工合に由りて其打つ方法又異なるものなりとす而して先其島の前面を打たんとするには平面の打つ方即ち上より其の景を見下した

る處を打つなり

山

山を打つ法も前述の島を打法と同様に山を見下したる景を打つべきものなり故に此れも亦平面打なりとす

月

月の如きは島或は山の打方の場合とは大に異なれり、島山の前部は平面打なれど月は縦面に見たる體を打つべきものとす縦面とは横手より縦に見たるを云ふなり

雨

雨の打方に至りても亦た月の如く縦面とするなり、遠山の打方も亦然りとす

山

山景を打たんとするには大石一箇或は二箇を使用するものあり、若しくは大石と小石とを數箇混じて使ひ、先づ前面となる山若しくは島は其景の主要部となるべきものなれば其れより打つべきなり、而して此島は添石を以て其根をべら

る、なり、此景の淺瀬の汐若しくは沖の方にある洲を造くるには前述粟粉石を打つものとす、此の淺瀬の汐干若しくは沖合の洲は匙子にて粟粉石の適量を掬ひとり撒きて後寄定規の使用に據つて形を造るなり寄定規を使用せずして形を造らんと欲すれば寄羽根あれば之を使用すべし

遠き山景を打たんとするには、打羽根にて浪粉をすくいとりて拇指と人指指との先にてつまみ右手の甲を左手にて打てばよしとす、然れども盆景に斑點状を造らざる様に注意すべし之れ屢々あることにして初學者輩は毎景此斑點状を一方には浪粉堆積し一方には浪粉稀疎となるなり、而して寄羽根を以て適當に跳ね若しくは寄せて以て形を整へるなり、形整ひたる後には打羽根を以て打つべき粉砂を掬ひ寄羽根にて形を造るなりとす、是れより順次同法に依て薄々次第次第に小さく打てば乃ち遠山の景を得べきものなり
前山を打たんとするときは前述の島を打つと大差異あることなし、其位置を作るには即ち或は山脈の全體に非ずして只其一部分のものとか若しくは山の或る一端を思ひて盆の左若しくは右の縁より出でし如くに打ば可なり

波打

打羽根を以て浪粉を掬ひて打波 寄波 漣波等の區別はありと雖も、先其の事は次に於て述ぶるとなし此處に一般の方法としては、其掬ひたる浪粉を或は濃く或は淡く一見之を識別すること難しと雖ども能くく觀察すれば其濃淡の境界を認識し得るが如き度合を以て浪粉を打つべし

打波は波羽根を左右一文字に摘みて之を前面へ押し進めるが如くにして打てばよろし

寄波は打波の如くに波羽根を摘みて自分の前へ心持押ゆるが如き工合にて打てば可なり

漣とは海若しくは大河に於て起るものにあらず必ず池若しくは河若しくは湖等に起るものなり其打方は切込の深き羽根を以て左方より右方へ描くが如くに打つものなり

而して打波 寄波等は浪羽根にて描きたる後に於て浪頭打を以て波の頭を作るものなりとす、其内にも此打浪は飛浪打の器具を使用して點々を打ち添ふべき

ものとす寄波に於ては之に及ばず

島

島を打たんとするには浪粉を寄羽根にて掬ひて後其羽根を以て之を寄せ若しくは跳ねて島の形を造るべし

散石

水面上に其上部の幾部分かを露はせる石を打つには夫々大石小石及び中石を適當に配合して其位置を調ふべし、又島根の小別れとなりて水面上に其頭角を表出せるものも同様なりとす、但し一は稍や近づきてあり一は稍や離る、が如くにして打つべし

川

川流の景色を打たんとするには打羽根を以て浪粉を掬ひて能く注意して其盆面に濃淡の處なき様に打つべし漣を描くに小なるものは其儘になし置き、大なるものは宜しく波羽根を以て漣を描くなり其漣の打方に於ては素より稠密の處及び稀疎の所を作るべきなり

橋を打たんとせば橋定規なるもの、削りたる部分にて浪粉を掬ひたる後に其橋を打たんとする場所に持行き其處に之を置くが如く盆面に接近して之を据え定規を持ち居る手の甲を極く軽く打てば浪粉は落ちて盆面に橋を見るなり、此等は實に七分三分の兼合とも云ふべき所にして、其手の打ち様に依ても往々失敗を得ることあるものなれば熟練を要するは勿論なれど其熟練に至るまでは十分注意して打つを要するなり

月

月は之を打つに矢張り定規的の月打具なるものあり、故に之を打たんとするに先づ月打具を置き浪粉を打羽根にてすくひて之を打つなり、其月の形状に依て器具を使用すべきことなり

雨

雨の景を打たんには打羽根にて浪粉を極く淡泊にしてたまらざる様に打ちて後波羽根を以て此れに條目を立つるものとす、而して其條目の入り工合に由りて

は或は吹き降りとなり或は驟雨ともなる、乃ち其條目にして斜ならんときは吹き降りにして、真直に而かも勢あるときは乃ち驟雨なりとす

雨中

雨中の景を打つときに當りては其砂打機は小砂にして細かく打つもの

雨後

雨後には砂あらひたるが如くに打つべきなりとす

雲

雲は之を打たんとするには先づ其の初めに雨を打ちたる後に、雨の上部の部分に當りて浪粉を打ち、匙子を以て極く軽く押へるべし若しくは強く押へて以て盆の上部なる處、即ち兩頭の部分を打ち消して宜しく濃き所淡き所とを凹凸に作るべし

晴雲

晴雲の景を打たんには極くく淡泊なる様に浪粉を以て横に一直線を打つべし、此一直線は互に重なり合ふが如きことなくすべし、斯様に此一直線を打つこと

十数回順次に引くが如くに打てば可なり

霞

晴雲と霞とは元來同様のものとして考へらる、故に霞を打たんとせば前の晴雲に於ける如く順次に淡き一直線を横に打てば可なり

雪

凡そ雪の景を打たんとするには先づ置石も益も悉く黒色たるを要するなり、是れ積雪豊々として一面銀世界と云ふが如き景にありては色合の配合上より純黒の器具の方を使用するなり、而して積雪の景にあらざる場合即ち残雪の如きは一般の法に於ては打粉の極々淡白なるものを使用して全面に打ちつ、目立つて知れざるが如くに或は疎なる處、或は密なる所を作るべし

第五章 盆景圖解

江の島 (相模)

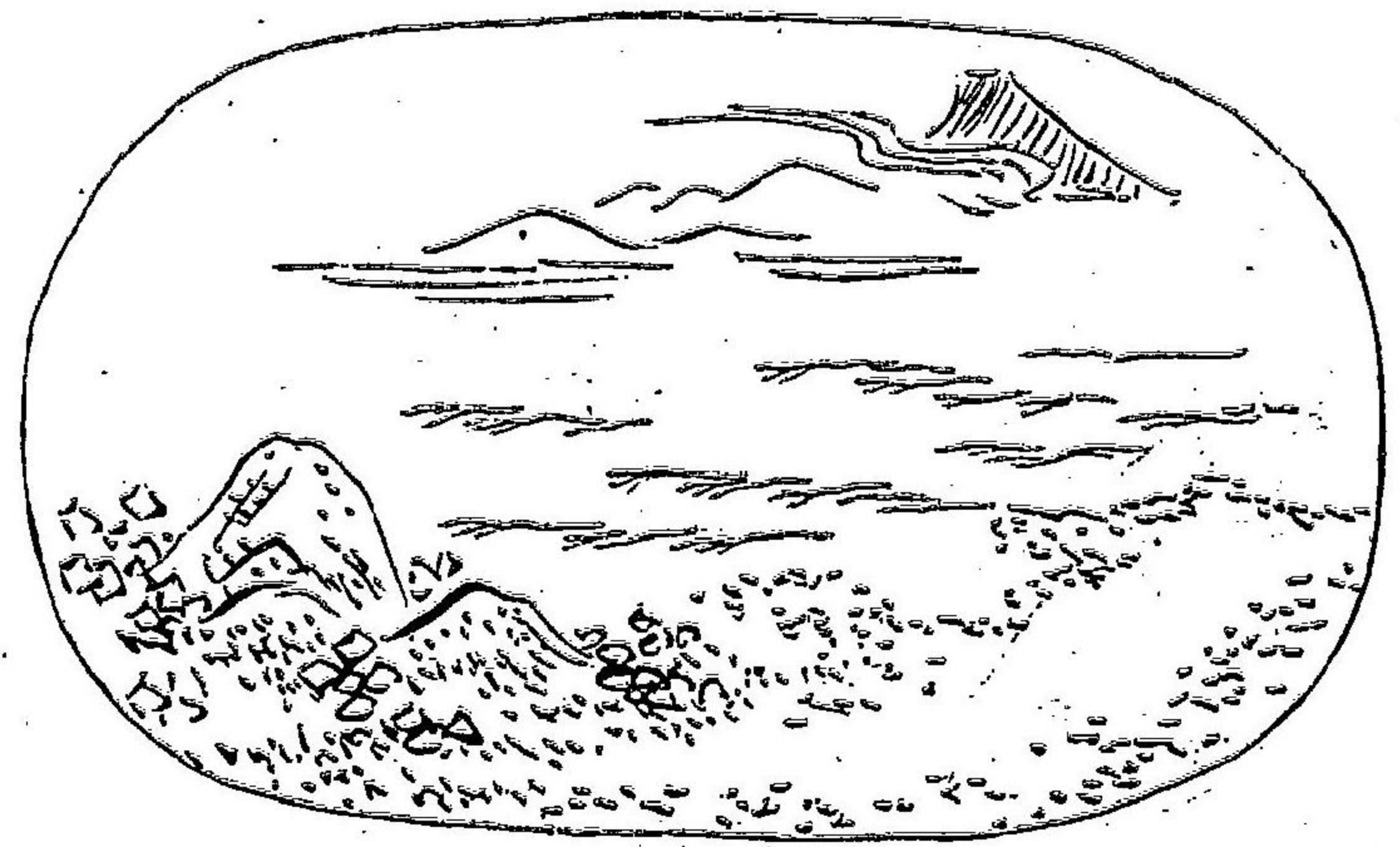
みやはしら

ふとしきたて

よろづ世に

いまそさかへん

鎌倉の里



不二川 (駿河)

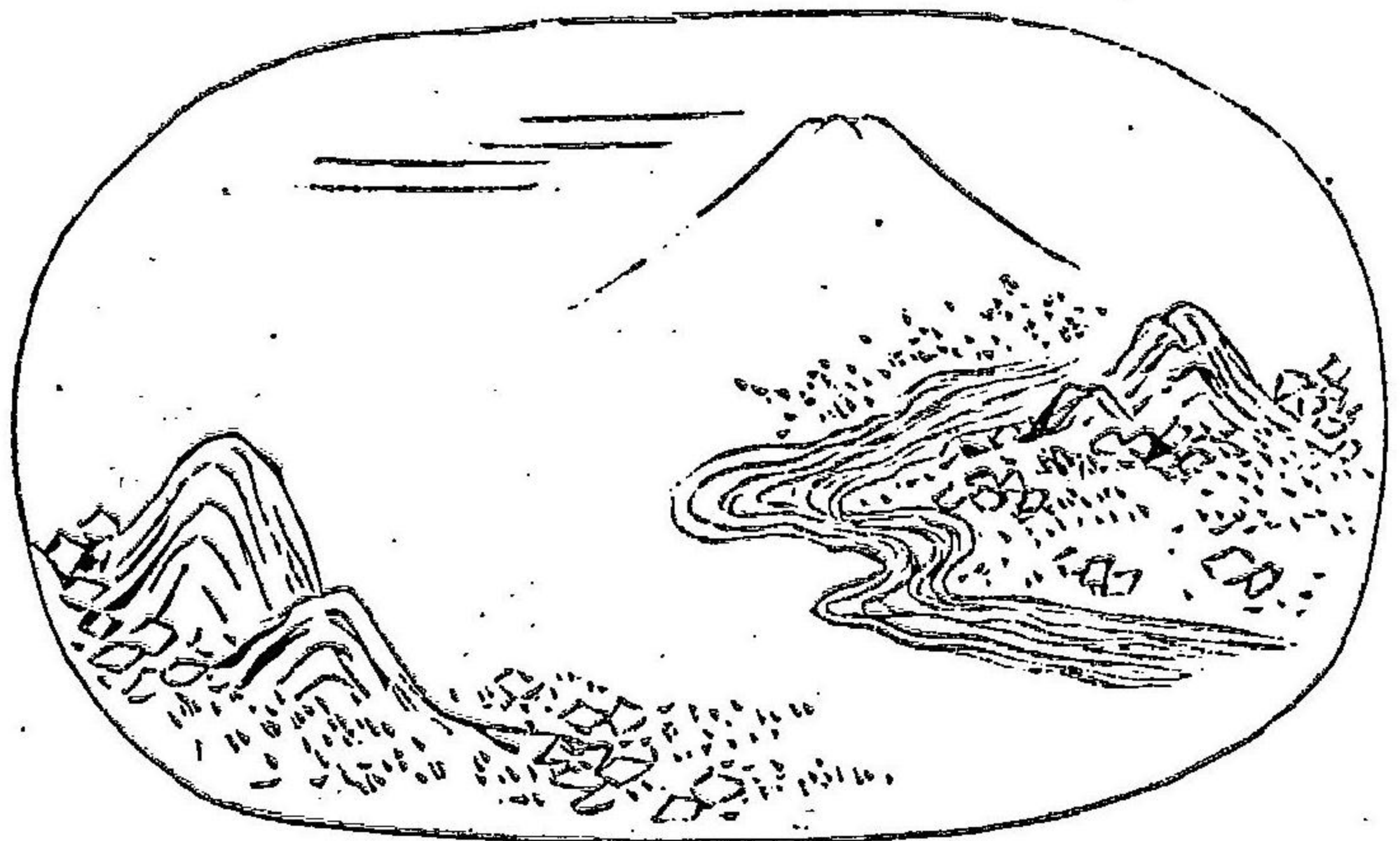
ふねよらふ

不二の川津に

ひはくれぬ

夜半にや行ん

浮島のほら



住の江 (攝津)

いとまあらば

拾ひに行かん

住の江の

岸によるてふ

戀わすれ貝



山崎 〔山城〕

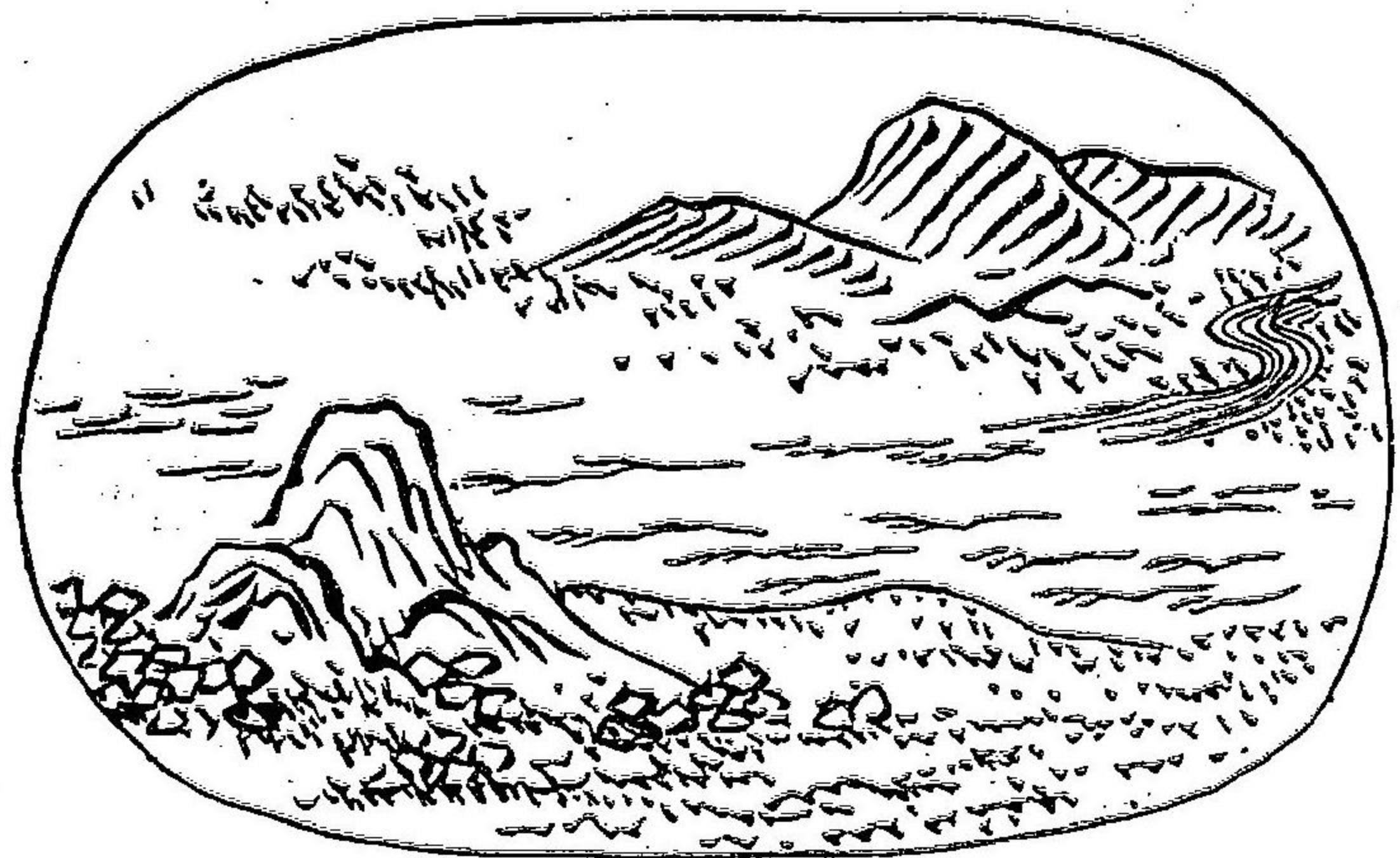
やまざき

向ひの雲の

ひとつらは

淀の川瀬に

しくれきにけり



待兼山 〔攝津〕

こぬ人を

待兼山の

本くらき

かたふく月の

かけになくなり



鈴鹿川 (伊勢)

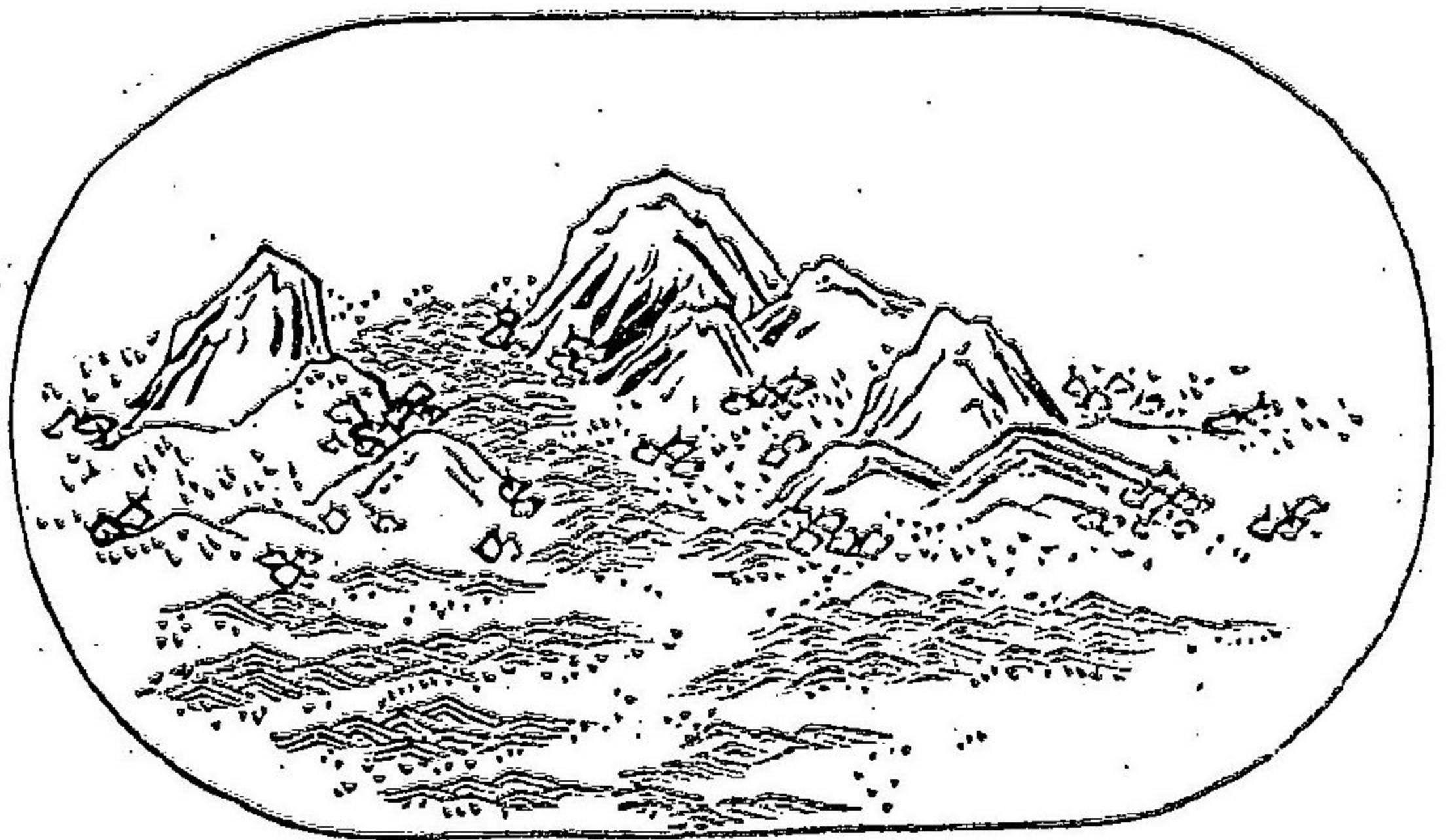
鈴鹿川

ふかき流を

つたひきて

なを末とほき

君か御代かな



瀧名 (遠江)

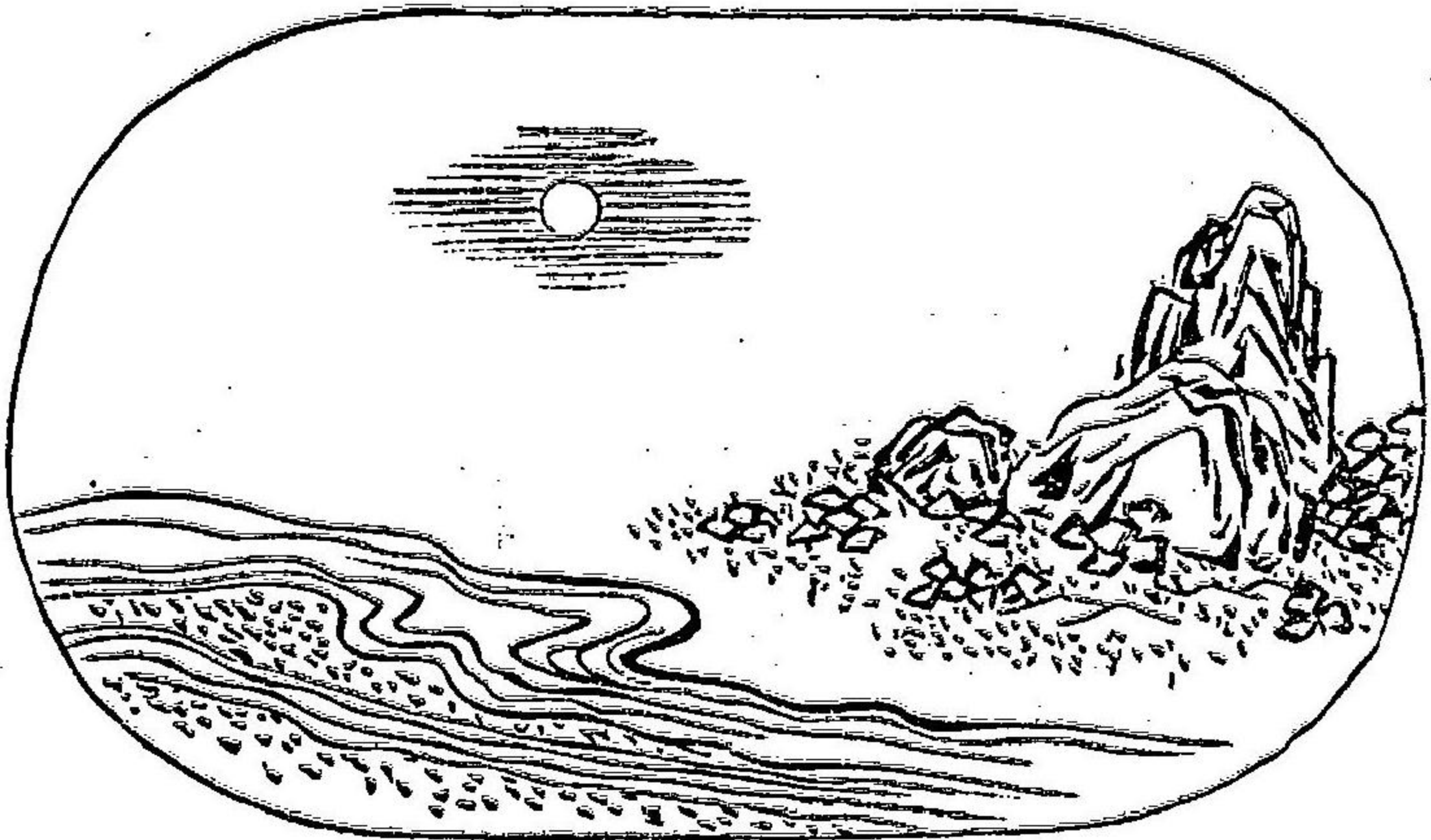
すみわたる

光も清し

白妙の

はまなの橋の

秋の夜の月



神島 (土佐)

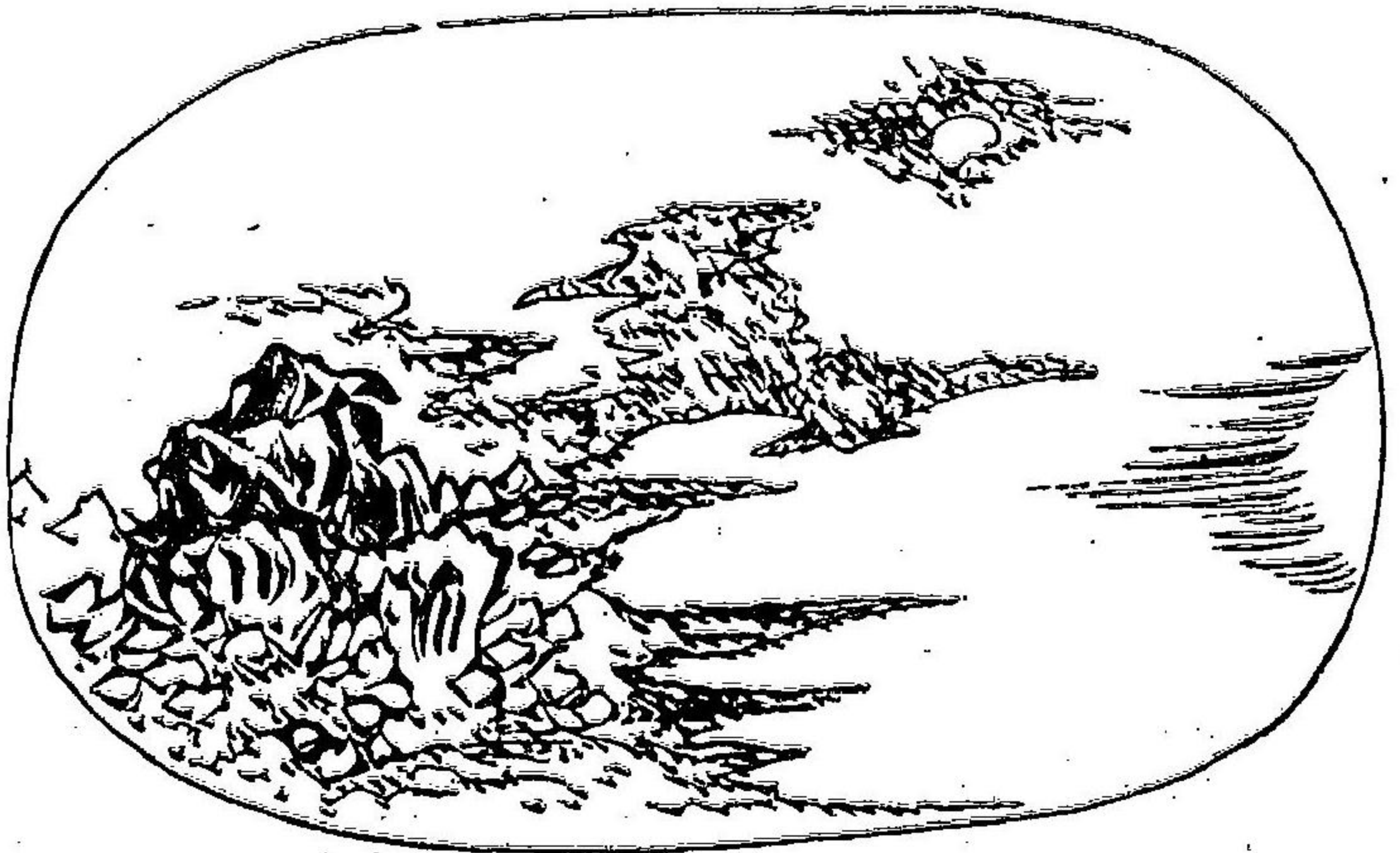
ちはやふる

神の小濱に

ふねとめて

おほさき見れば

月のさやけさ



小餘綾 (相模)

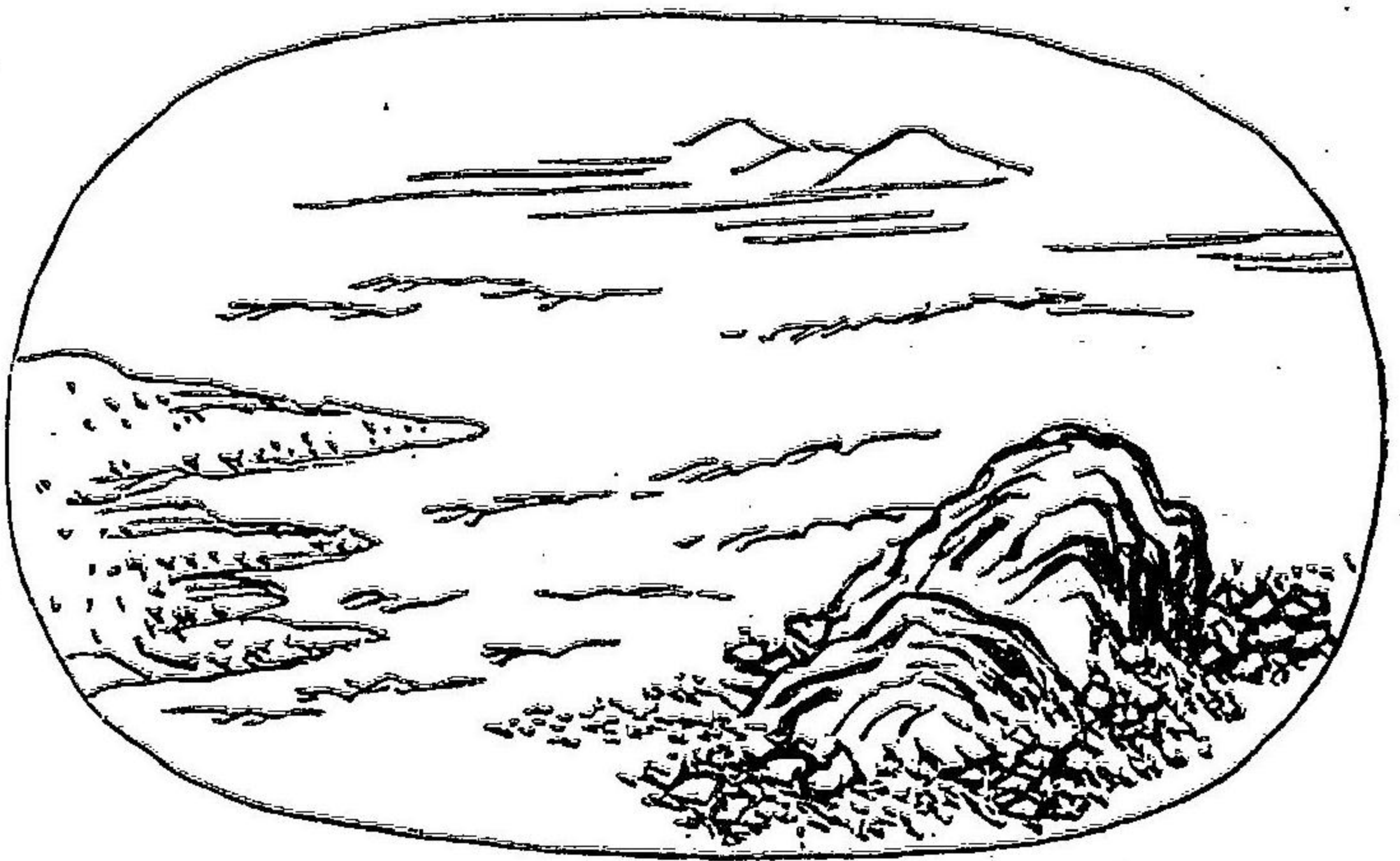
君をおもふ

心そひとへに

こゆるきの

磯のたまもや

いまもあらまし



丹鹿島 (播磨)

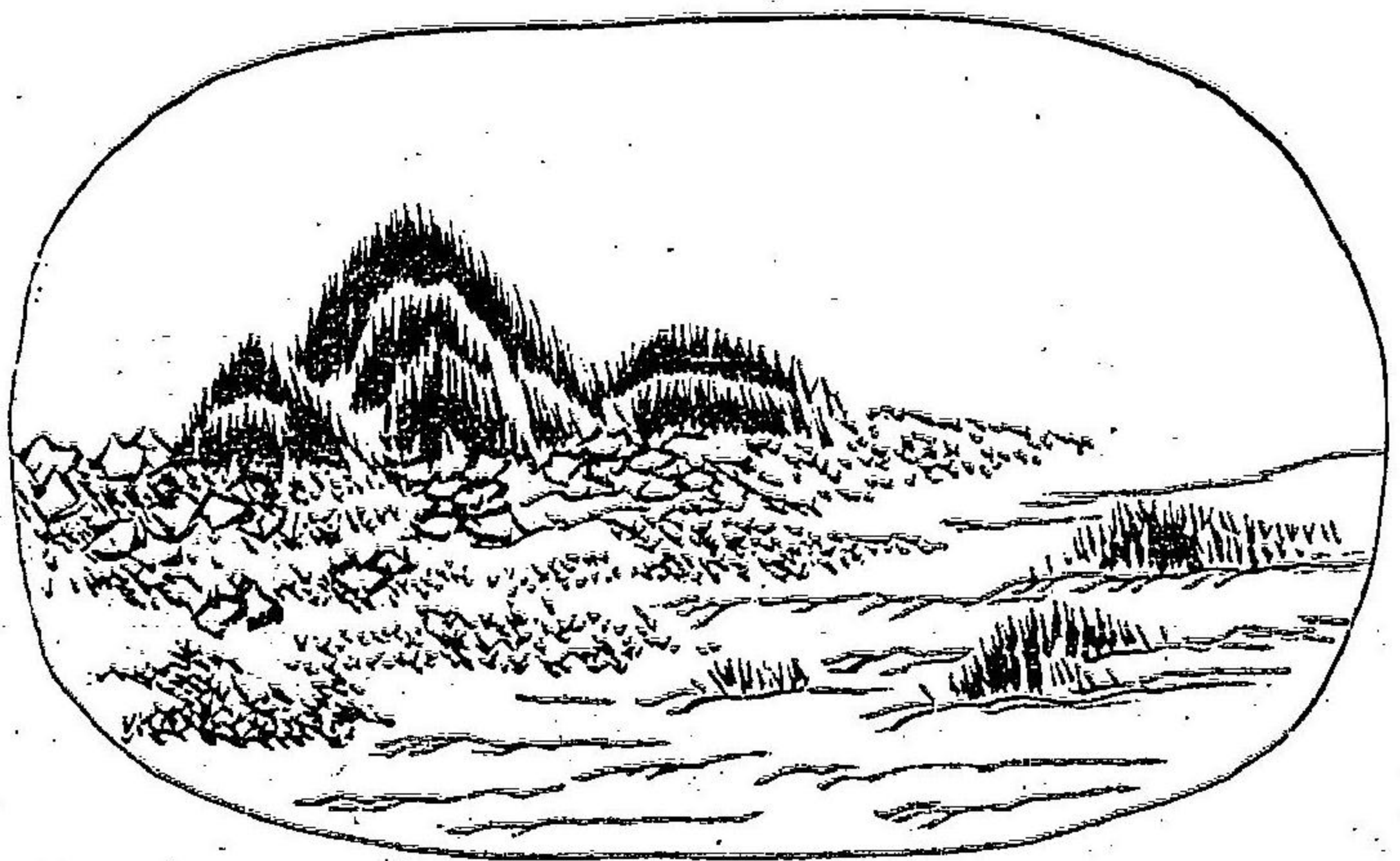
月かけの

さすに事なく

行舟の

明石の浦や

とまりなるらん



須摩浦 (播磨)

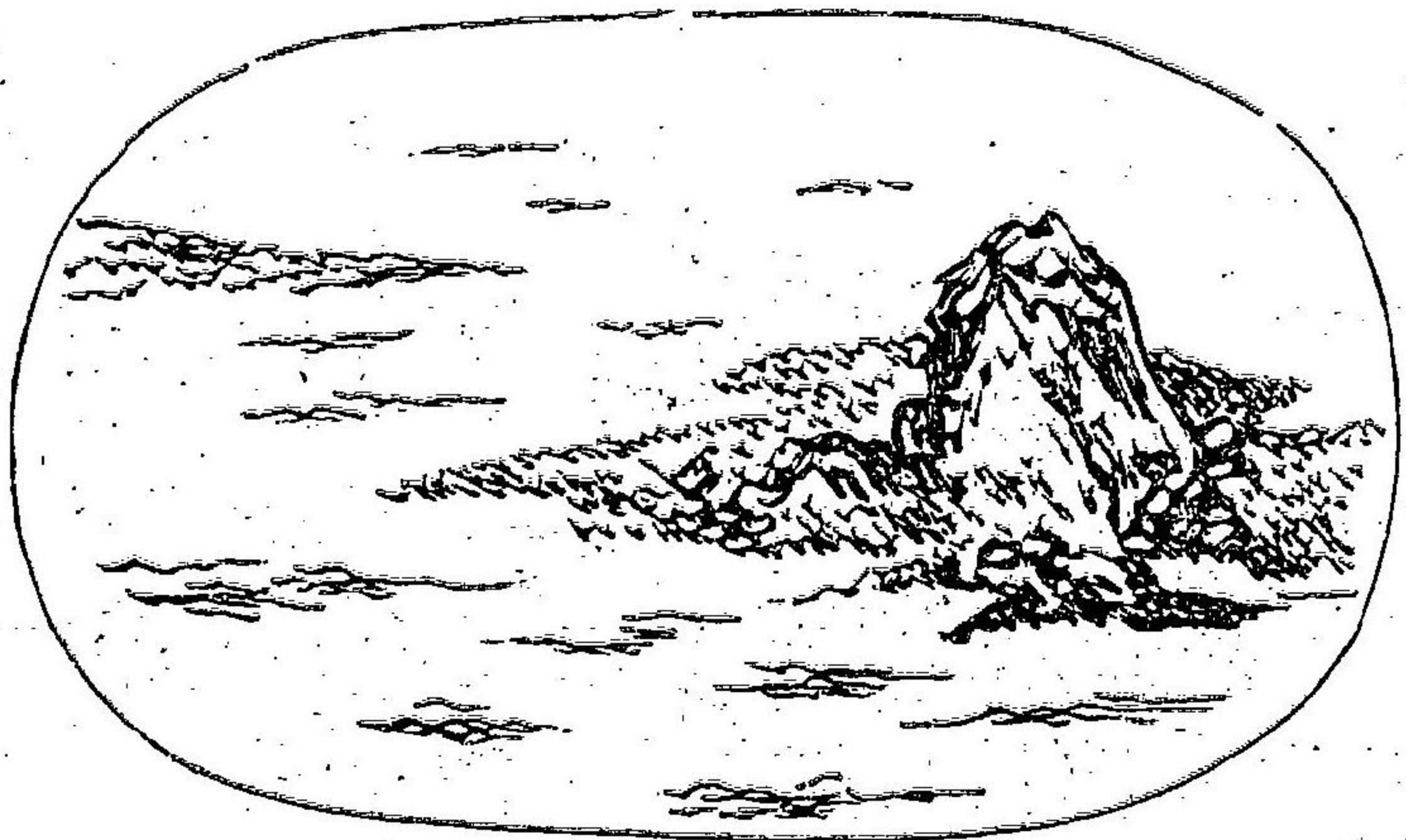
播磨路や

心のすまに

さまみへて

いかて我身の

こひをとめん



吉野川 〔紀伊〕

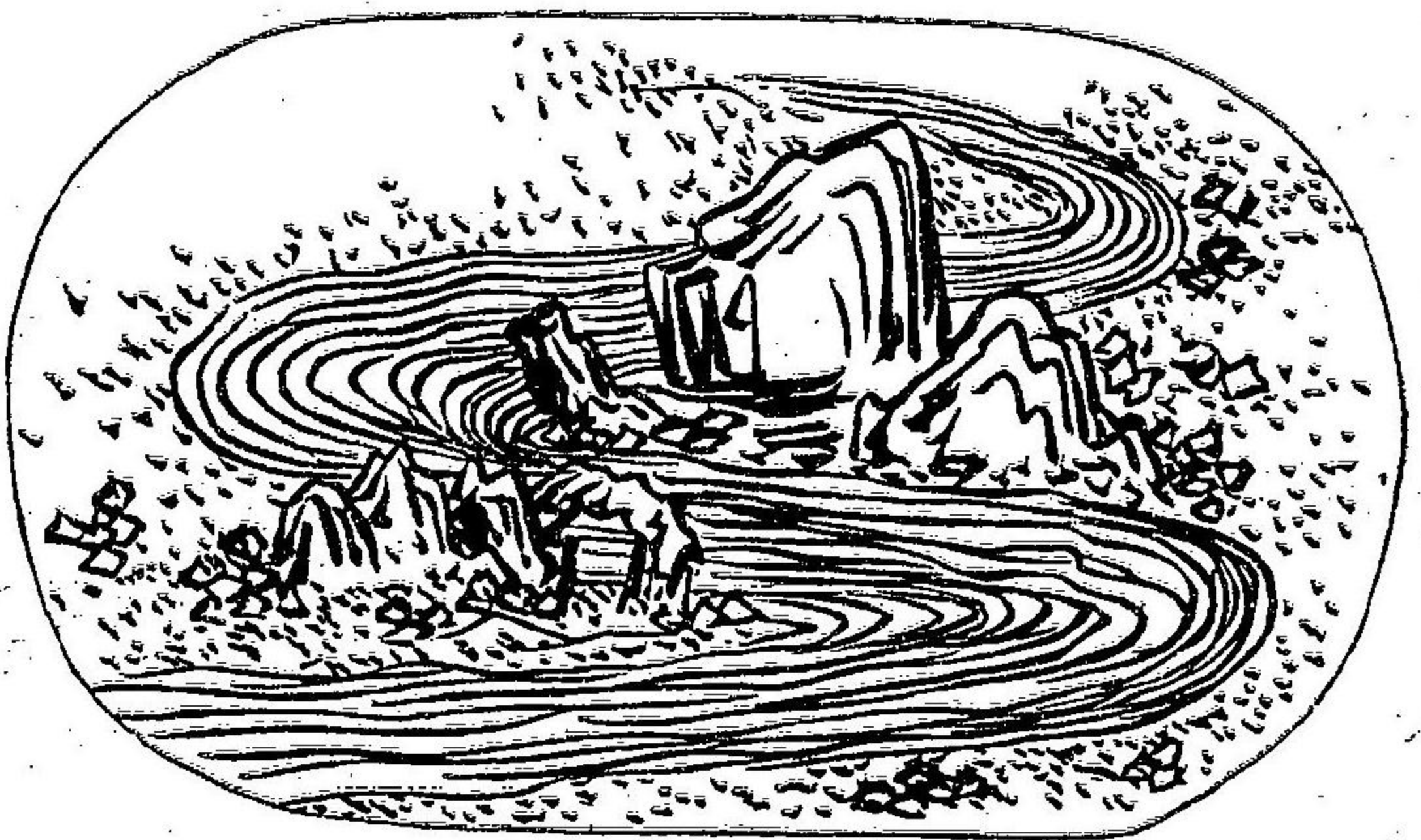
よしの川

たきつ岩根の

白妙に

あさみの花も

さまにくらしな



うち川 〔山城〕

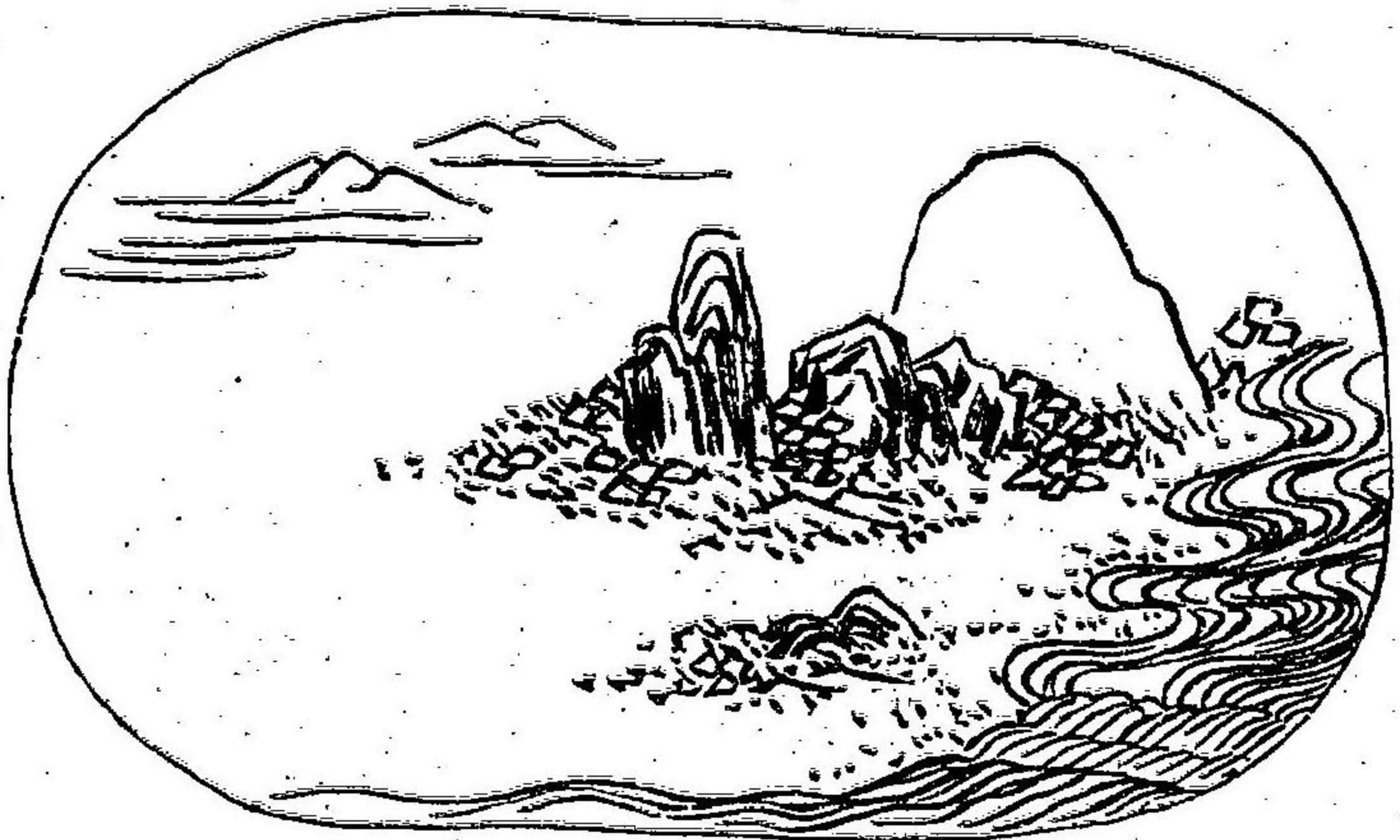
ものれふの

八十氏川の

あしる木に

いさよふ波の

ゆくえしらすや



淡路島 (淡路)

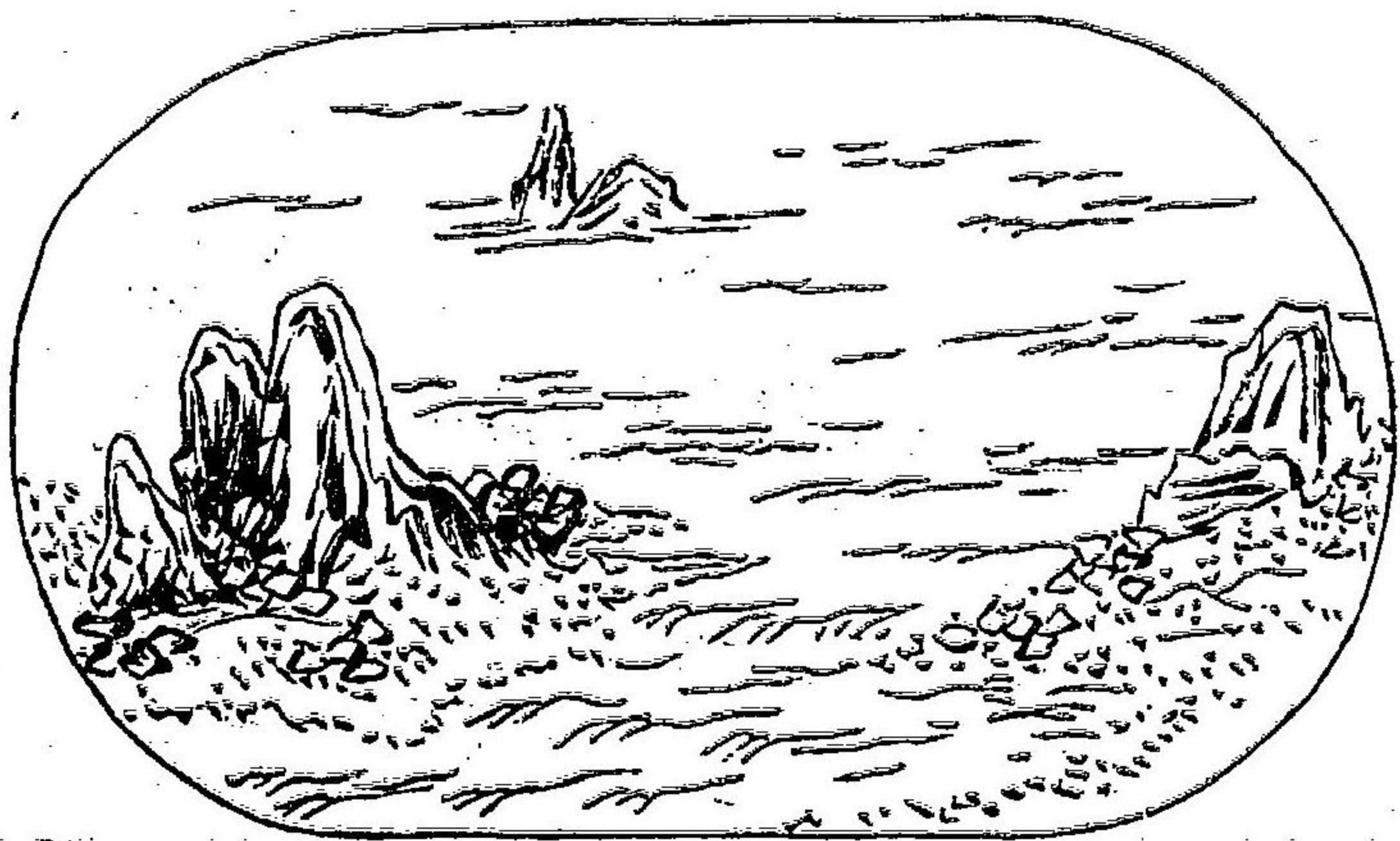
もしほ焼く

烟たちしく

みわたせば

うすくもかゝる

淡路島山



芙蓉嶽 (駿河)

朝日さす

高根の深雪

空はれて

立も及ばぬ

ふしの川霧



しかまつ 〔播 磨〕

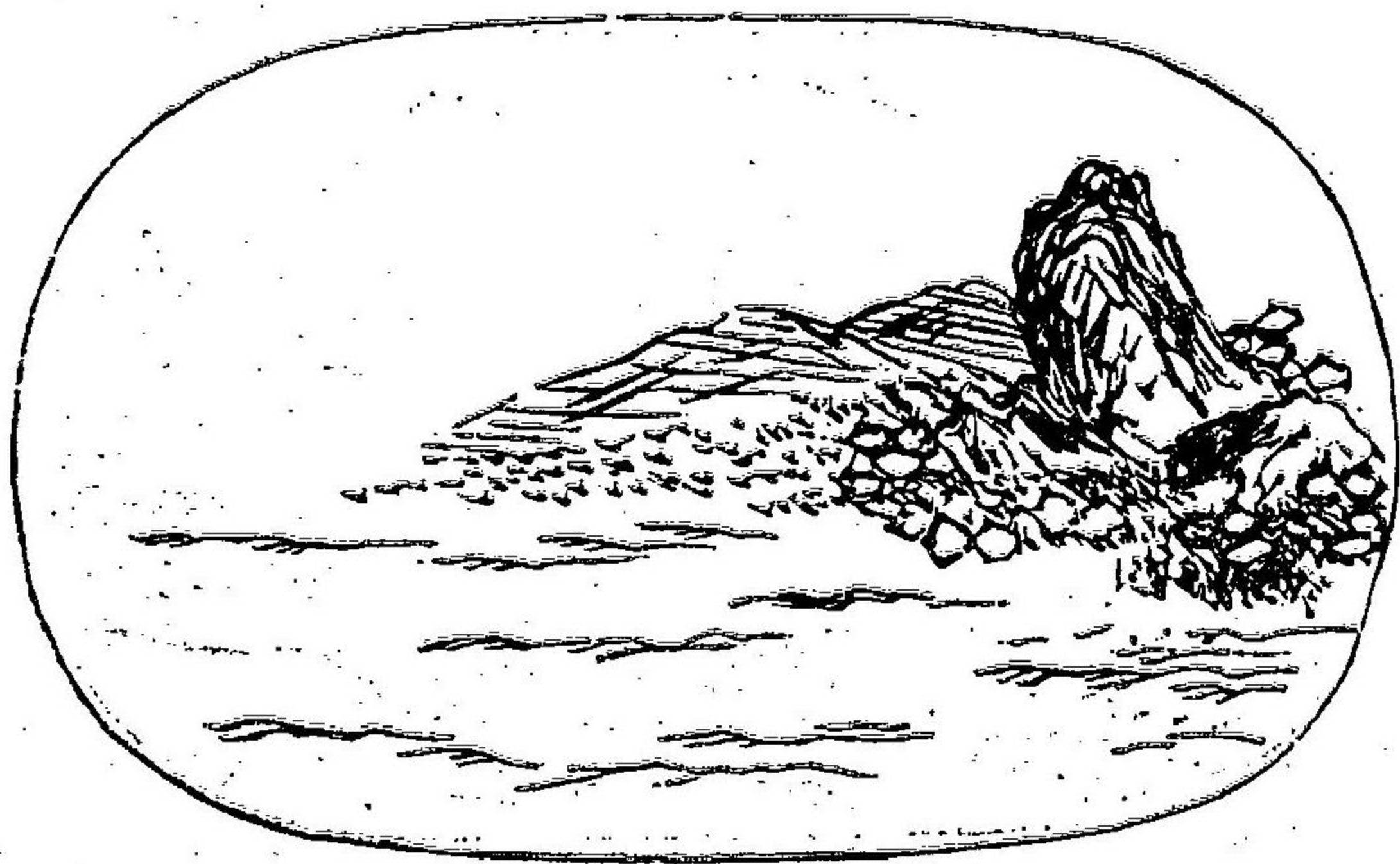
いにしへの

あるよりもこき

御世なれや

しかまつ浦の

色をみるとも



青羽山 〔若 狭〕

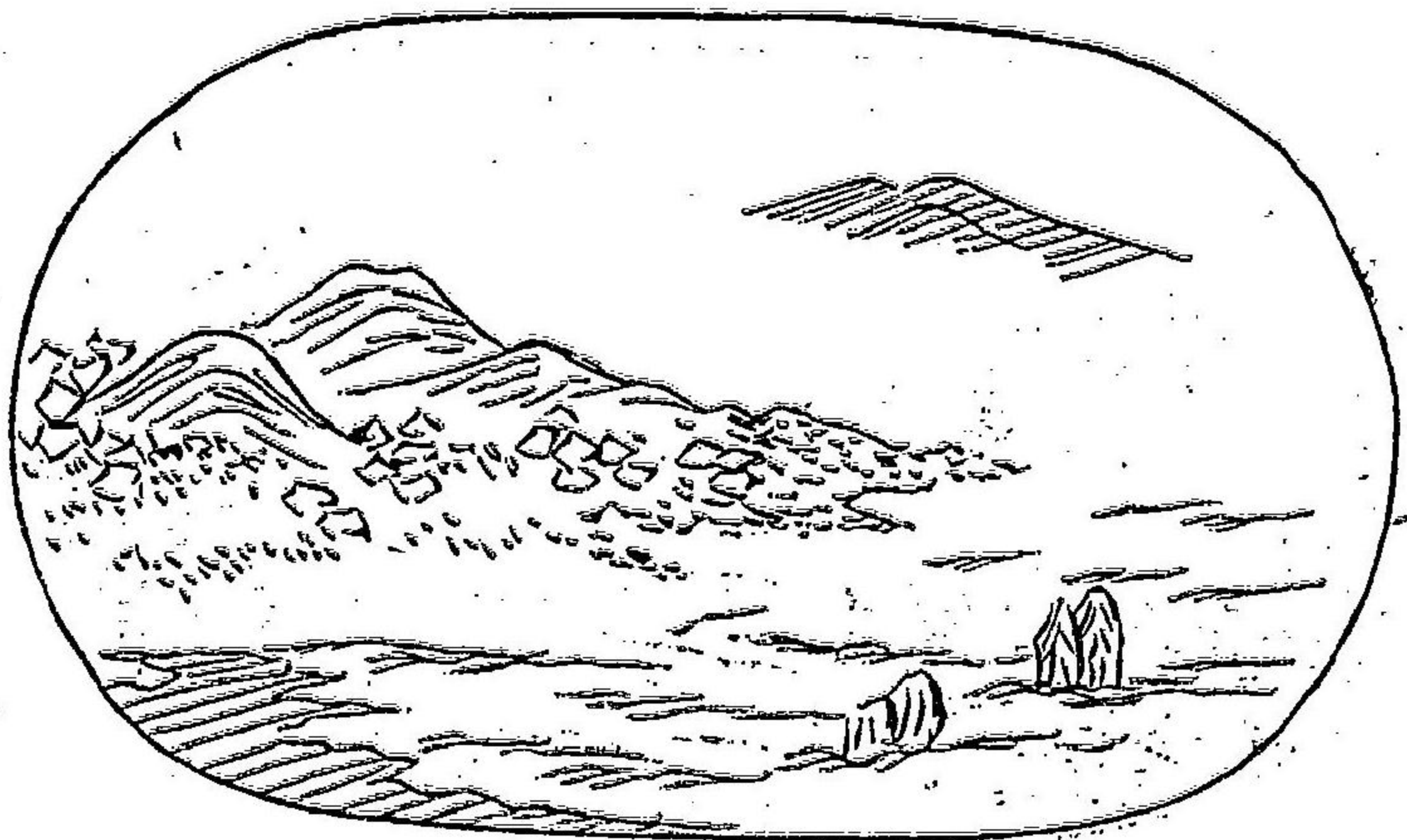
たち寄れば

涼しかりけり

水鳥の

青羽のやまの

松のゆふ風



志ほ志り嶺 (信濃)

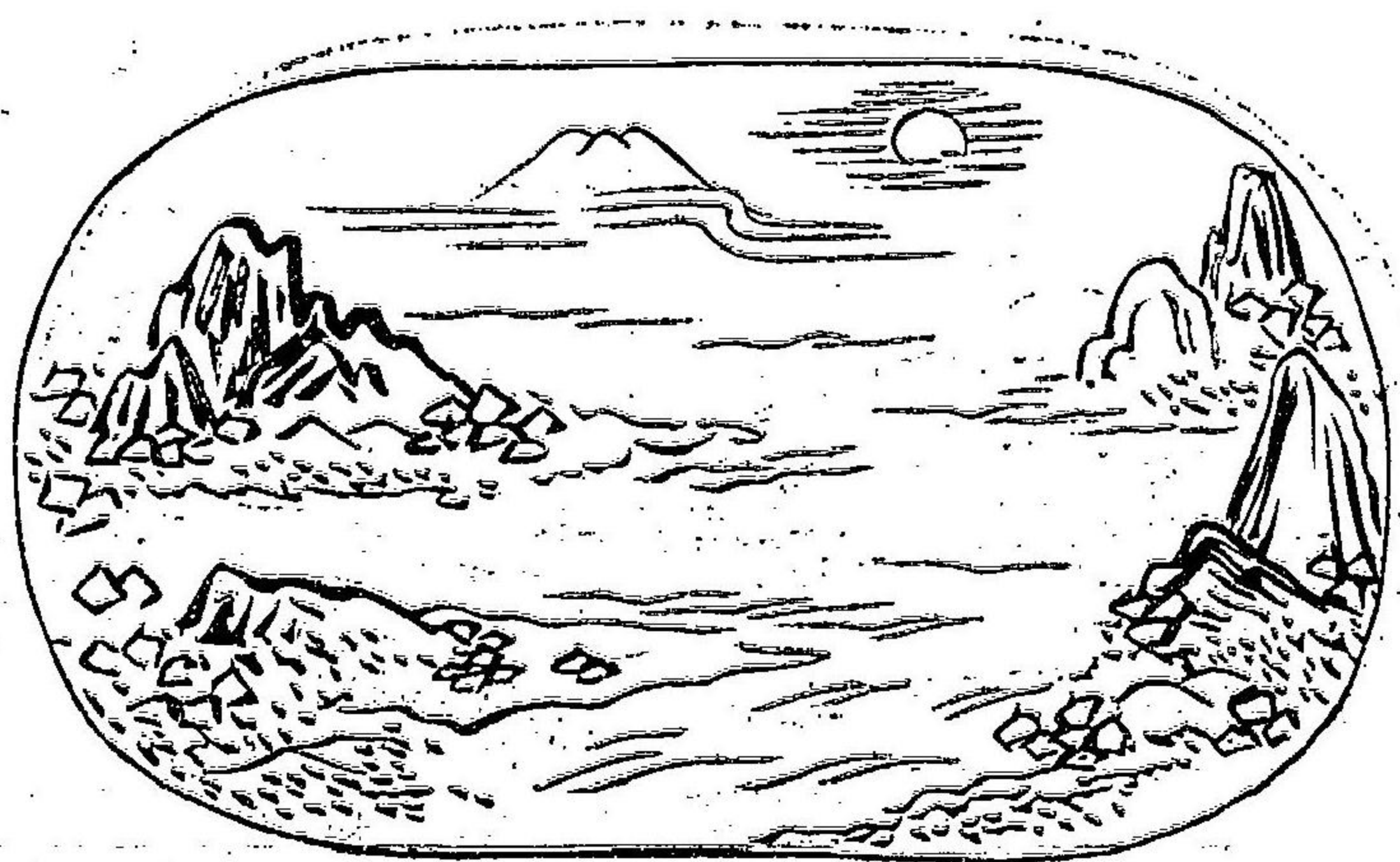
まだしらぬ

月より上の

かよひ路は

氷をわたる

すはのとわたり



鳴立澤 (相模)

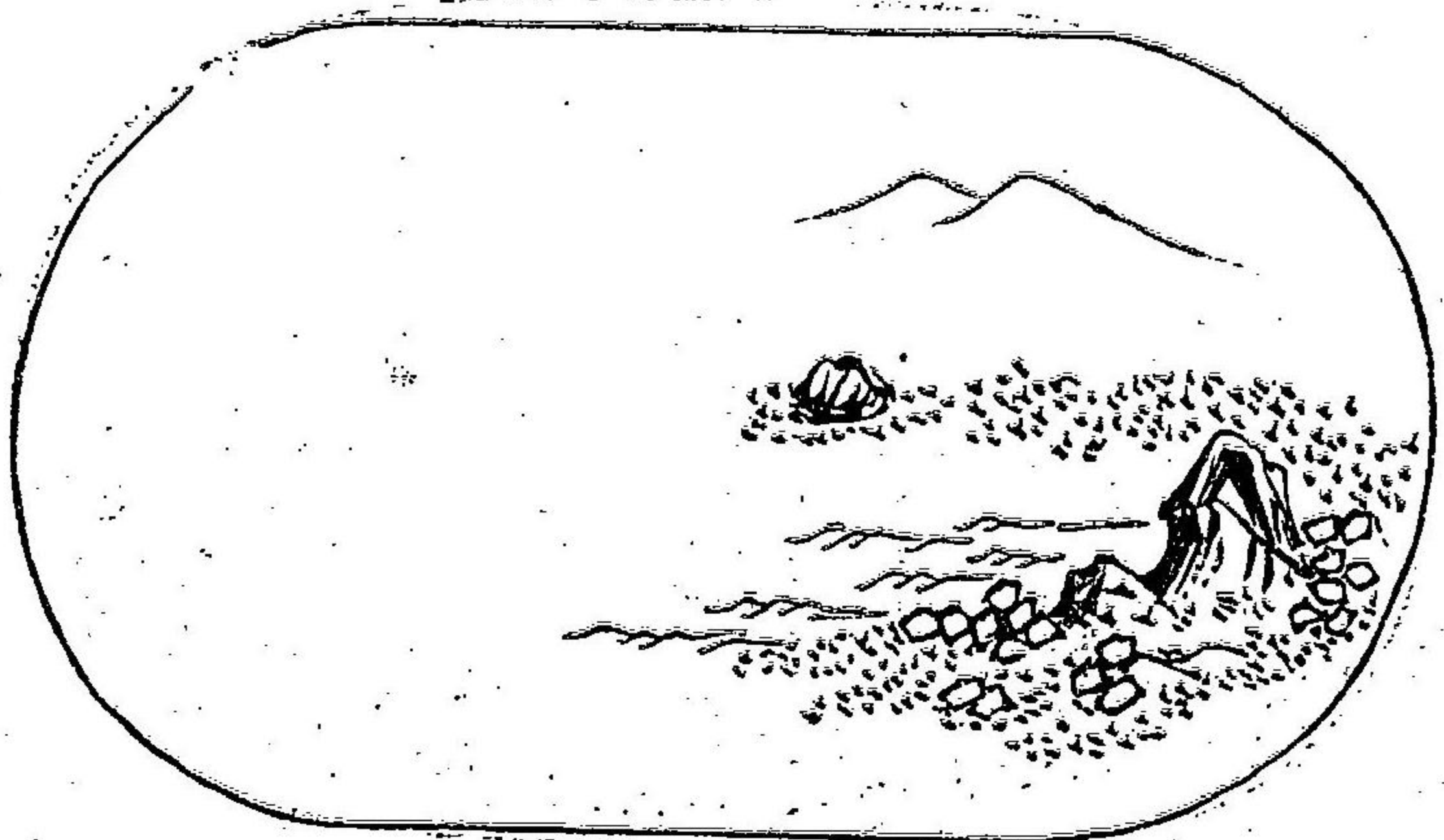
あはれさは

秋ならねとも

知れにけり

鳴立澤の

むかしたつねて



野中清水

〔播磨〕

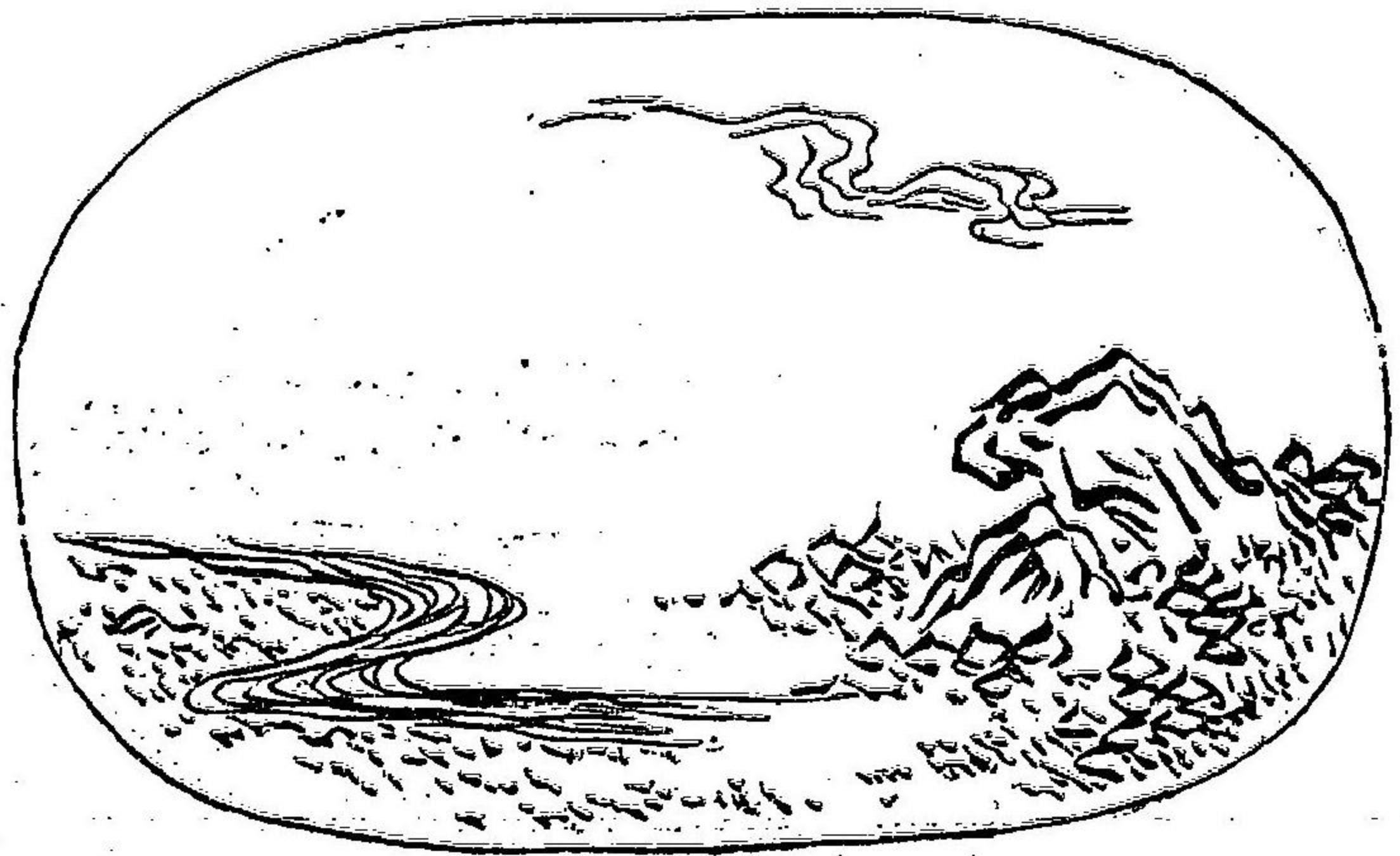
いにしへの

野中の清水

ぬるげれと

もとの心を

知る人そしる



那智の瀧

〔紀伊〕

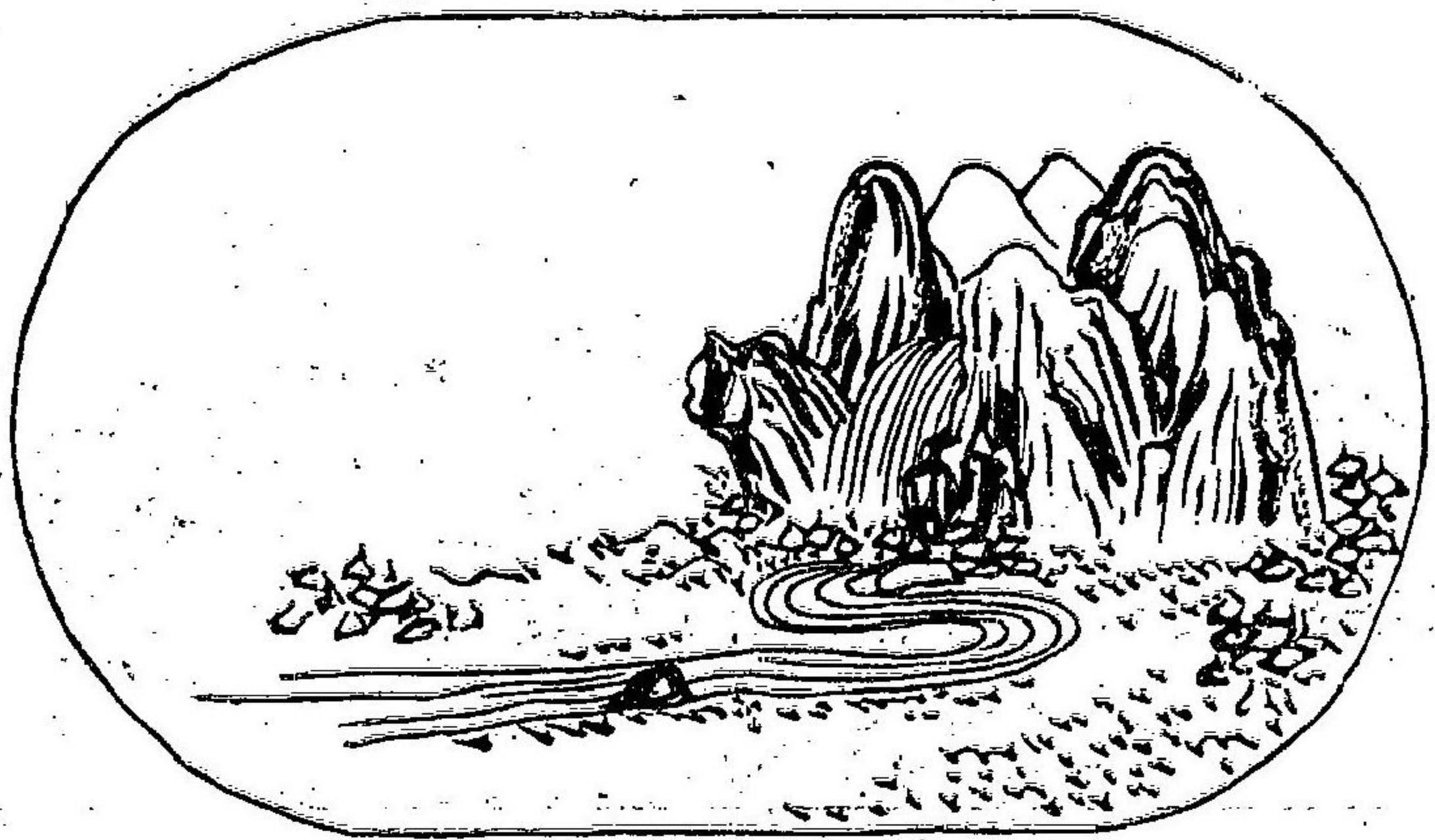
身につもる

こと葉のつみも

あらはれて

心責めける

みかされの瀧



高津山 〔看見〕

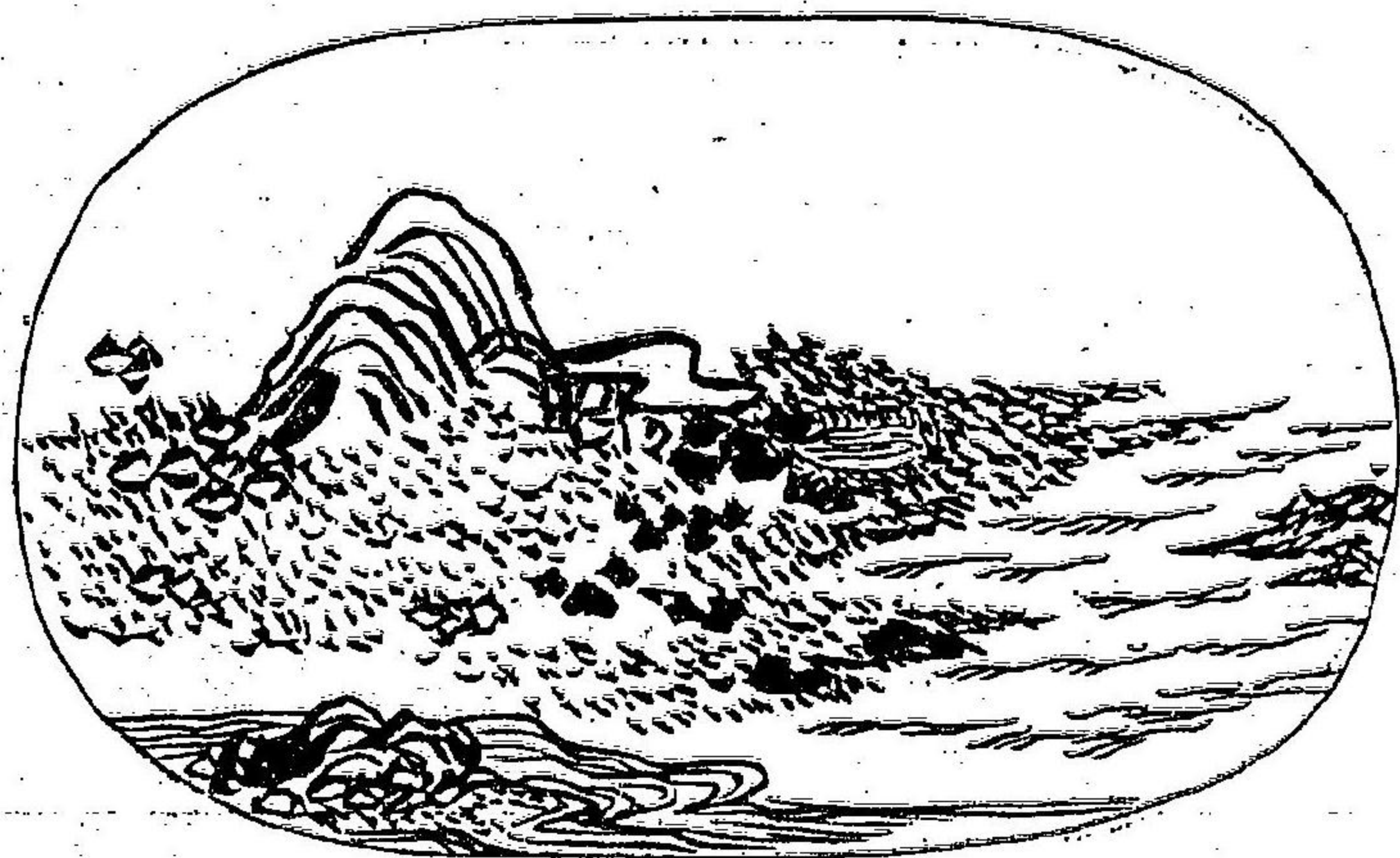
いほのかた

高津の山に

雲はれて

ひれふる峯に

いつる月かけ



あさかの沼 〔陸奥〕

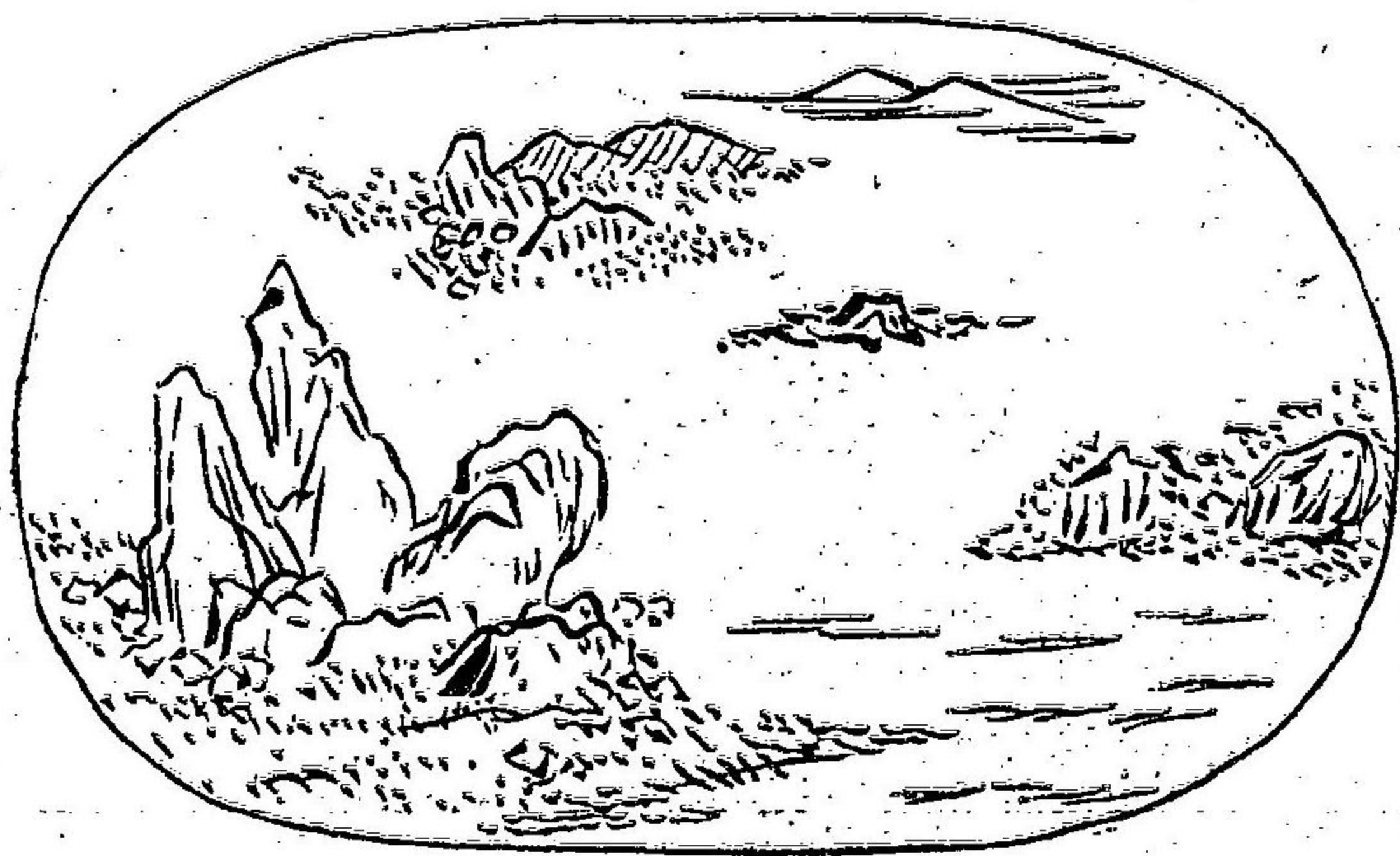
むつのくの

浅香の沼の

はるかすみ

かへみる人に

こひやとゝかん



淺澤沼 (攝津)

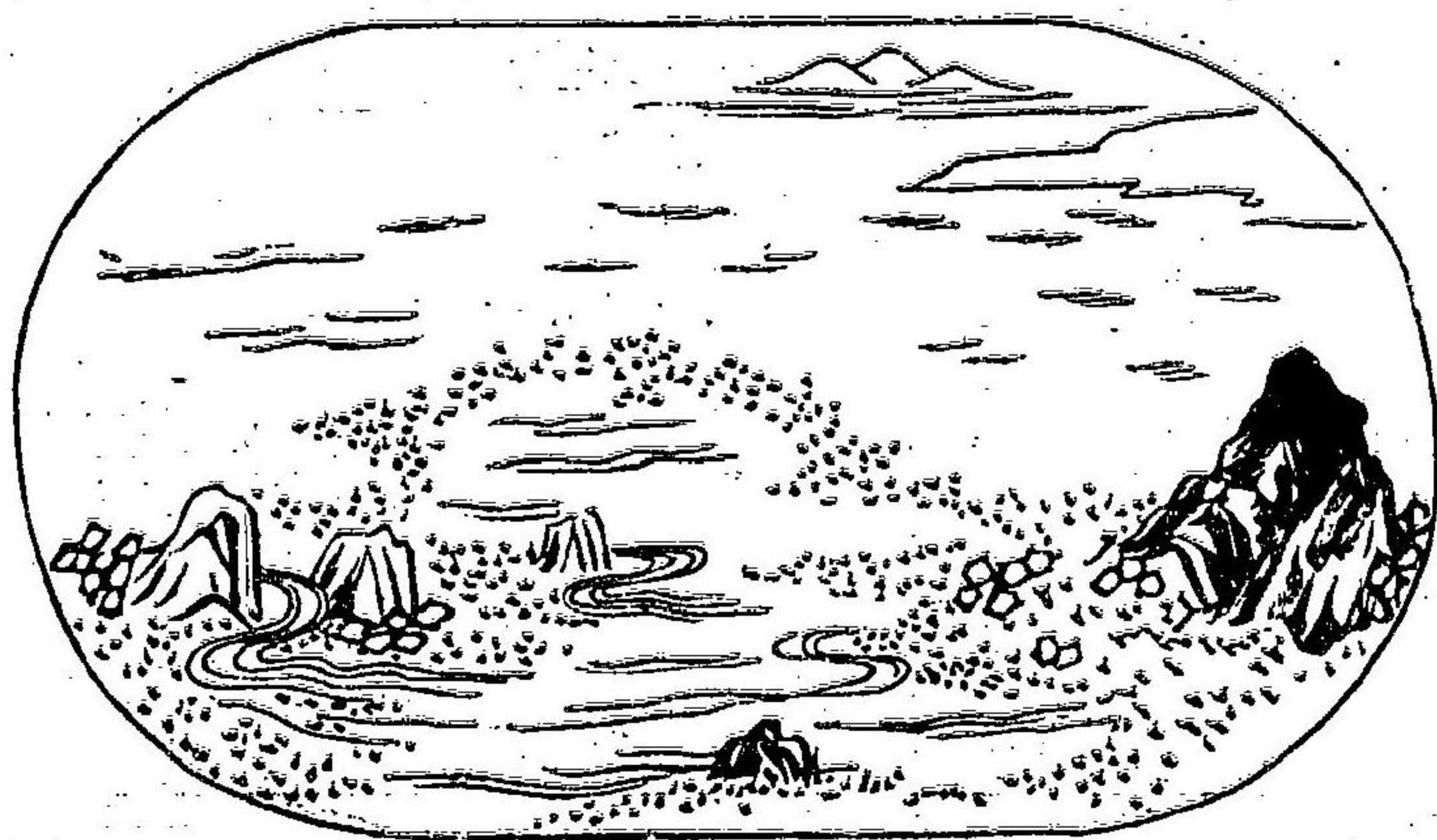
かきつばた

あささはぬまの

ぬま水に

かけをならへて

咲き渡るかな



明石浦 (播磨)

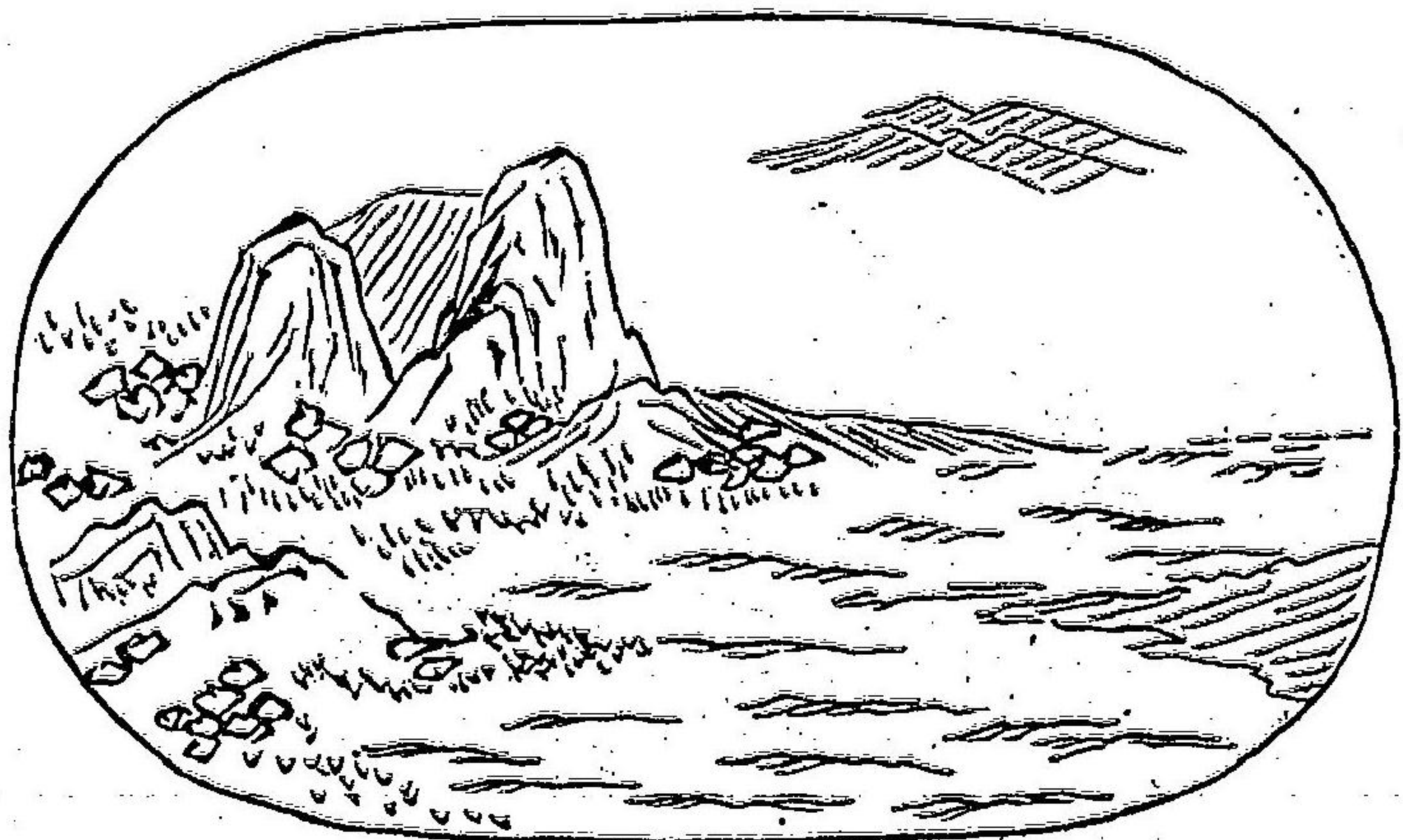
ふねとむる

あかしの月の

有明に

浦より遠地の

さをしかの聲



日笠浦 (播磨)

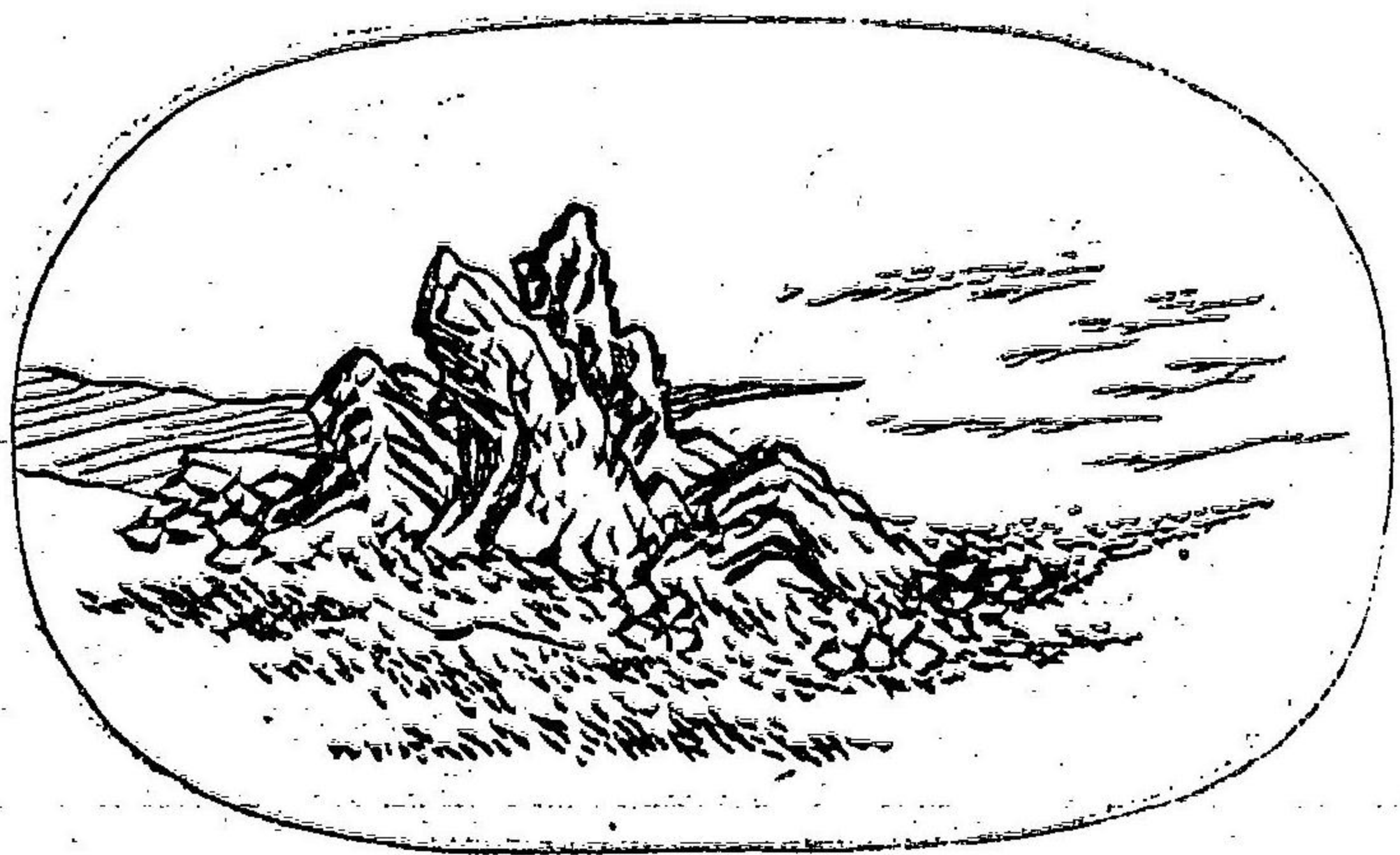
あまつたふ

まくれに袖も

ぬれにけり

日笠の浦を

さしてきぬれば



輪島 (能登)

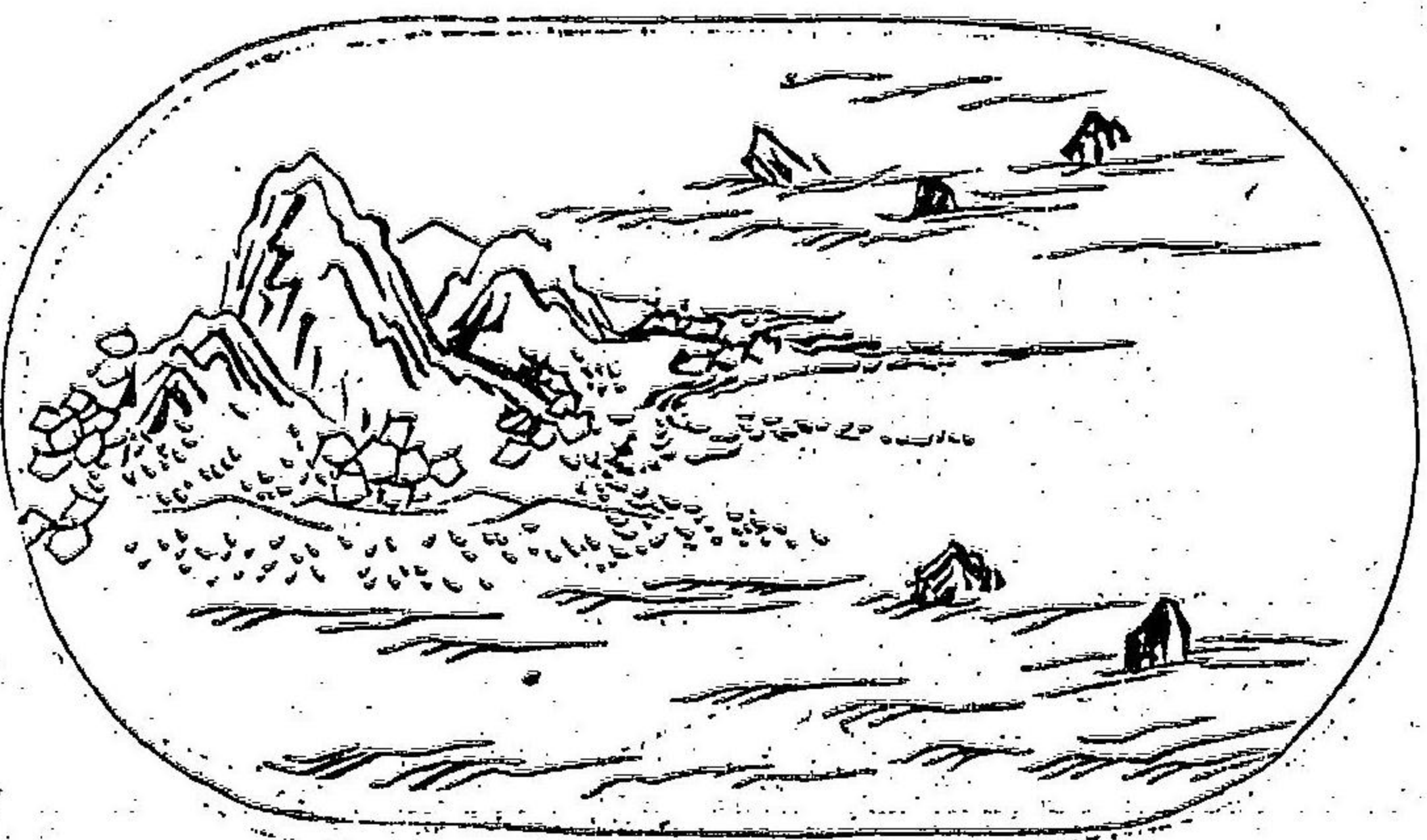
波間より

けさこそみへれ

とまさゝて

ふなよきるてふ

のとのしまやま



筑波山 《常陸》

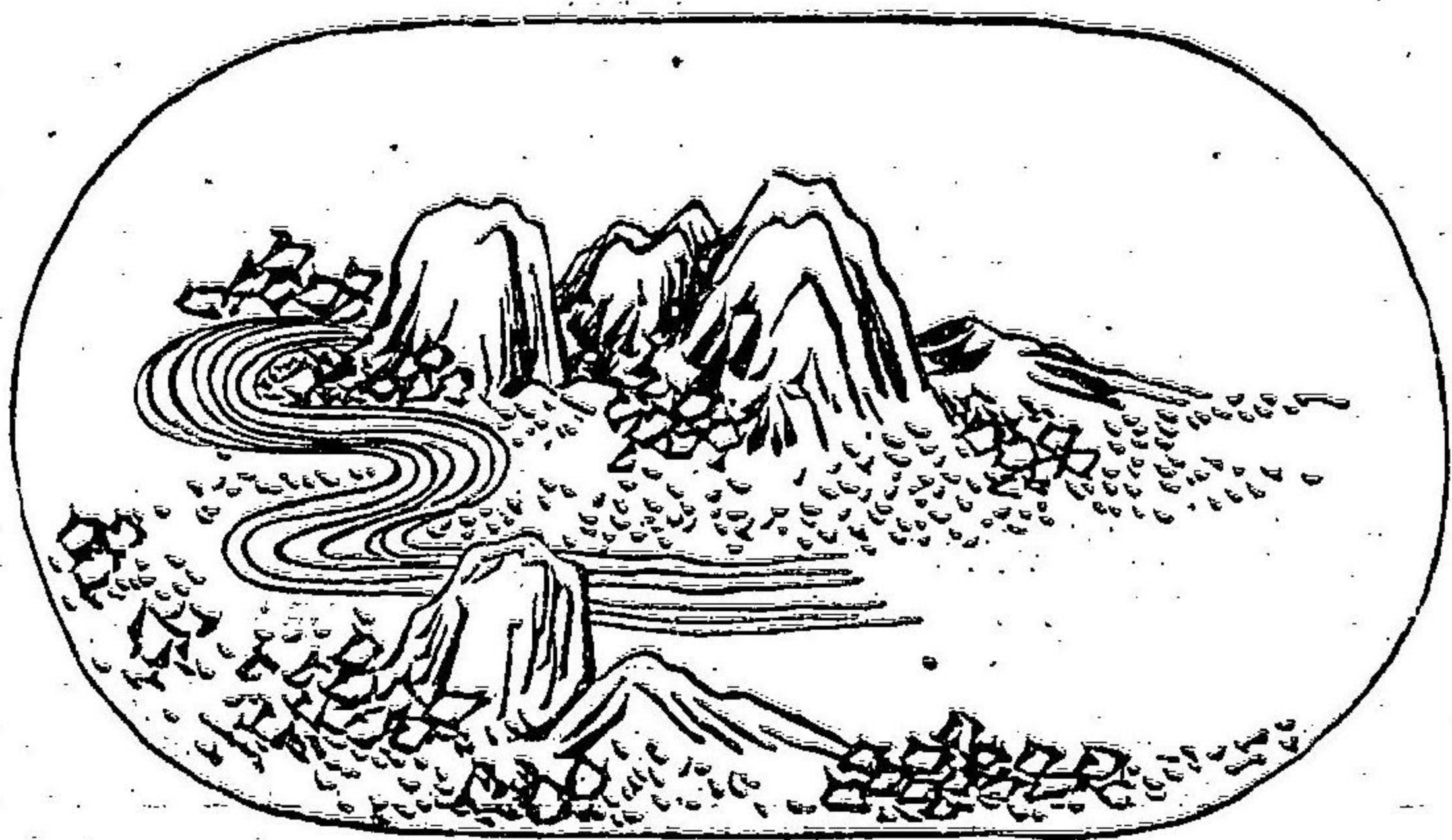
君か代の

かすとはこれも

筑波山

年へてしけき

こすえなりとも



玉島川 《肥前》

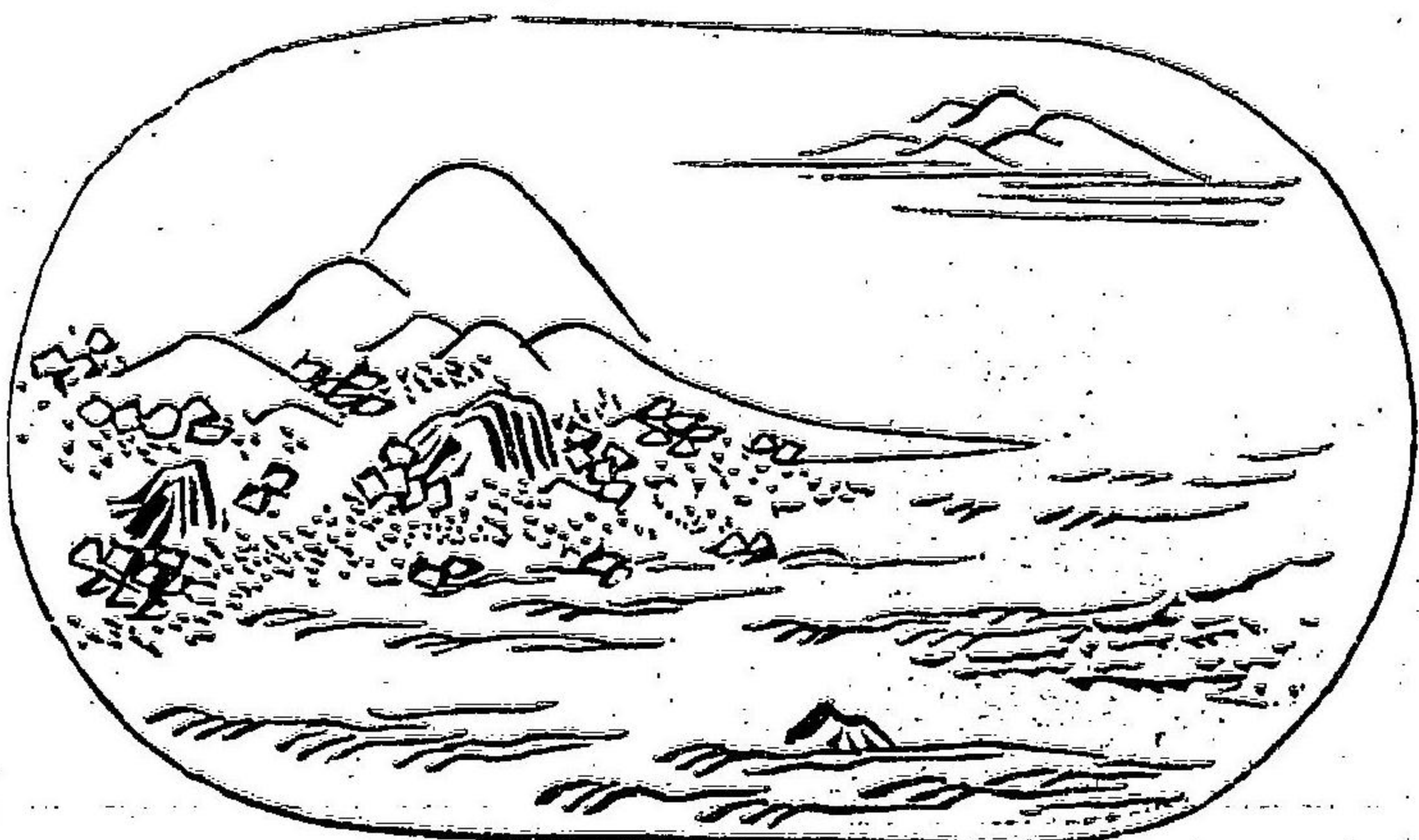
梅か香や

まつうつるらん

かけ清き

玉島川の

みつのかゝみに



大和田濱 (攝津)

はまきよく

うらなつかしき

神代より

ちふねのとまる

大和田のけま



三穂浦 (豊後)

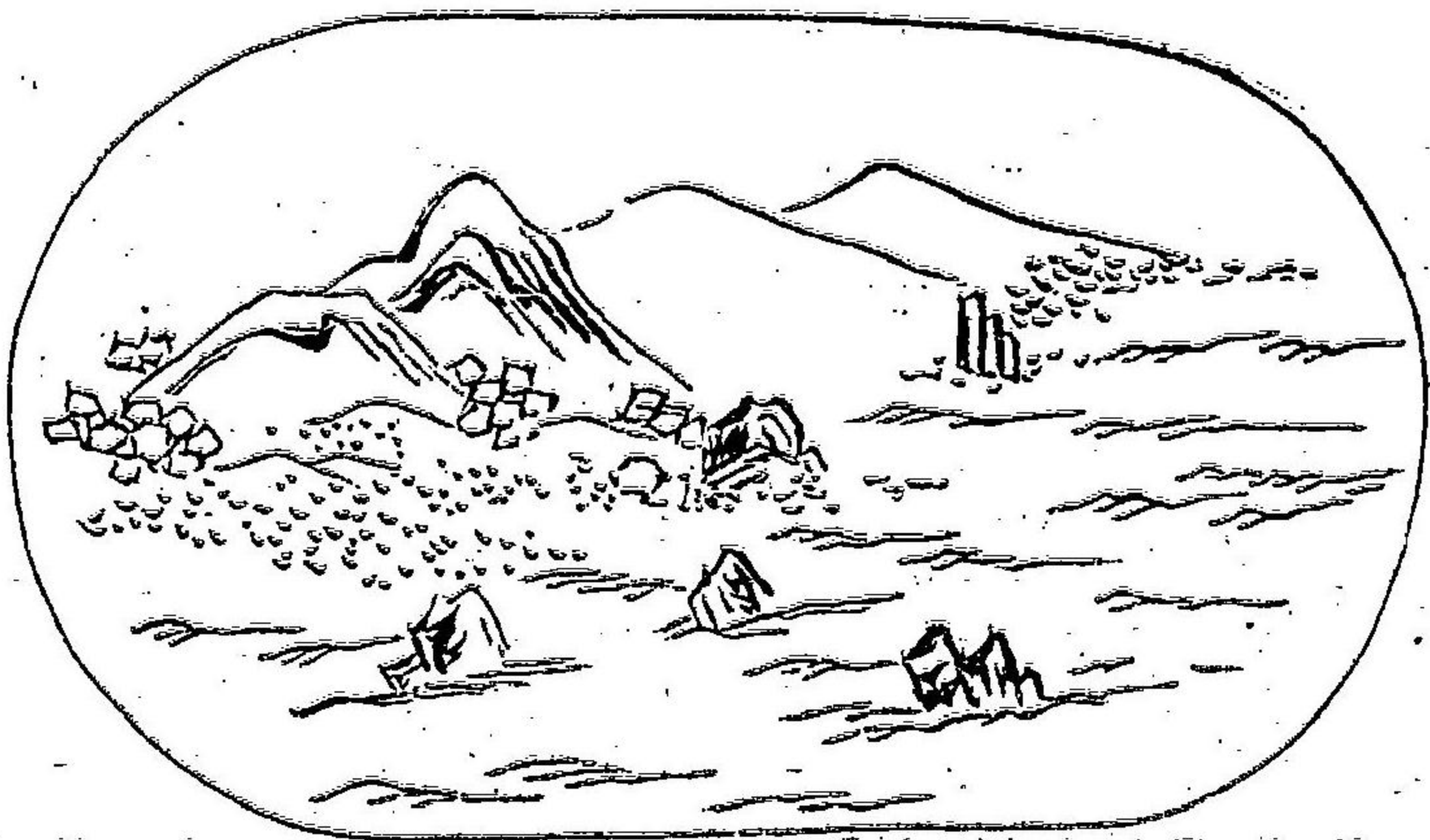
たえすのみ

もしほ焼てふ

風早の

三穂の浦わに

烟たららし



親宮城 〔紀伊〕

みつまの

浦の濱ゆふ

いくかへり

春日かさねて

霞来きらん



金華山 〔陸奥〕

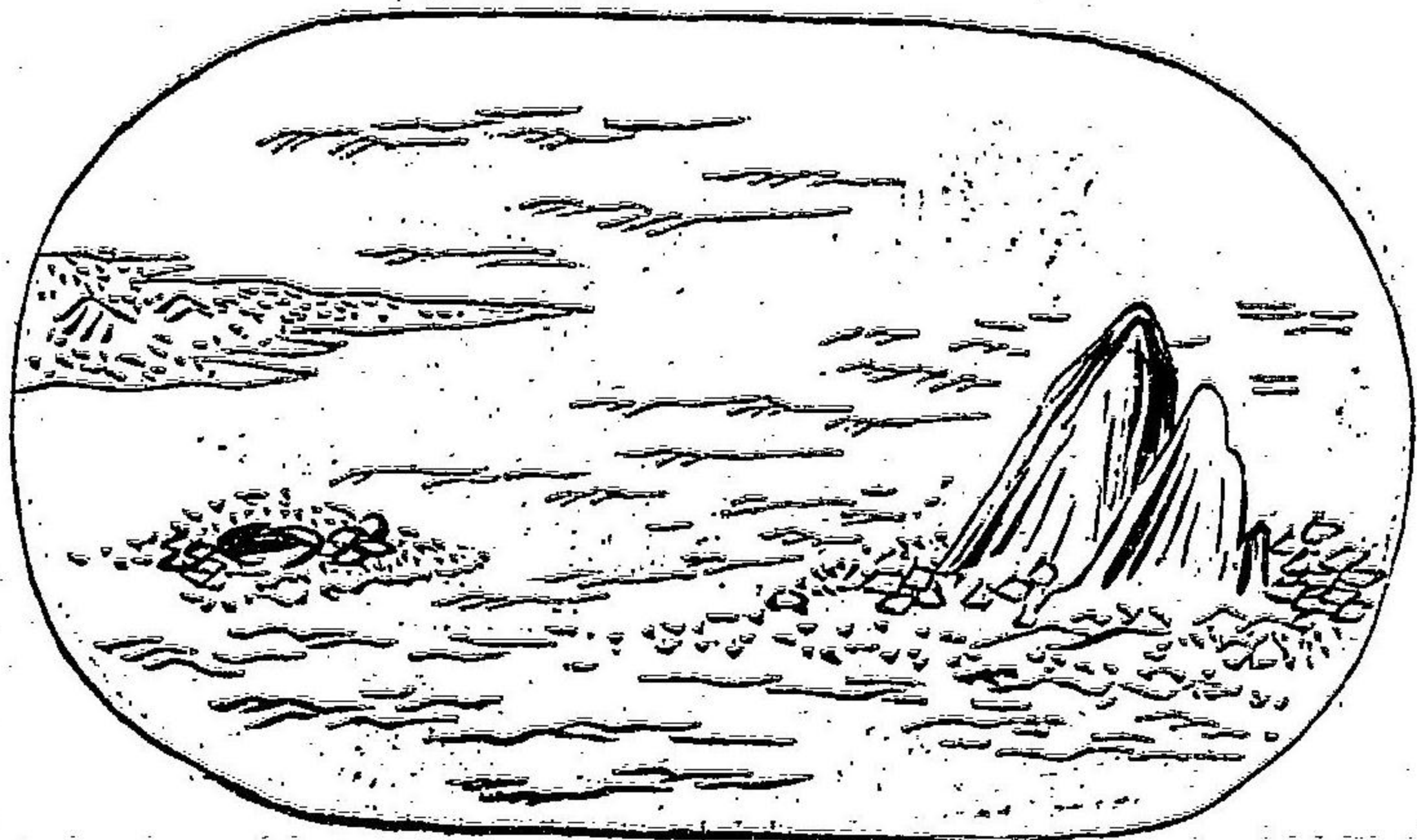
見上れば

霞の内も

かすみけり

烟たちしく

こかれはな山



まら山 〔加 渡〕

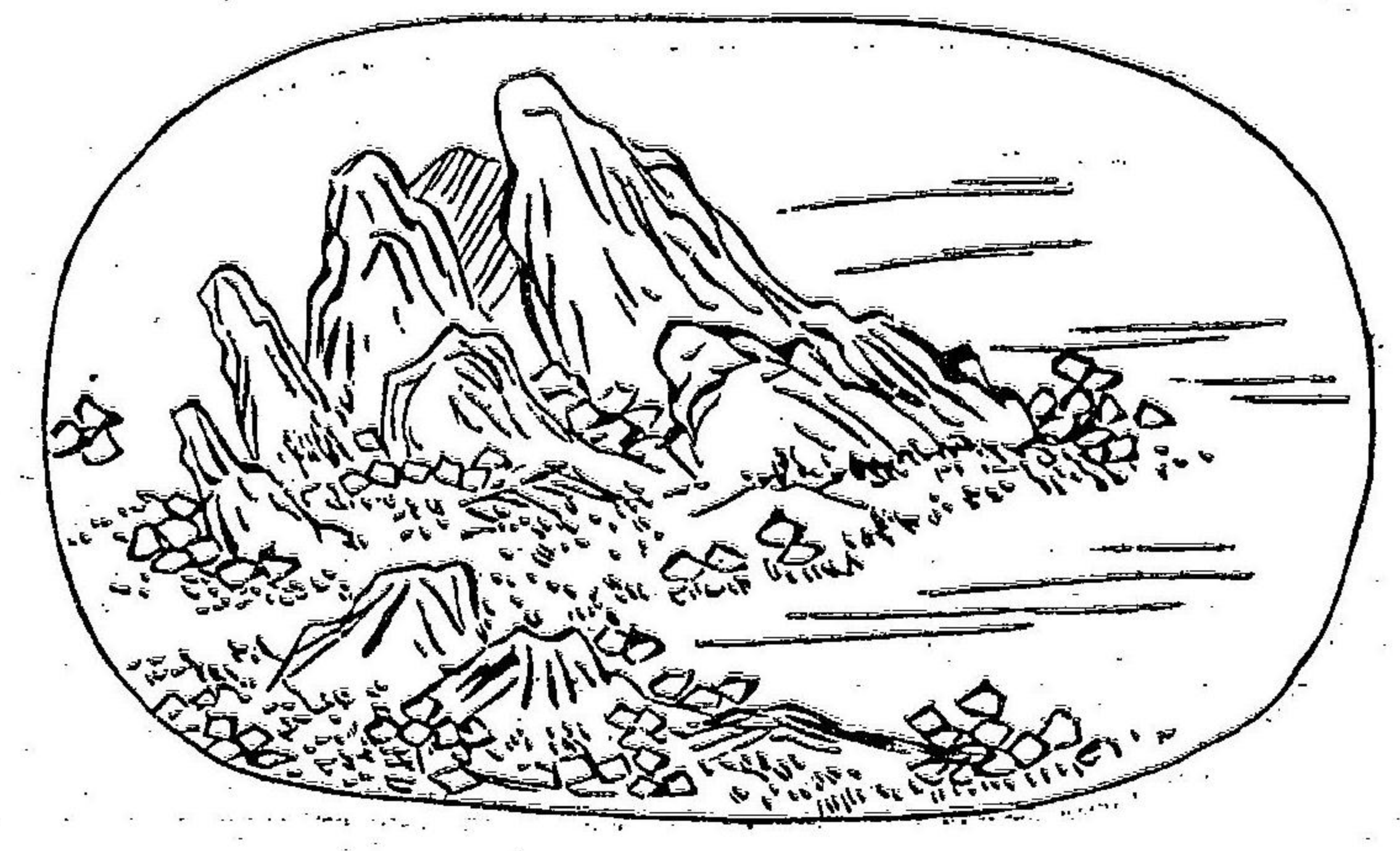
あらたまの

年を渡りて

あるうへに

ぬりつむ雪は

たへぬ白山



明州津 〔漢 土〕

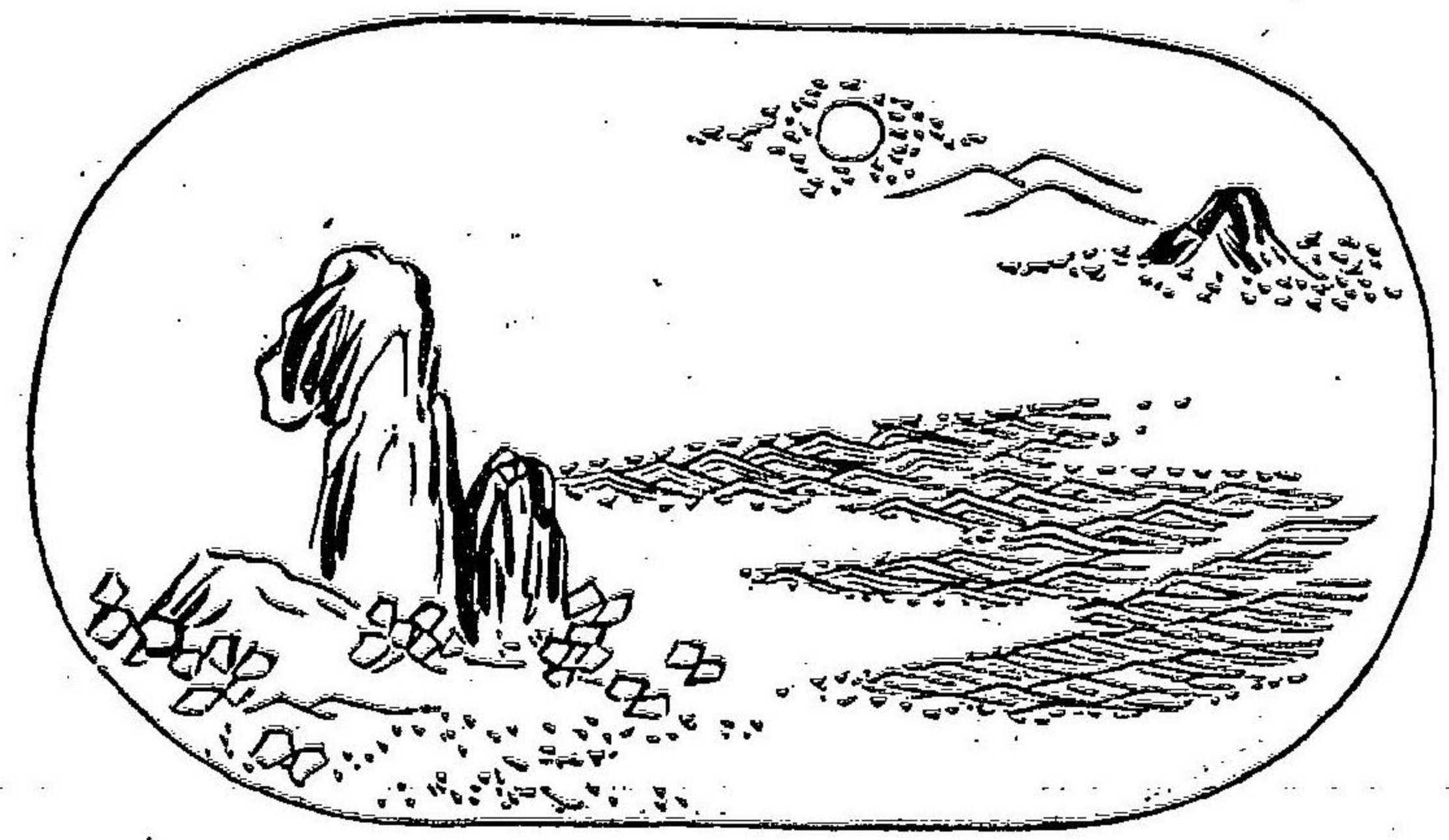
あまのはら

ふりさけみれば

かすかなる

三笠の山に

いてし月かも



和田岬 〔攝津〕

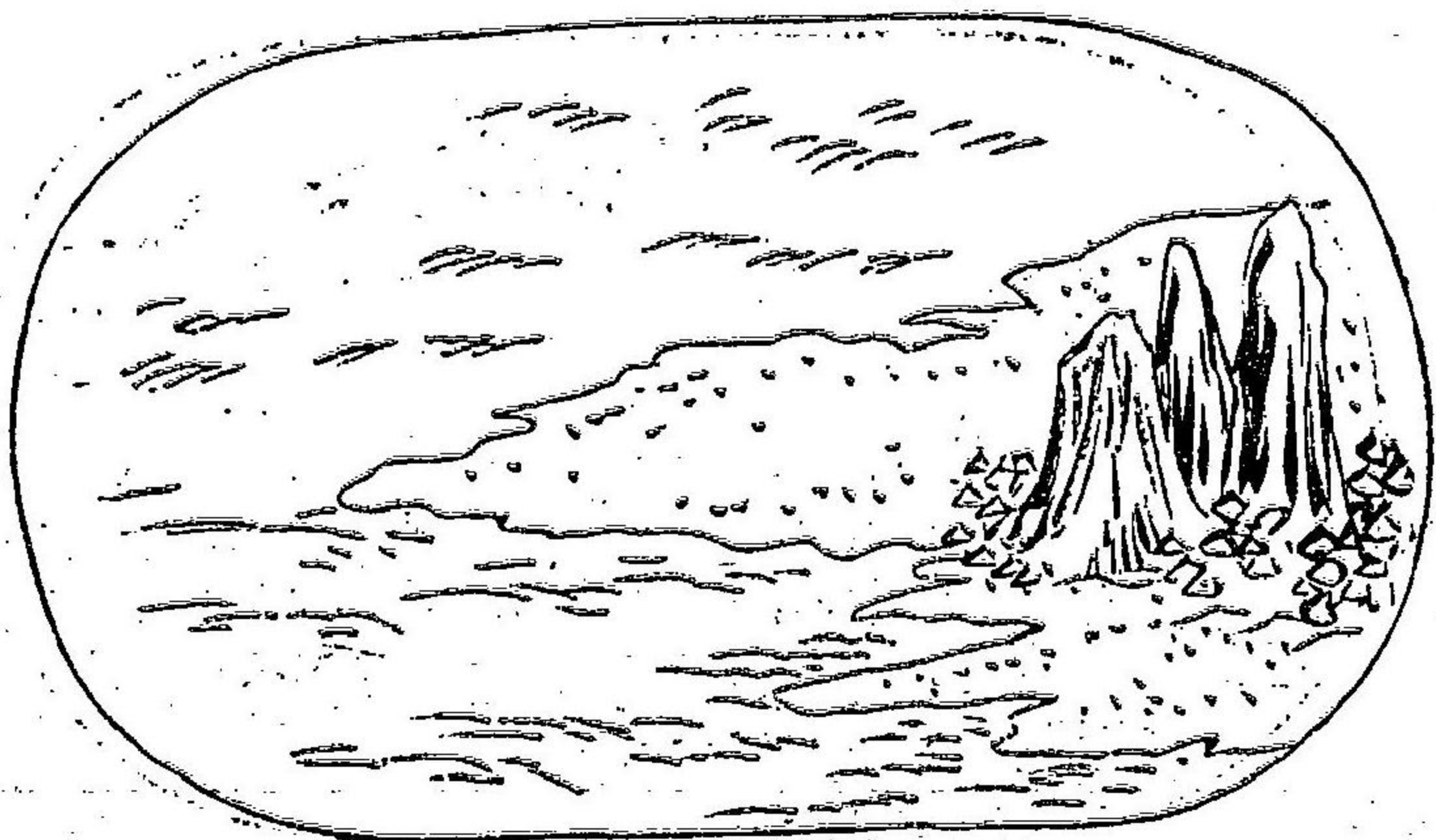
ゆふつらひ

和田の岬を

漕く舟の

かた帆にしくや

むにの浦風



早川 〔相模〕

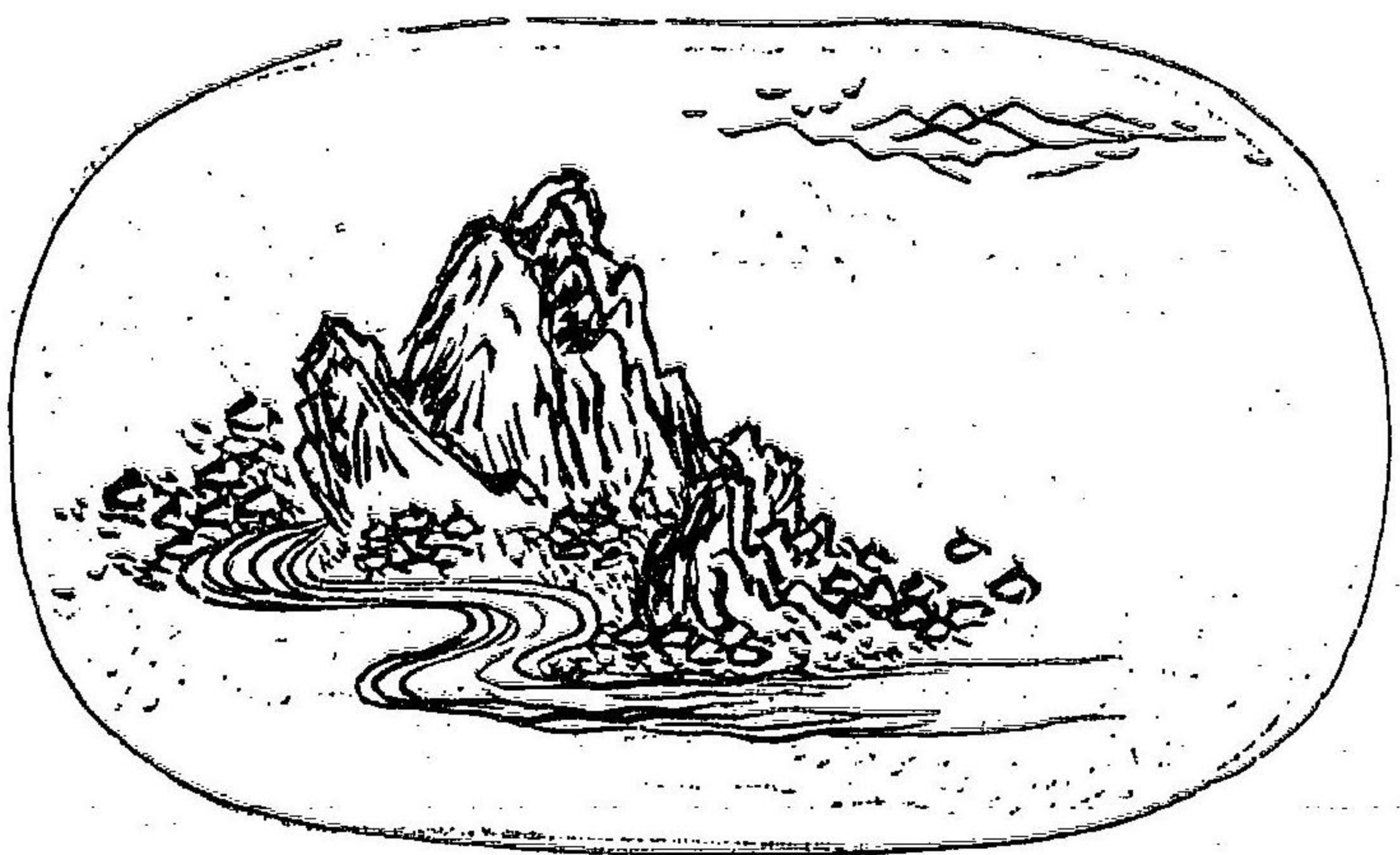
東路や

ゆきかをたえて

見渡せば

しほに流るゝ

早川の水



吉野の池 〔攝津〕

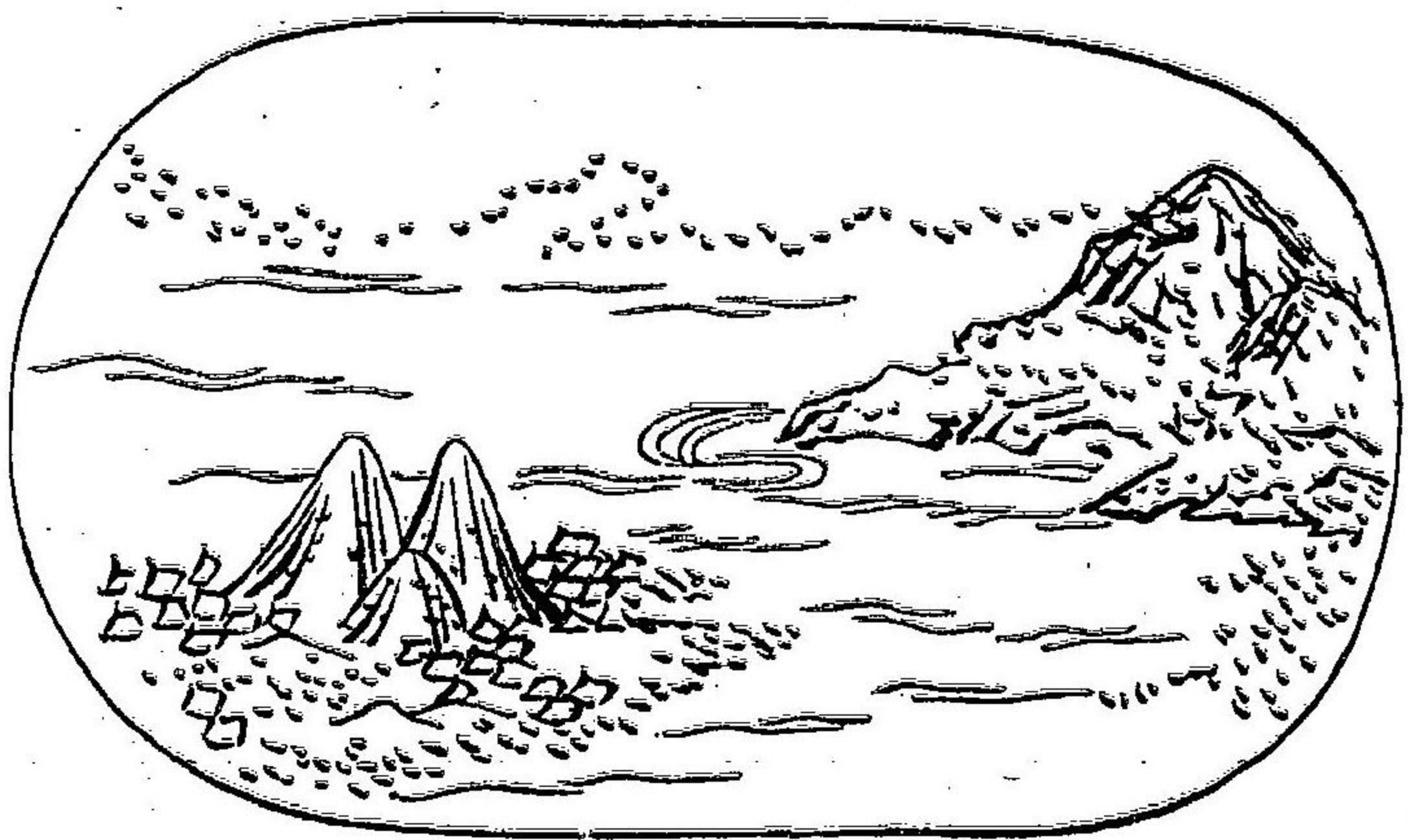
蛙なく

まのゝ池邊を

見渡せば

きしのやよひに

花咲にけり



大井川 〔山城〕

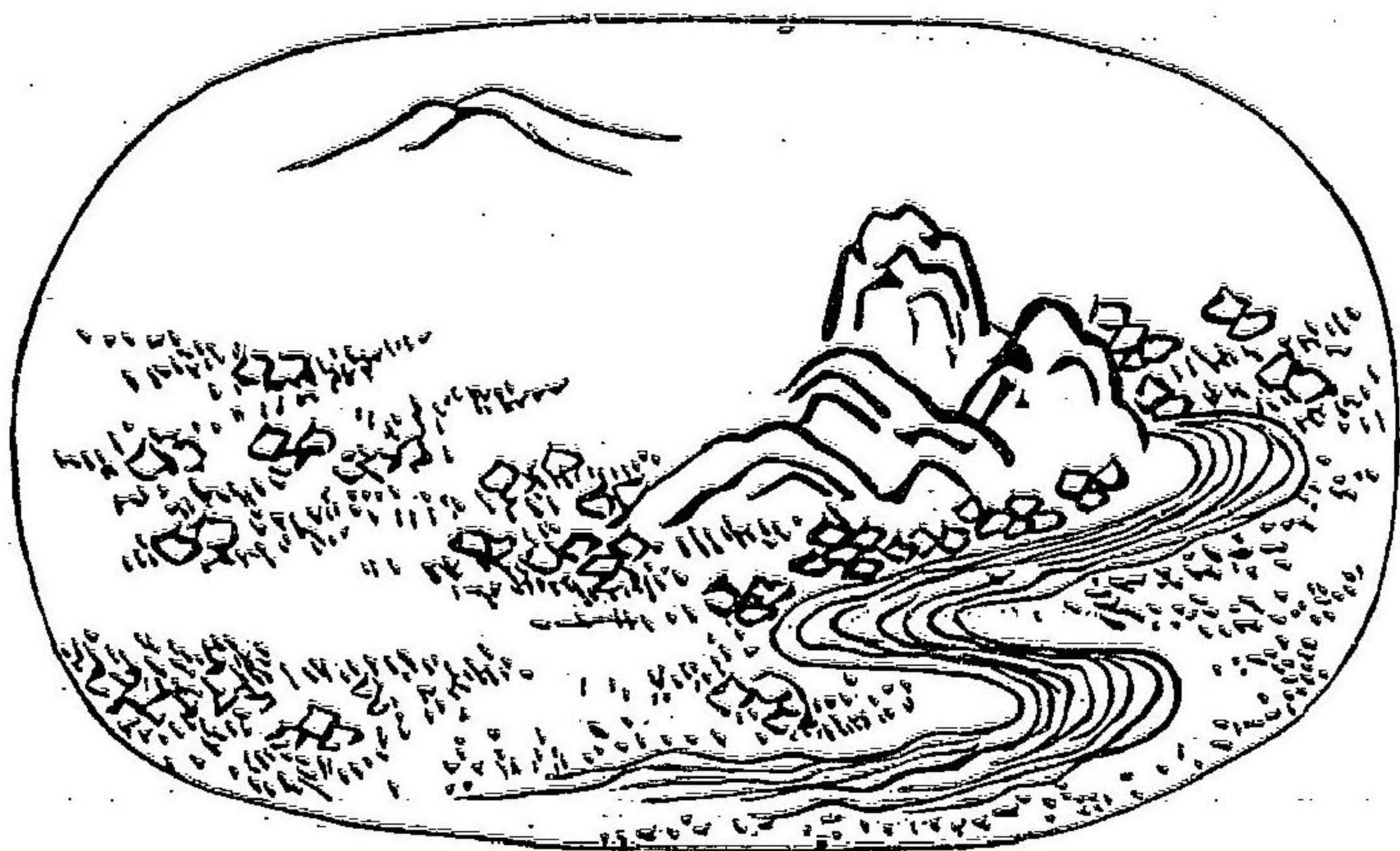
いろくの

木の葉なかるゝ

大井川

志もはいかなる

もみちとや見ん



枝の濱 〔上〕 〔總〕

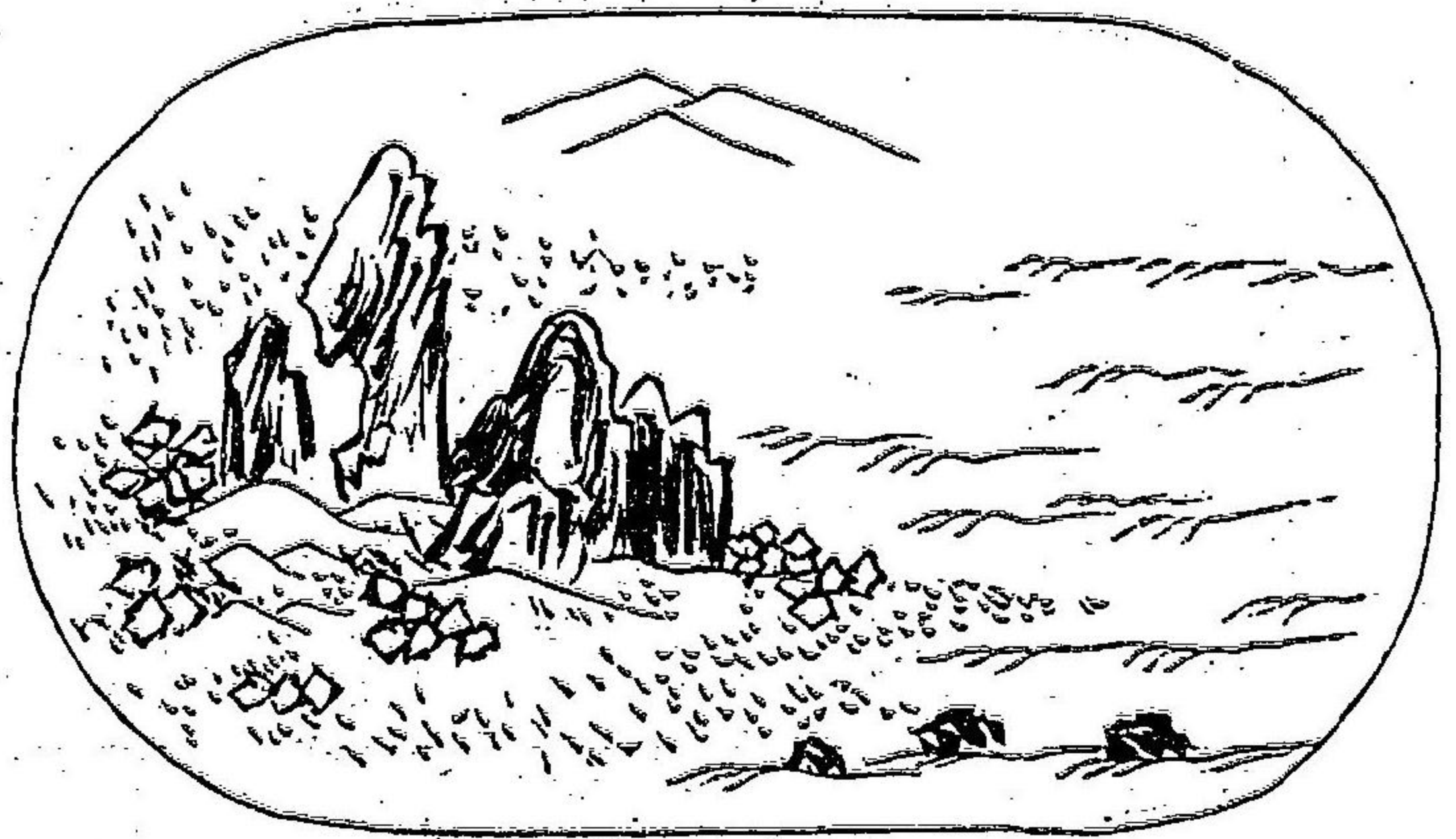
ちりにける

花のなこりの

こひしさに

枝の濱へを

きて見つるかな



かたゝの浦 〔近〕 〔江〕

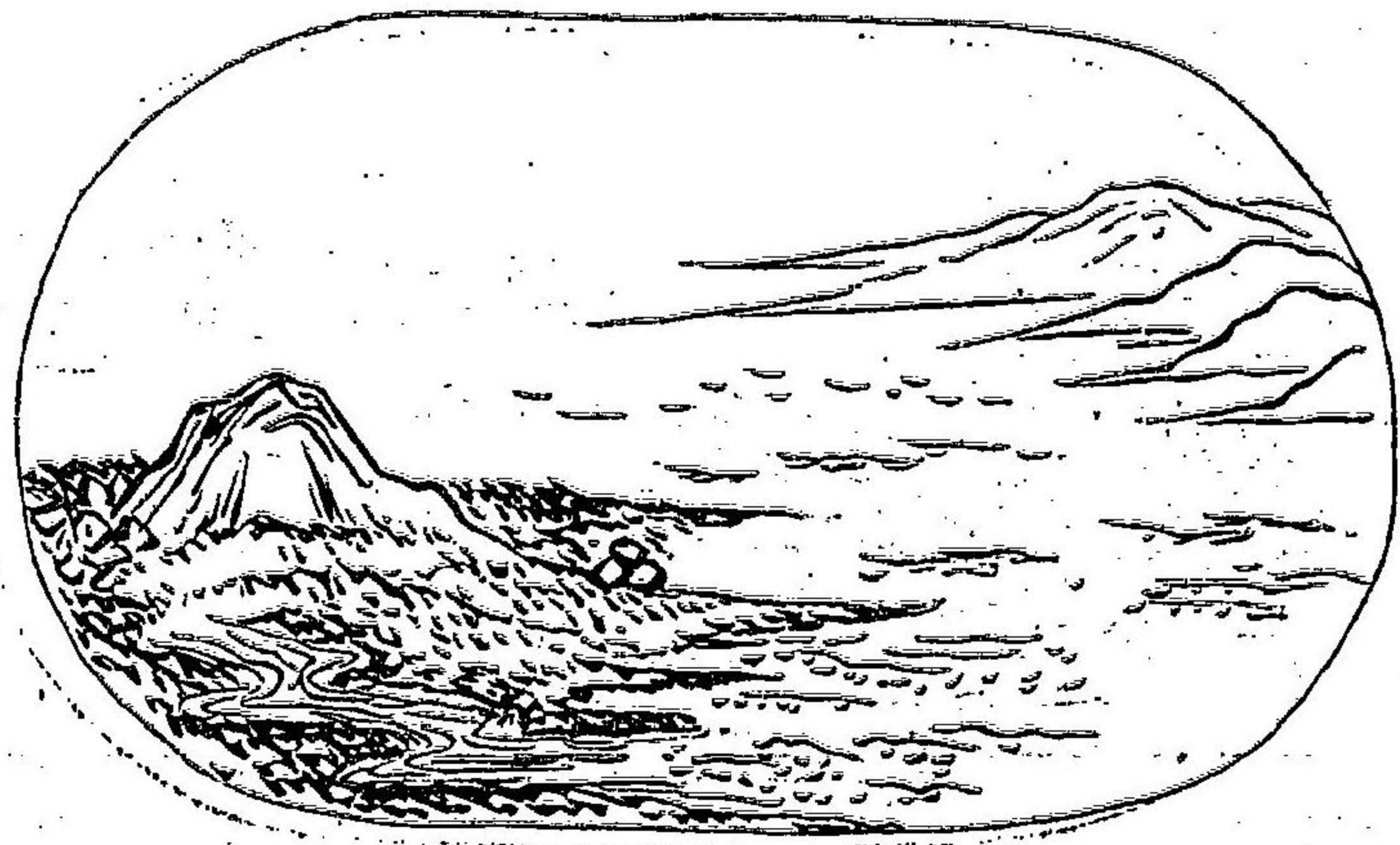
雲井より

くる初雁の

いつのまに

かたゝの浦に

ならひいるらん



白菊濱 (紀伊)

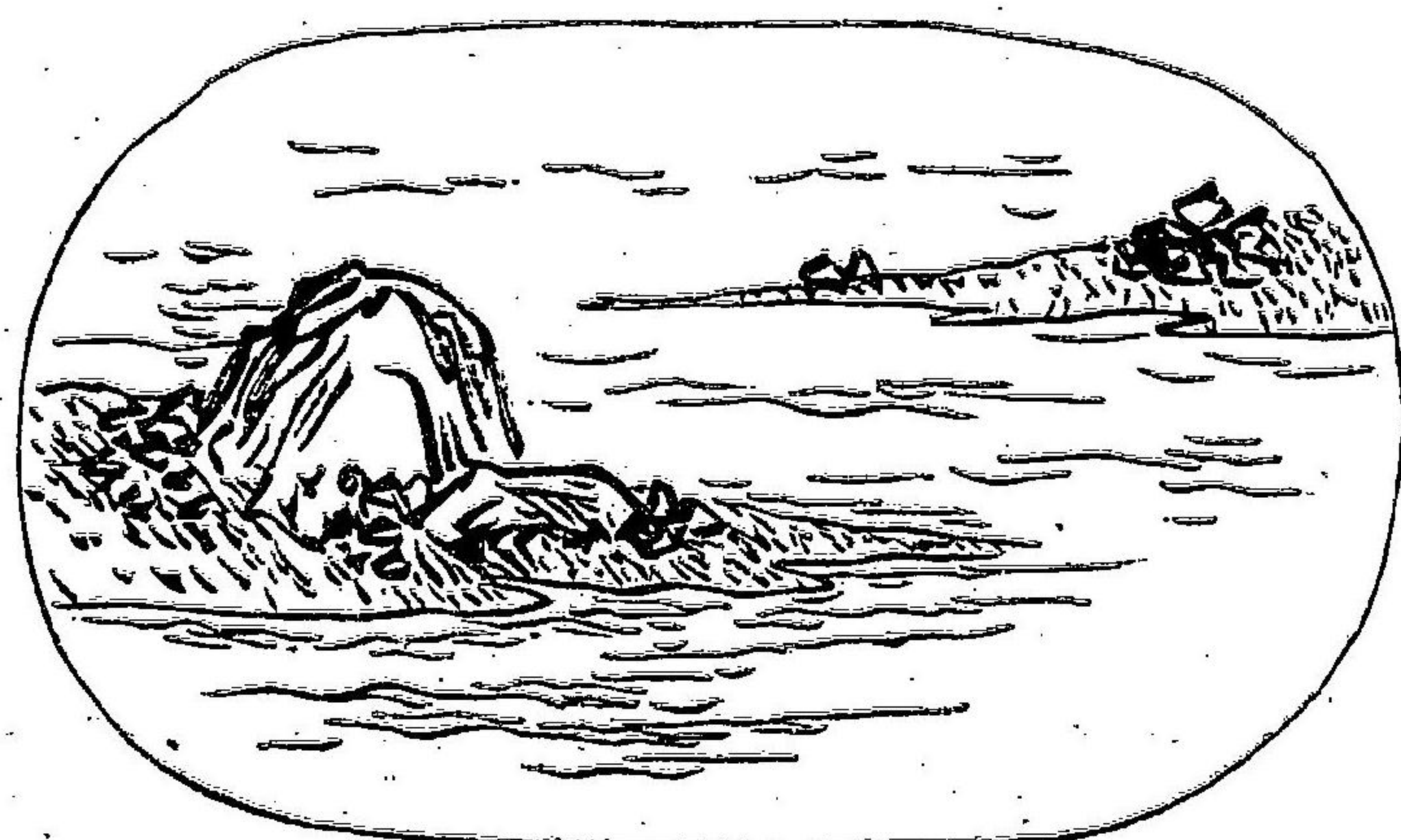
みくまの

うらの濱ゆふ

幾かさね

我より人を

思ひますらん



なくさの濱 (紀伊)

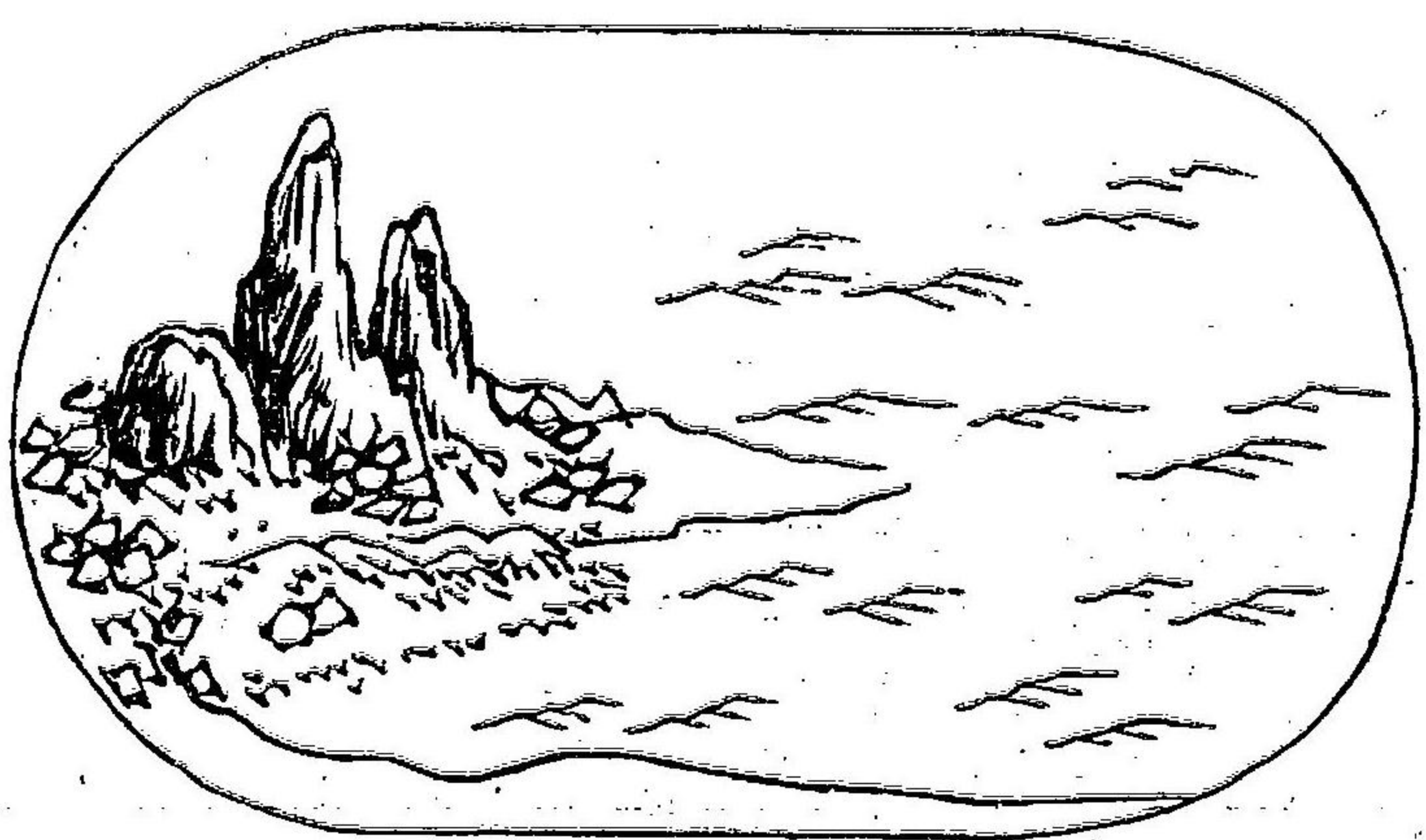
すえをたに

きけはなくさの

濱千鳥

ふる巢はなれす

つねにとひこふ



遊の浦 〔舟後〕

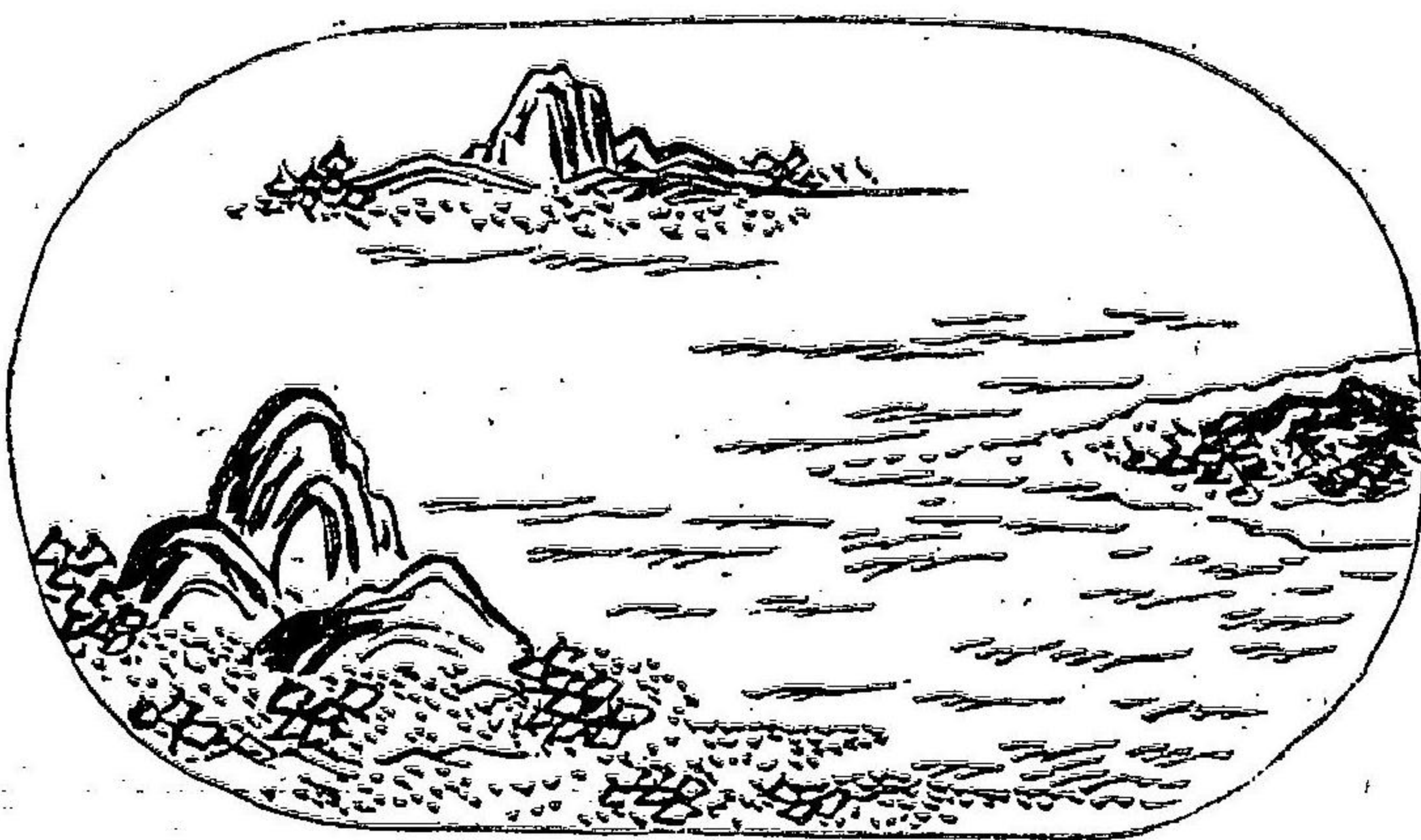
うちよする

なみあひありて

よさの海の

遊の浦に

うくもへぬし



磯間浦 〔紀伊〕

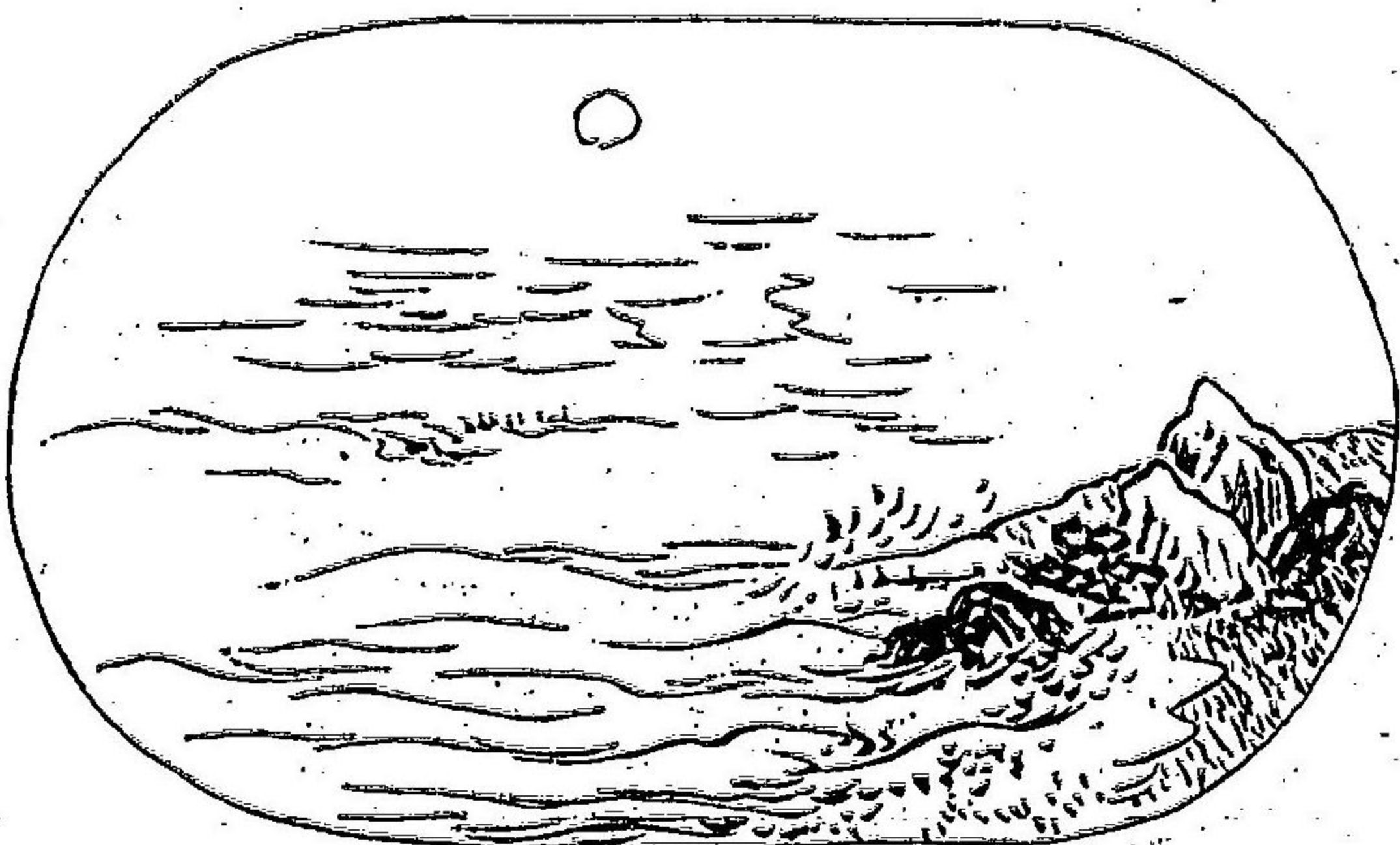
たもひくる

なくともとしの

へぬるかな

ものいひかほを

秋の夜の月



和歌浦 〔紀伊〕

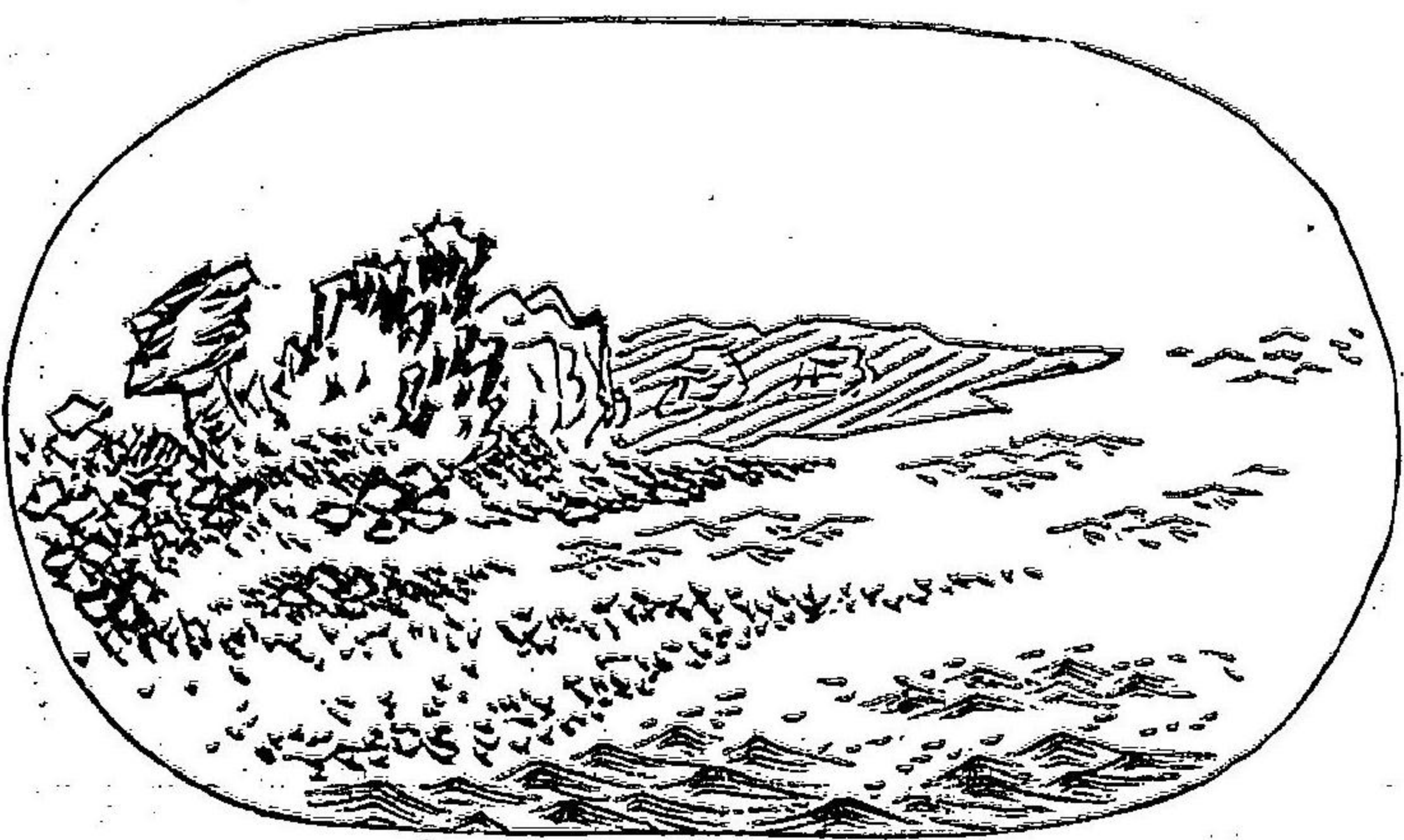
むれるつゝ

和歌の浦わに

なく田鶴の

聲にも君の

千代そきこゆる



清瀧川 〔山城〕

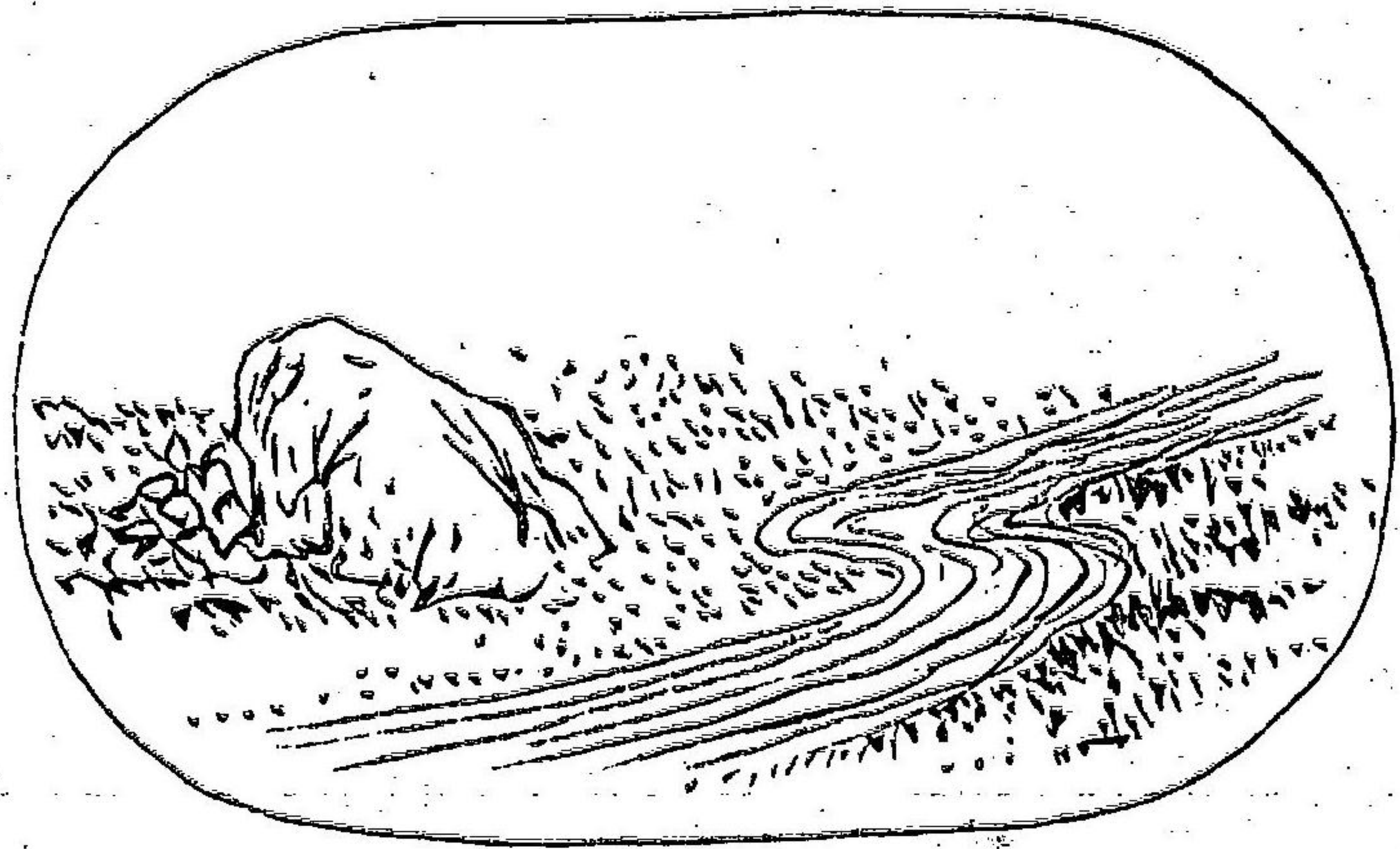
きよたきや

濱にはよとむ

冬川の

氷のうへに

うつる月かけ



田 蓑 島 (霽 津)

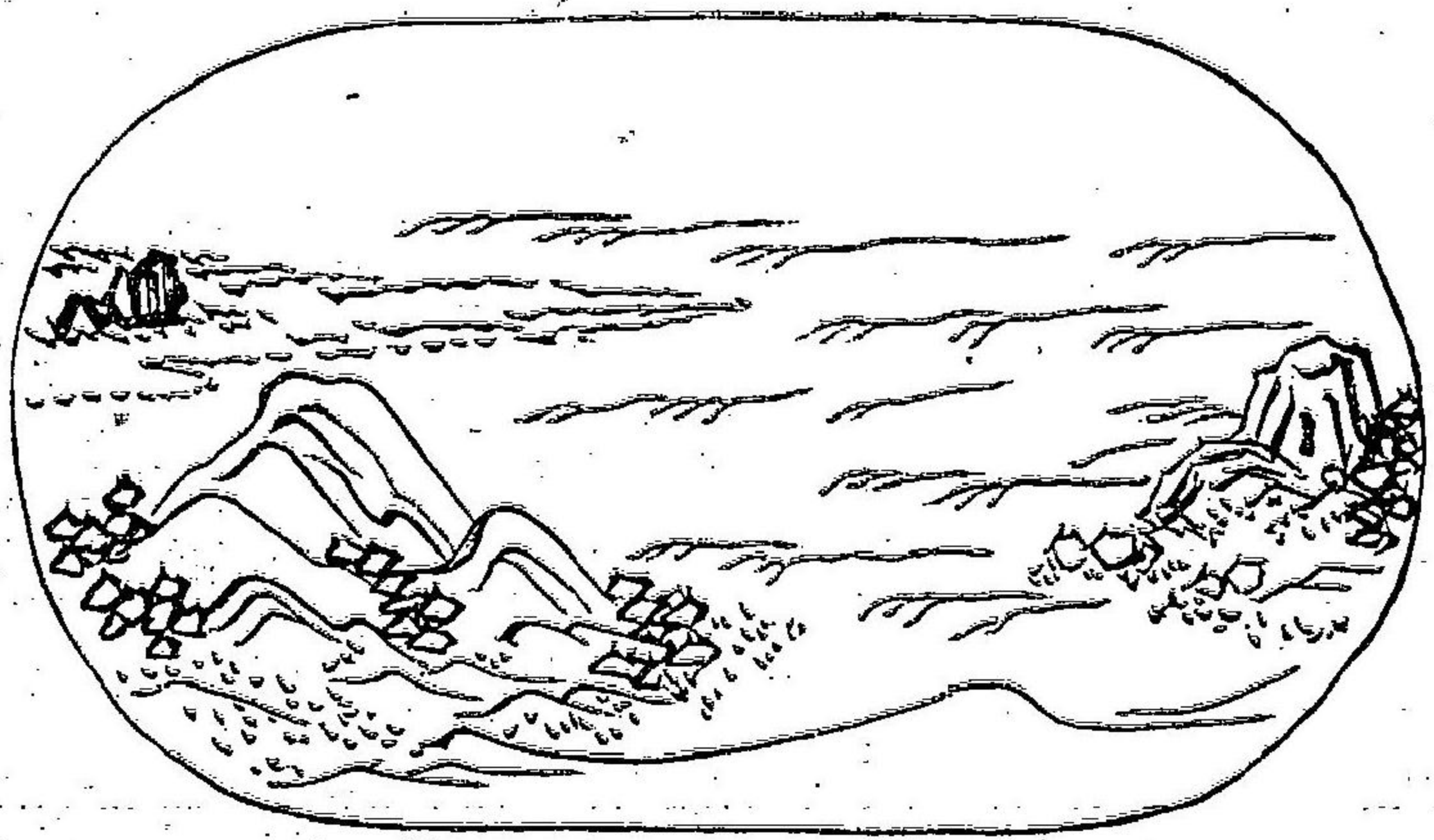
雨 による

たみの、島の

あま衣

さらてはぬれぬ

冬の袖かは



第六章 盆石秘訣

波の傳

此の浪の傳には之を一般に一法則の下に於て述べ盡す能はず。即ち其主石として使用するべき石の色澤に依りて四季の差別に順つて打つべきなり。又た石の色澤のみならず尙ほ其方向によりても亦四季の區別あるものとするなり先づ第一に其主石の色澤に依りて四季を異にするものを述べん

古歌に

春青く夏や涼しく茂る木の秋は紅葉ぞ冬は白妙

主石として使用せらるゝ石の色は

春は青石を用ひ、夏は黒石を用ひ、秋は赤石を用ひ、冬は白石を用ふ

以上は是れ一の法則とすべきものなれども、通常一般に黒石を使用するものとす。故に黒色なる石は必ず夏季に使用するべきものにして其以外の氣節には使用

せられざるものとのみ心得るべからず、或ひは其以外の氣節にありても黒石を

使用することありとす
 又方位を以ての區別は、方位の定則として春季は東方より風吹き起る之に因りて波は西に寄すべし、夏季にありては南方より風吹き來りて波を北方に寄せ、秋季は西方より風吹き起りて波を東に寄す、冬季は風北方より吹き起つて波南方に寄せらる、以上風の方向は即ち氣候の關係より起る而して毎年同一の方向即ち春季は東風吹き夏季は南風を吹き、秋季は西風吹き、冬季は北風吹くは怪むべきに似たりと雖も此は或他の種々の原因ありて然らしむるものにして其理由の詳細は天文學若しくは地文學の講究に委するものとして、只其概略を記さん敢て蛇足の嫌ひなからんと信ず、夏季に當りてはアラビヤ、印度、蒙古の地方一帶は非常に乾燥して劇暑となるが故に之に隨伴して非常の低氣壓を呈すべし、之に依りて其周囲の空氣は其氣壓を充さんとして侵入し我國にては此際南東風を生ずるなり
 次に冬季は中央亞細亞の地方は寒氣酷しく從つて氣壓は高氣壓を呈するが故に、其空氣は四方に向て流れ日本國には西北風を生ずるなり、斯かる原因あるを以

て前述の如く風を起すなり、古歌に

春ひがし夏は南に秋はにし冬は北より風の吹くなり

以上の法則も矢張り必ず變更し能はざるものにあらず盆石の飾り處に依りて四季の區別なく又席によりて之に適應するものと、適應せざるものとあり、故に古來よりの定則となり居れど何時何處にても之に従はざるべからずと云ふにはあらず自から臨機應變の打法あるべし

春波の傳

春は四季の始にして東風駘蕩として肌に觸れ黃鳥老梅に啾々し所謂春眼曉に徹して長夢未だ覺めざるの感實に四季中心心を鼓舞し愉快ならしむるもの春に若くは無し故に其盆石に於けるや又此考慮なかるべからず、即ち氣色長閑に穏かなるを全體とす、波羽根を以て細く小浪を打ちうちねり多く盛り上げる事なり、又海原は中高に破を厚くまなして浪の寄せ姿たあるべし、之の原因とするは乃ち春季の風は地中より起りて中間に吹き揚るの時季なればなりとす、又春季は洲崎も數おほく造るべし、又儀なども厚く打板を立て盛り掛け幾筋なりとも多

く重ねべし又遠山など打たんには遙か向ふに方りて峯々打ち續き長々悠々たる景に打つべし。又波の上にもちん粉を薄漢時き掛け脆々として打墨りて長閑なる體を宜しとす又山にも斯くすべし

夏波の傳

夏は終日炎威嚇々として人に迫り市街を行く人皆な僅に三尺の軒陰を争ふが如き時季にして海濱は大に涼しく納涼に最も適する故に世人避暑と稱して夏季中海濱にあるなり、斯くの如く海濱は納涼に適するものなれば、其點より考ふるも夏波の打法は廣潤に而も平かにして涼しき景色は一般なりとす。波を低く打ち波瀾のうねりをゆらりとしたる様なるべし、而して磯の際と洲崎とは少しく波立つ景色を作るべし。又沖中には此所若しくは彼所に波のありやなしと云ふが如き程度にてたえなくしくあしらい羽根を止めずして一羽又一羽と引捨ては引捨て打つべし、其の然る理由は夏季にありては風は空中にある時節なればなりとす。又洲崎はほつとりと丸き様に作るべきものとす。凡べて地取の砂も低く、打板を使用して押しならすべし。又砂を積み上るも荒立のなき様なり、

又浦の邊りは荒れ少なき時分なりと心得べし、又之れに驟雨なども宜く打つべし

秋波の傳

心なき身にも哀れは知られたり鳴立つ澤の秋の夕ぐれ實に秋は野といひ山といひ又河といひ寂蕭の氣天地に充ち人心をして只悲哀の淵に沈めしむ紅葉を賞すれども櫻花の陽氣あるに若かず、故に秋季の景は物淋びて瑟肅たる光景は一般なりとす。中波に打ち一ト羽を長くいすりてうねくを幾何なりとも續け引く其止りに波立つ様を造る又一ト羽根一ト羽根の縁邊を分離して此所或は彼處と所まだらに浪を打ち置事なるべし、其の然る所以のものは風空中に有りて陰氣陽を行て吹き下るは乃ち秋氣に於ける吹き方なり

又荒砂若しくは大砂は主石の根占めに使用することなし、地取なり只脇の所に少々置くべし、又遙かに遠くの島などの景を打つべし、又洲崎も向ふ一筋若しくは二筋あるべし、奥深く淋しく打ち習ふなり、又向ふの砂ほど薄めに段々低く作るべし、又雲を少しくあらいて月を打ちて靜かなる體を宜しとするなり

冬波の傳

冬季は秋季の寂莫蕭瑟を受けて草木は悉く黃落して枯野となり草間の蟲聲全く滅し、人は寒氣に苦しんで家に籠り世界の光景は荒果て物凄き風情なり、大波を作りて沖合は荒れ又磯の際洲崎等も尙ほ以てなかくしくして波の打ち起つこと高く水玉など飛び散る様の方を打つべし、又大小の砂を波の上の此所彼所に少し計りをばらりと蒔事なり、又浪にして左方より右方に打ち寄る波の風景ならんには又右方より左方へ羽根を引き、戻る波も亦中には少しく難へて打こともありとす、其の理由を述べんに冬季は風地中に吹くが故に斯くするなり、又微細の砂などをざく／＼と數を多く打ち荒立ちたる様に作るなり、又地取砂の上に少々計りみちん粉を匙を以て振り蒔けば即ち雪の景色真に適ふても宜しきなり

雲

八重雲を打たんとするには盆の中向ふに前へみちんを蒔き一ツ羽根にて左方及び右方よりして掃き寄せ若しくは掻き取り若しくは蒔き果たしたる時分に其時

果したる所より羽根先を以て押し分け又押し分けなどして雲の形狀を造るなり、又其掻き寄せたる砂をば羽根の先端にて雲形の上についと跳ねやりて其所の叢叢となりたる所へ更に其上へみちん粉を篩にて振り懸けそれを又一ツ羽根にて雲を作り場所漸次廣くなる、斯の如く幾回も以上の方法に依りて作りては蒔き又蒔きては作り反覆して多く打つべし

絲遊

紺青色なる砂を左右へ細く且つ長くばつと淡くして斑なき様に蒔て一筋を造り、又兩方の盆縁を離れて前法の如くに短きものをも一筋若しくは筋蒔き重ねて後其上をば鳥の羽根の剛きを細く斷りて結びたる筆羽根といふものあり之にてか又は筋羽根一枚羽根の周圍を切り落し其跡に深き刻みを有するものにてか何れになりとも盆中の縁際より眞一文字に少し搖動しすつと引きて砂の蒔たての離開するまで之を行ひてすいと引き捨てる事なり之れ實に手際の事業にして熟練を要するものとす、而して砂の向ふと前とは指の先端に水を付けるか息を吹掛けるかして息の方よし少しく指を湿润ならしめて上下の縁を拭ひ取るなり此拭

ひ取るは正しくなるよりも寧ろ少しく迂廻をなしてすべきなり

浮雲

浮雲の景はみぢん砂を匙子にて一塊づゝを最初より豫め雲の形状の様に作り置き而して其の上を小ヒの背裏を以てぐるぐると回轉しては之を引き揚げ回轉しては引き揚げすること數回にて作るなり、又みぢん砂の薄く薄きたる場合に於ても右の如くなせば終には盆の地圖は薄黒く顯はれて之れ又よろしきものなり

夕陽

夕陽將に西山に没せんとするの景即ち夕入の雲を打たんには先づ始めに中ヒを以てみぢん砂をすくひ落すなり但し此みぢん砂はたゞ安りに落すにあらず一は厚く一は薄くと二様に盛り置くなり、次に此盆を手に取り上げ、少しく傾斜せしめて右及び左へ之を動搖せしむれば、其厚薄に盛り置たる砂は傾斜れて其狀態は殆んど眞綿を片斷りたるが如く或は濃く或は淡く濃々となりたるを、薄き鴉羽根を指にて丸め握り扱きて手前に引き抜き取りて羽縁の縮みたる羽根所謂縮羽根を以て其砂の周圍を押し寄せては作り押し寄ては作るときは、彼の眞綿

の如くに濃々としたる砂の縁も亦ちりぐとなりて此所に目的とする雲形を止むるものなり

銀河

銀河に就ては少しく冒頭を置かんとす、此銀河は其名稱の如くに眞の河たるにあらざるなり、人間夜仰ひて天空を望めば百萬の列星は點々として輝やけり而して特に一帶森然たるの星あり幅廣く且長く一直線に並列するなり、此の並列したる群星は乃ち人の銀河と稱するものなれば其の河流にあらざるや明なり、此の解釋を以て次の法を學べは蓋し其得る處又少なからずと信ず、之れ冒頭を附する所以なり

先づ小ヒを以てみぢん砂を掬ひ而して後に手を盆面より比較的に餘程高く上げて以て其みぢん砂をほとりと振り落し以て河の形を作るが如くに長く薄き行けば其河の内は少しづゝ砂の堆積せる場所を生じ濃々と恰かも鹿の子の如くなるべし、斯様に作りたる後は其の對邊と此方の邊とを拭ひ取る勿論此拭ひ取るは少しく迂曲の形状にするなり是に依て目的とする銀河の形状を作り得るなり

り、而して次には此の河の形状内に列星を打つを要す是れ實に此星ありてこそ銀河と云ふべければなり、乃ち其河の邊りへぼつと紺青若しくは鼠色若しくは白砂を蒔きて其中へ小米粒大の丸砂を七八粒適宜にばらりと蒔き散らし以て星の存在に象るなり、又此星に使用すべき砂は長門國の嚴砂なるものを使用するも可なり

註 銀河の形状を作るには又雲母の粉をも用ひ若しくは青貝の砂をも使用する
ることあり孰れも一趣向ある秘傳たるなり

雲の峯

雲の峯を打たんとするには、豫め盆中にみぢん砂を匙子を以て小高かく盛つて此所に大略の雲形を作り幾重もあるが如くにして、其上を薄くぬめくしたる一枚羽根にて且つ非常に和かきものを以てそつくと砂の上面を撫丸めるなり是即ち雲の峯の打方にて實に手巧を要するなり、一朝僅かなる所に於て失敗せば全景は又打ち代へざるべからざるものとなる

月

月の打法としては先づ眞行草三箇あり

眞の打法は雲母の薄きを一枚と其下に銀葉の如きを敷く金粉若しくは金箔にて塗たるも可なり、其雲母の上には銅製の月形を置きて之れが上にみぢん砂を打ち掛けて軽く月形の金を取揚ぐるときは即ち目的を達す

行の打方とは雲を微細砂か若しくはみぢんにて淡く打ち置くなり、而して月のありて可なる所にみぢん砂を丸く盛あげるなり但し其砂の丸さは大小孰れにても其場合に應じて擇ぶべし、斯く丸く盛り上げたる砂を象牙の匙の背裏にてなり若しくは打板なりともじりくと押さゆれば盛り上げたる砂は丸く廣がりて終には要する所の月形を得るなり

眞行の打法は以上に依りて了知せり、今や最後の草の打法に入らんとす、即ち草の打法は匙の砂若しくはみぢん砂にても淡く蒔き置きて其中間に於て當に月の有るべき所を、豫め拇指の腹部を少しく濡らし以て其の月の場所なる砂を押へてきりくと廻轉して其砂を抜き取れば其の抜跡は丸るかに月形となりて表はる、而して砂の固りは三つ羽根若しくは一つ羽根を使用して、種々に雲の形

狀を作るなり、又羽根或は簡の使用に依りて月の半分及び雲形の上とにみちん砂をばつと蒔き掛けるも又一趣味あれば可なり

四季の月色

春

春の月を打たんとせば金屬製の月形を置きて微細の砂を淡く蒔き掛けて後に其月形を軽く取り揚ぐれば先づ月表はる、而して所謂臘月なるものを作らんには今表はれたる月の上に極く淡くみちん砂を蒔き掛くるなり又空には紺青の色砂を以て雲を打つなり、又海邊の景色を打たんとせば象牙の匙を用ひて白砂の波を作るべし、又霞を厚く幾筋も打たんとすれば即ち打板を横に建てて片面の方より匙にみちん砂を掬ひて板の根際へぞろぞろと盛り掛けるなり、斯くして其打板を取り除けば是れ目的とする處の霞なるなり、其霞に二筋三筋の桃色なる霞を打ち離してよし

夏

夏の月を打たんには先豫め紅色みちん砂にて夕入雲を打ち此打法は前にあり參

閱すべして其中間に金屬製の三日月形を使用してひなたの月を打なり、又象牙の大波七にて雲母の粉を掬ひて七先を使用し三日月を打つもよし又一筋の流れ河を打つときには水も波も白みちん砂なり水中に月の移る影を打たんには三日月形の金屬製なる型を置べし、又一つ羽根にて砂をおし分て三日月の映りたる影を造るもよし

秋

秋の月を打たんとするには使用する盆の三分一程主石に掛けて向ふを明け置く位に餘地を取りて砂を以て境界し其砂際へ鼠黄色の微細砂が若しくば紫色なる砂にてもたらりと蒔き左右何れへなりとも一方へ霧の立昇る様を作るべし、而して其上の處に適當に雲母の砂を丸く盛り置きて七の先を打板にて押し廣げて行の月を打事も以よしとす行の月云々は前にあり宜敷き處に浮雲前にありを白砂みちんにて打つなり、又海邊を作り波は水淺黄色の砂にて角の浪を以て所斑らに浪を打つべし而して此浪中に月影の映するも可なり其れは波の中を指先にて丸く拭ひ砂をぬき取るなり、此れは必しも此月影あるを要せざるなり故

に時宜に依りては打たざるもよし

冬

冬の月の打方とは主石の横手より向ふに掛りて鼠色の砂を用ひて雲を打つ、而して中間の適宜の位置に白砂を以て行の月を打つ行の月は前にあり其月の邊よりしき位置に微細の砂をすらしと所斑らに蒔てみちん砂をばつと打ちふるふなり、之れ雪氣の様をあらはせるなりとす

又海邊を作り波羽根を以て紺青か薄黄色か岩縁青色を以て波を打つも亦よろしきなり、又地砂に雪を打つべし

以上にて先づ春夏秋冬の月を打つに心意えべき秘傳は了知せらる、なり而して次の條に於ては波浪に關する秘傳なるものを説かんとするなり

波浪

沖津波

沖津波とは沖合に立つ波浪を云ふなり、今此の沖合に立つ浪乃ち沖津浪を打たんに盆の向ふ部分にみちん砂を淡く蒔きて波羽根を一文字に持ちて其れを横

に立てつ、ちよつくと揮ふが如くになしつ、羽根を引きて以て横長き波に作る其波と波との間には短かなる波も少しは雜へるもよし而して此處若しくは彼處と云ふが如く飛びくにして打つべし、是の法は大凡そ遠波の打法と同じきもの、如しと雖も、元來遠浪とは其の波が遠く見ゆるを以て斯く云ふものにして何處と何處と、云ふが如き制限なきものなり而して其には波の立つが如き風情は作らざるなり、然るに今此の沖津波とは岸の彼方中間に洲先を出して其邊に淡霞糺糊たるものを打らて波間を隔て、彼方にあり以て少しづつ、波立ちころの風情を作るが故に前面にあるは乃ち廣濶たる港若しくは灣などに見立てるもよし、向なるは沖津波と分て打つことの心得たるなり

入江波

入江波即ち灣若しくは浦等凡て海岸の弓形をなせる處の波は之を打たんに先づ位置を宜しく定めて入江の遣らるべき所へみちん砂を蒔きて唐鳥羽にて山形にすいくと一羽づつ、並びたるを正しく打つべし、波立つ事なしとす、而して岸は波浪の打寄せるが如き様子ありて且つ打ち波寄せ波歸る波とつ波も一手若

しくは二手位は難へて作るべきなり

渦巻

渦巻とは海中の水が或る一の孔穴に吸引せらるゝとき若しくは海中に突出せる岩に衝突して生ずる旋轉状のものを云ふなり、此打法は例へば巨巖の突出せる處に大流川ありて之に當りて舞ひ廻りて水の渦巻きつゝある様をばみちんを丸く盛り上げて其砂の上を至極輕やかに筆羽根の筋羽を以てくるゝと廻轉して其中心と思ふ所に至つて其羽根を抜き揚げるなり、而して其跡を小匙の柄先を以て少しくあしらいてきりゝと丸め廻はして巻く様を作る、其の淵の方に流入するものと流出するものとを區別して兩方の水面を打つべし、淵の近邊には程好く添石を置きて廻ましく感ずる様に作るべし

岩打波

岩打波の様を打たんとするには、盆に基礎となるべき主石を置き其主石の根元に於て波浪の荒々しく打ち掛けて立昇る様等を作らんとする位置に豫めみちんを高く盛り上げ置きて先主石の位置を確定し、此確定の済みたる後は盆中より

先の主石を取り出して片付け置き豫め盛り上げ置きたるみちん砂を波羽根の如くに其羽根先を喰ひちぎりたる筈の如き羽根乃ちぎり羽根を以て任意に立波を打つなり、又岩に衝突して水烟起り玉滴跳る様などを打つなり、又打ち付けて歸る波の様を打つなり、皆な是等は其波の先端を小匙及び柄先にてぐるゝ丸く廻はして逆巻きを作るなり茲に於て初めに取り出し置きたる主石を復た元の如く盆中の位置に据え置くべし、又洲崎をも作るべし、色砂にて其波浪の激する様を表はすなり其上に一の砂及び二の砂をまばらに置き以て波浪の爲めに磯の上に斯く打上げられたるなりと云ふ風情などを示す事なり

青海波

青海の波を打たんとするには、先づ第一にみちんを充分濃く蒔きて筋羽根にてなりとも若くは波羽根にてなりとも羽根を傾斜して持ち向ふの方より小さく山形に波を打つて漸次に大きく波を前へ前へと造り來るべきなり漸次に順を逐ふて重ねては又重ねる法に依て波浪を作るときは下層となる波より先方へ先方へと打ちゝして以て重ねるが如きは技甚だ拙にして醜くきものなり、故に此波

の地盛は前ほど砂を高くして向ふへは漸々に順を逐ふて低くなすなり而して向ふは至て薄くすべし。浪も小さき山形にすべし。又前方は筋羽根を使用して疎らく跡を付け向ふに至るに従つて細く羽根は筋羽根を代へて波羽根となして打べし。斯様にすれば景色をく深く見ゆる事なり是れ秘傳とする處なり

河浪

河の浪を打たんには微細の砂を用ひて第一に川の沿岸を作り中にみちんを打ちて之を波の羽根にて水をすらくと一羽々々を長く迂曲して引くなり。而して川の波の習ひと云ふは川縁の所ばかりに限られて少し突き當る波の様を打事は秘傳なり。又川の中に小砂を適當に散し置きて瀬を作り、其瀬々の處に淡々としたる波浪をあしらふべし

片男浪

片男浪とは其打つ波が高きを云ふなり而して此の波の打法とは左方より、右方へ波浪の打寄せ來たらん體にせんと欲せば斜めに低く小波を左の方跡へ打ちて戻る様に打てばよし。其戻る處の波浪の下すら掛けて寄する波は高く打つべし

其羽根の引き止りは少しく前方へ丸るめて引き揚ぐるなりとす故に波の二夕股の如くなるものになるべし

女浪

女浪とは前に高き波浪を指して稱せしもの即ち男波に對して、低くき波浪を云ふなり。今此女浪を打たんと欲せば筋羽根の荒きものを二枚重ねて通常の法の如くに波浪を高くゆり強くして打ち寄する状況を男浪と稱せしが、續いて其跡よりか若しくは其下になりとも跳れへか追ひ波を打つなり。此追波が即ち目的とする女浪なり。見れば波の羽根にて常に打つが如くに打つなれども波の脊のあるやなしやに極く小低く少しく迂曲して且つ短く作るなり。而して此男浪及女浪を兩様共に一盆中に打つときは之を女浪男浪と云ふなり

吹き寄せ波

吹き寄せ波を作らんとするに縦冷ば波の風景を右より左の方へ吹き寄せせる體を作らんとするに當ては匙にみちん砂を揃ひて盆中適宜の位置に下地を豫め作り置くなり

而して波の景色をして奥深き體に見せんと欲せば此下地の向ふ邊なる砂を薄くして波の下地を小さくし、前方の砂を厚くし下地も亦大きく作り置くべし而して一匙々々にも斯の如き心得を以て砂を或は厚く或は薄く薄くべし是れ景色をして深く見えしむる法なり、又波の高く寄せる景色にせんと欲せば前と反對にして向ふ邊は砂を厚くし前方は薄くすべし下地も小さくし一匙々々にも前の方は砂少なくすべし是れ波浪をして高く見えしむる法なり扱此下地を作りたる上へみぢん砂を厚く薄かふせて筋羽根又は波羽根にて手傾斜して羽根を持ちつ、砂の上面を少しづつ、揺りながら横に寄せ波下地に盛置きし砂の高みにて止め置き一匙々々の跡を一羽根々々々にて止めるなり

漣

漣とは池水若くは河水の如き波の常に小さき處に起るものなり、其打法は下の如し、乃ち波羽根を一直線に持ち一羽一羽山の形の如く一畝づつ、打ては引き捨て打ては引き捨てして小波を作るなり即ち此小波を二波寄せ連ねて雙ぶるもよし又三波浪を一として厚く掛て打なり、斯様に打雙べたる波先若しくは波間

に歸る波立つ波の風景を少しづつ、扱ふもよし又水玉の散る景色をも打つべし以上を以て盆石術の秘訣と稱せらるゝものは殆んど網羅せり、依て盆石術の秘訣も是にて終らんとするに尙ほ少しく必要なる法あり次に記するは所謂實用的の盆石なりと信す

結婚

盆石は其始に於ても祝意を表する爲に支那より來りたるものにして決して遊戯的のものにあらざることは前に記するが如し實に冠婚葬祭に於ても亦之を用ふるものなれば茲には結婚の打法を記さんとす、此結婚の時には古より二面の盆を用ふるものなり即ち女島の盆、男島の盆なりとす、女島の盆は嫁に象り男島の盆は婿に象るなり、而して女島の盆には仲立の石、男島の盆には因縁の石を用ふるなり、興入して九獻の式終るまでは女島の盆上席にありと雖も既に式終れば男島の盆と交りて男島の盆上席となり且つ二面の盆相對向する様になすなり又此時には砂の色も相合する様に打つものとす色直しの時には盆面に主石を二つ雙べ立つるなり、而して主石二箇及因縁石仲立石等にて合計四箇の石が一

盆に立つ其中へさゝれ石を一つ立つるものとす。此さゝれ石を立つる時には祈念して、君が代は千代に八千代にさゝれ石の巖となりて昔の蒸すまでを吟じ、笏を以て少しく石を打ち鳴らす之れ即ちかたむると云ふ故實なり。世俗に結婚の夜其家に石を投じて祝するといふも又故實なり。元來我神代の頃、石たゞと云ふ島あり、此島陰陽和合の理を教ふ故に石を以て祝するなり。さざれ石を使用して祝ふも此の理なりとす。

祭禮

祭禮の時に打たんとする盆は桂盆に打つは定法なり。或は白木の文臺に打なり、主石は神體を象るものを用ふ。濱は秋津島を象る。此盆は一面の品類標相ありて打つべきなり。日石、月石、影向石、禮拜石を置くべし。凡そ石類は奇數即ち半の數に立つべし。又此式の盆は多くの石を用ひずして只一石を立つることもあり之亦神體とす。濱の形は日本一國を表し、水波の象は四海に準へたるものと心得ふべし。而して主石の位置は盆の正中とす。

佛式

上文に於ては結婚及び神祇の祭禮に關するものを記せり。今や是に於ては佛式を記し以て盆石の章を擲筆せんとす。即ち葬式に於て打つべき盆は主石には本尊物を象りたるものを標相して立つるなり。濱の形は諸佛國土の寶地に象り、又七佛石、佛名石、來迎石、禮拜石を置くことなり。又夢路砂なるものあり、盆の縁に長く打ち置く又無漏地、有漏地を打ち砂の地取を分つべし。海をば眞如海と云ひ波をば功德の水とするなり。主石の位置は盆の正中なるを要すと雖も又少しは向ふ邊に寄てもよし。

第七章 盆石圖解

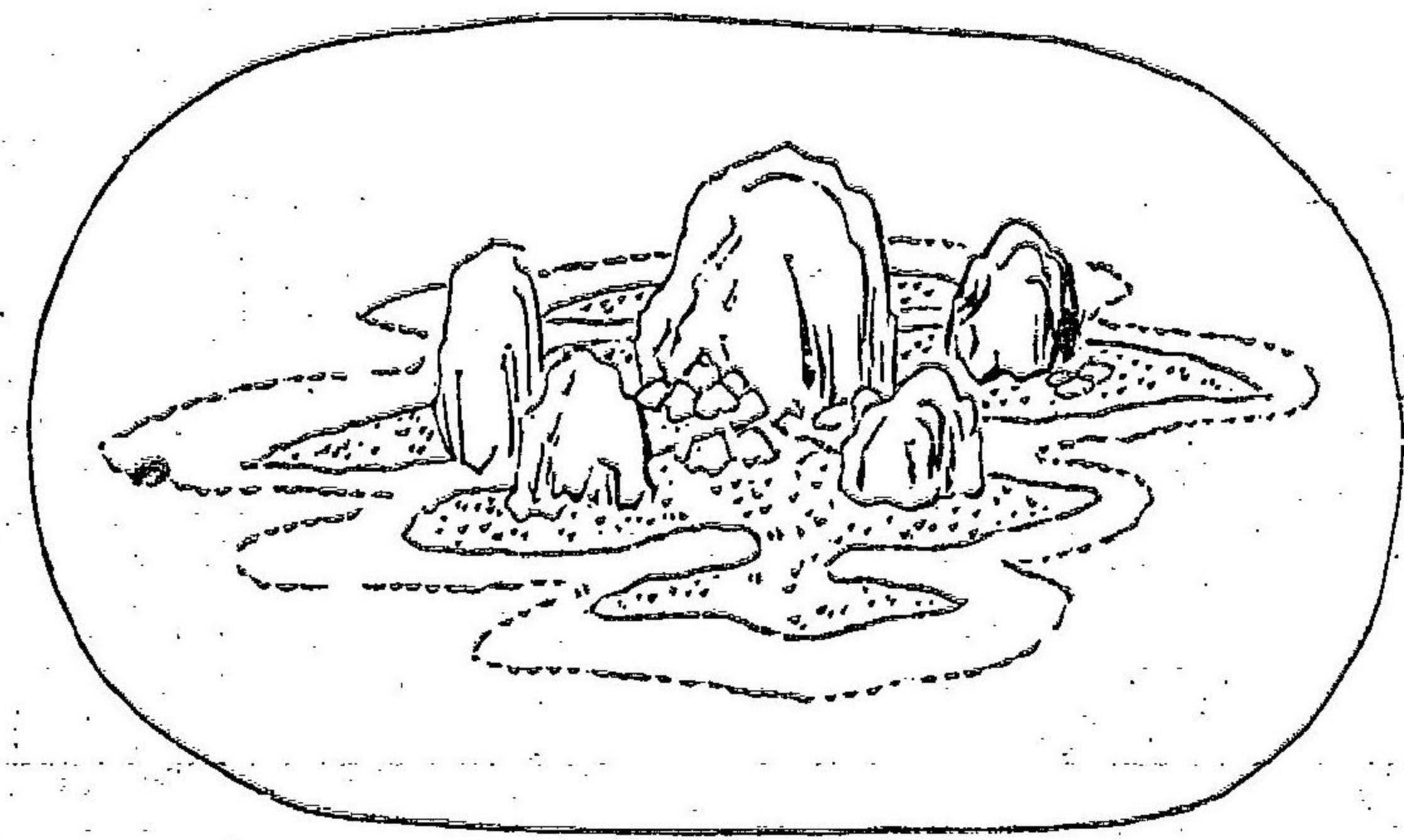
正月三箇日

五岳三山

祝元三

以御花

福壽草

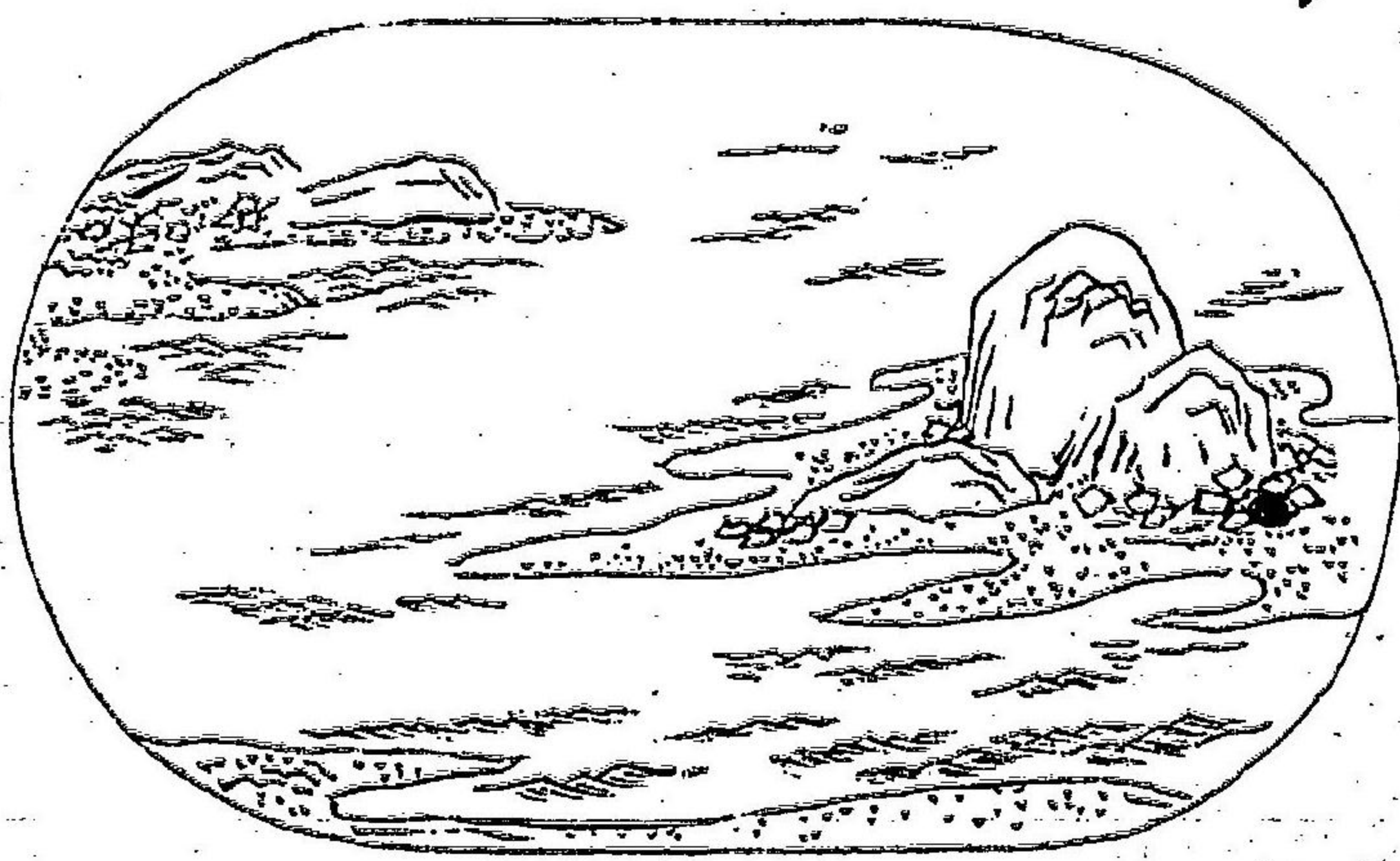
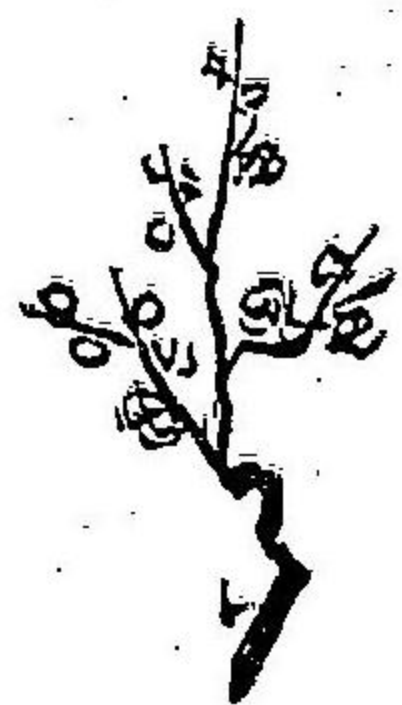


正月 祝

昔百濟國王仁奉

和歌難波皇子勅

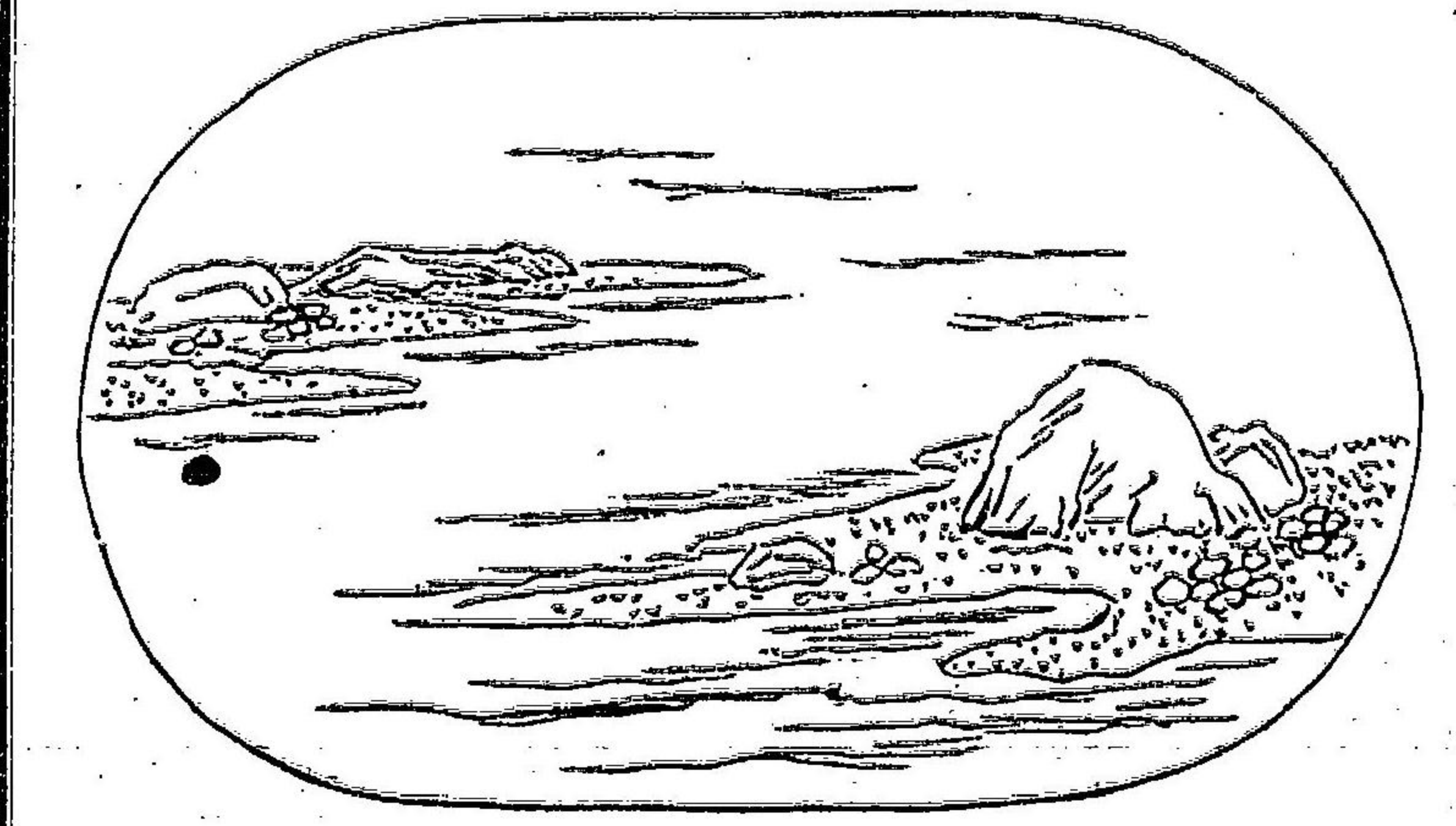
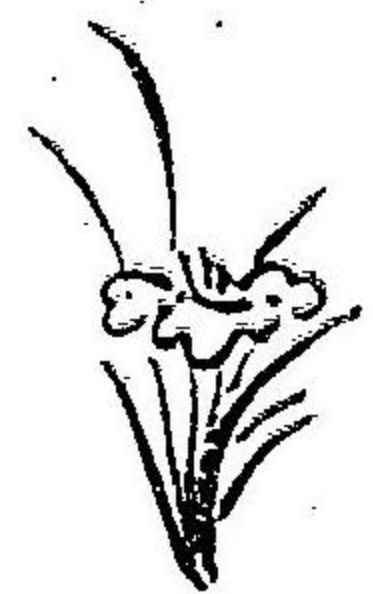
即位題



五月

大和國

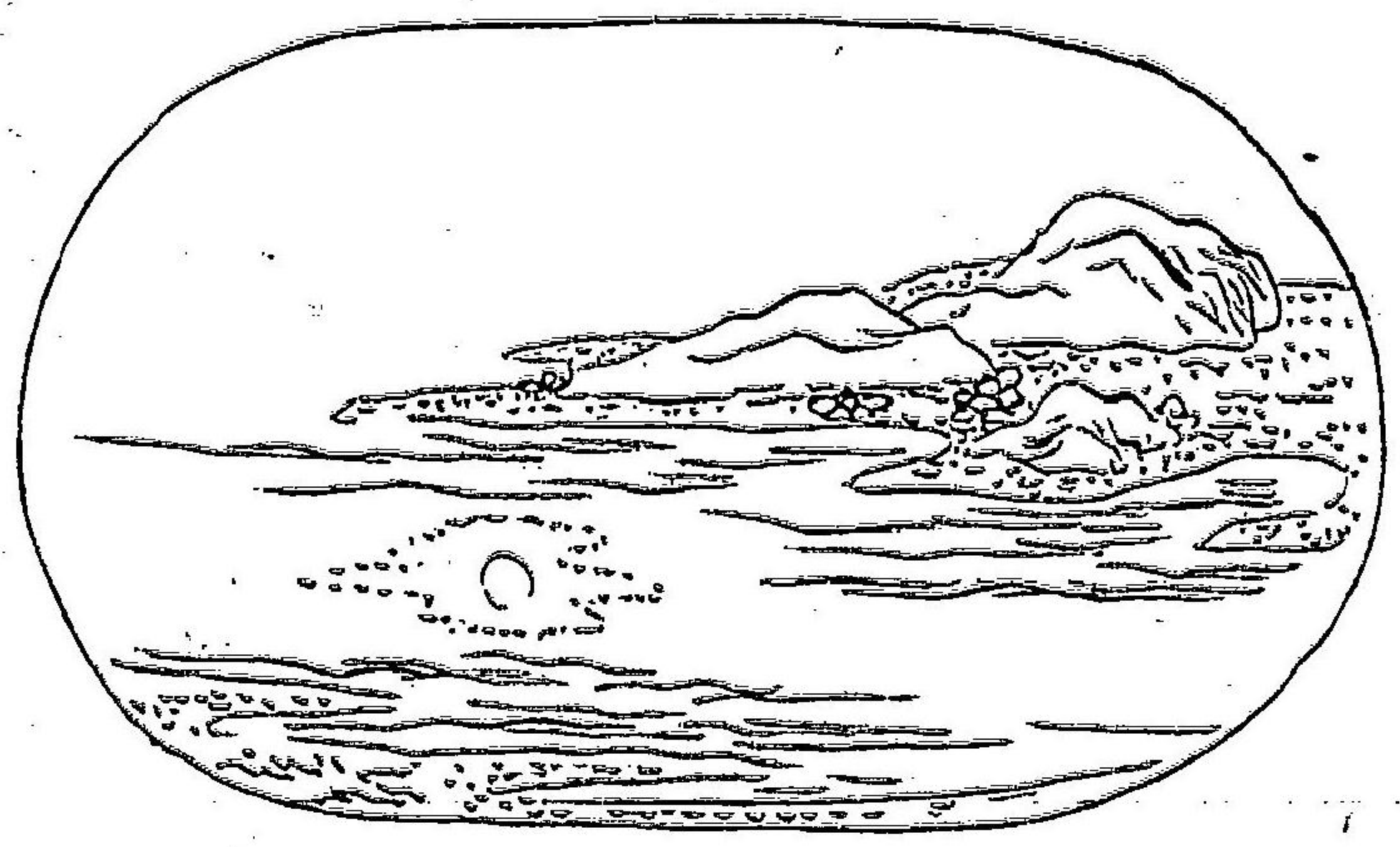
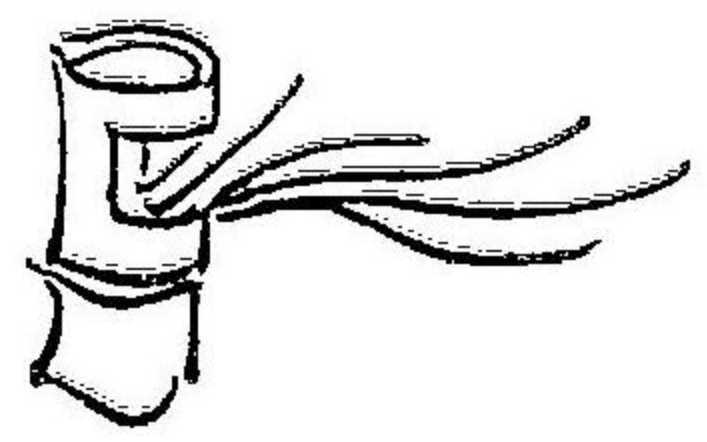
絕間池



八月

山城國

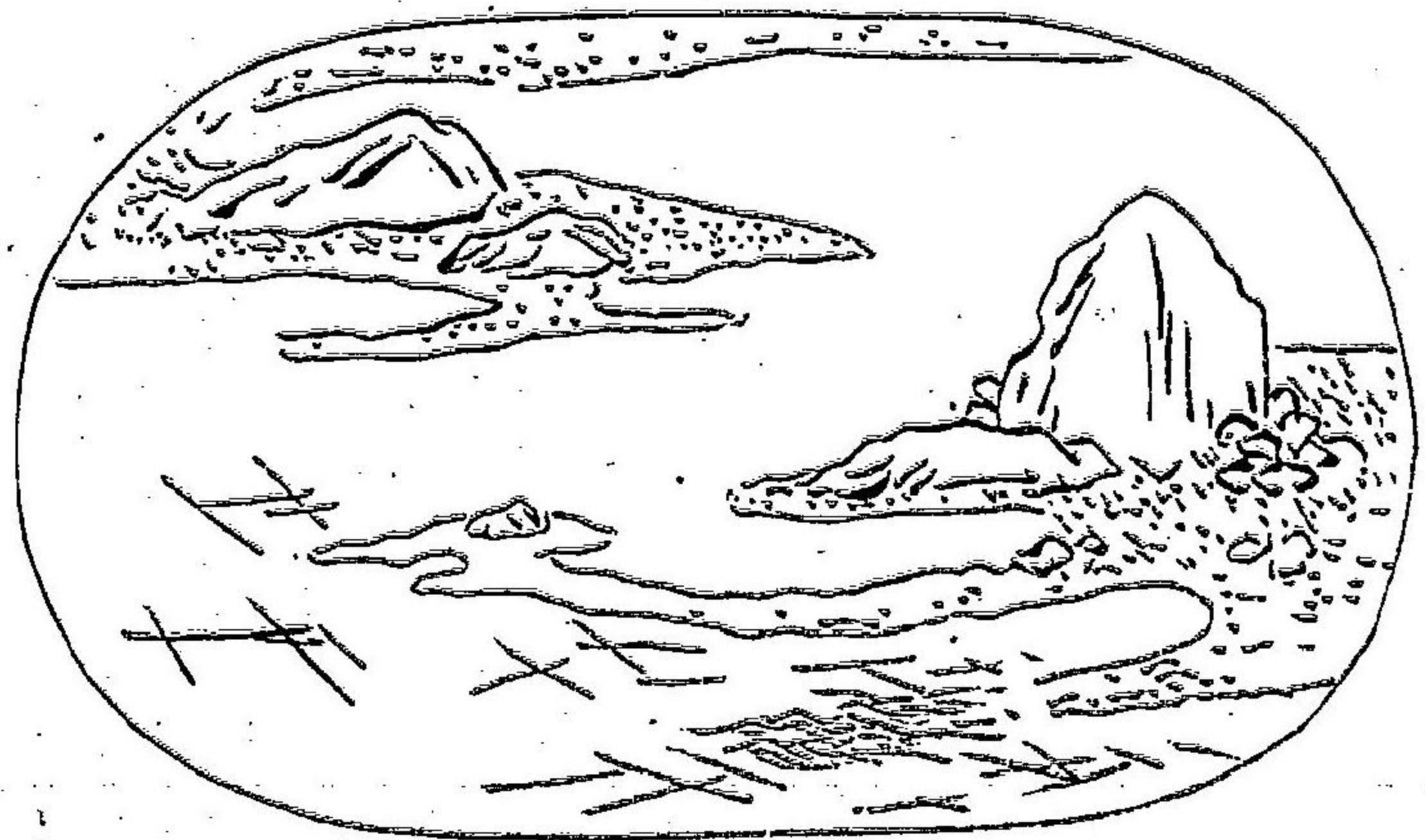
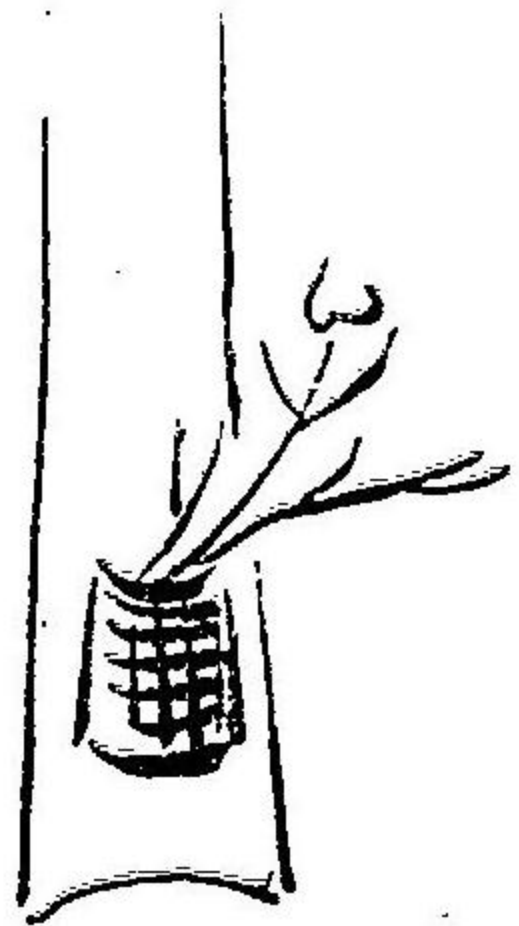
桂渡



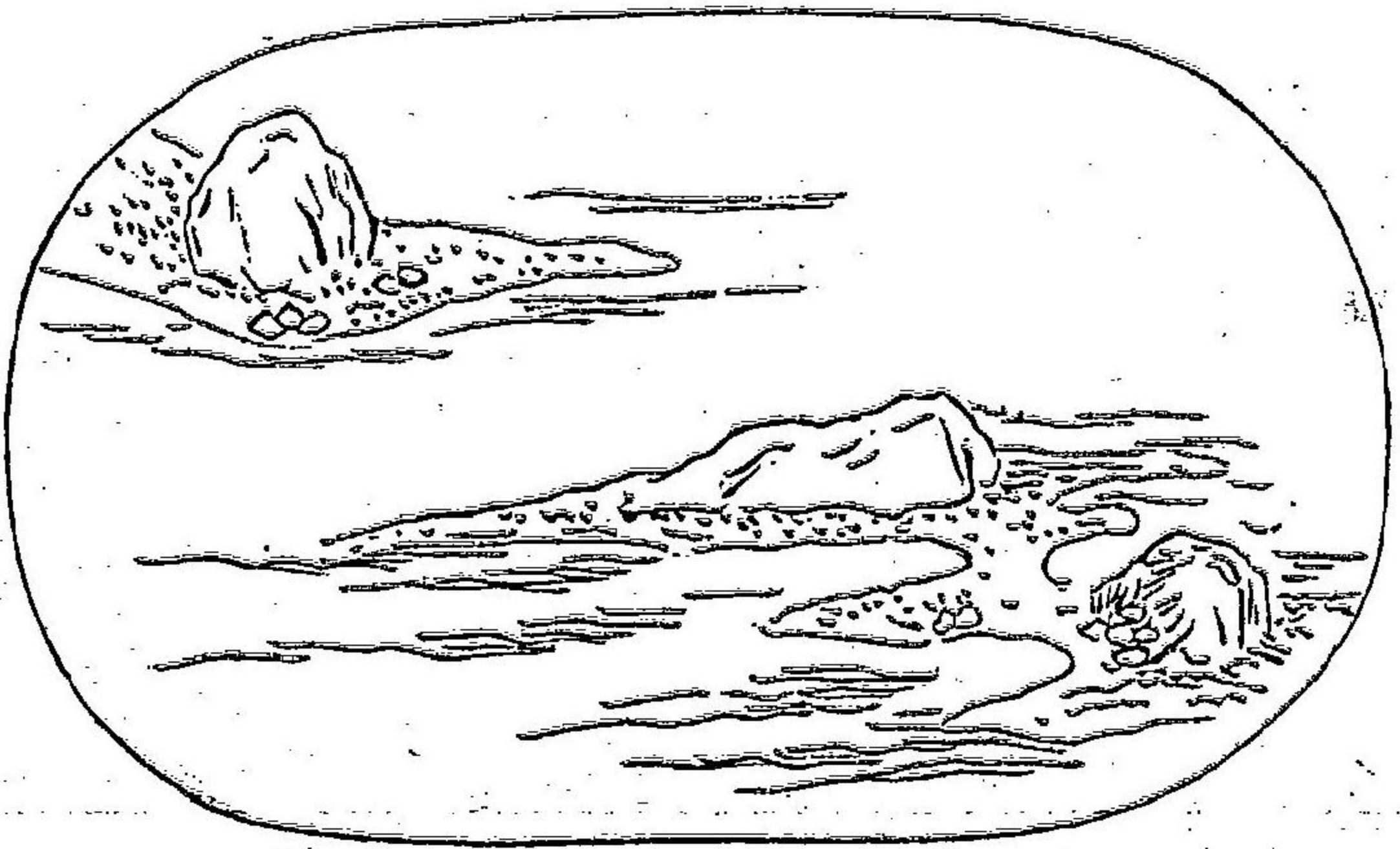
十一月

近江志賀

大和田

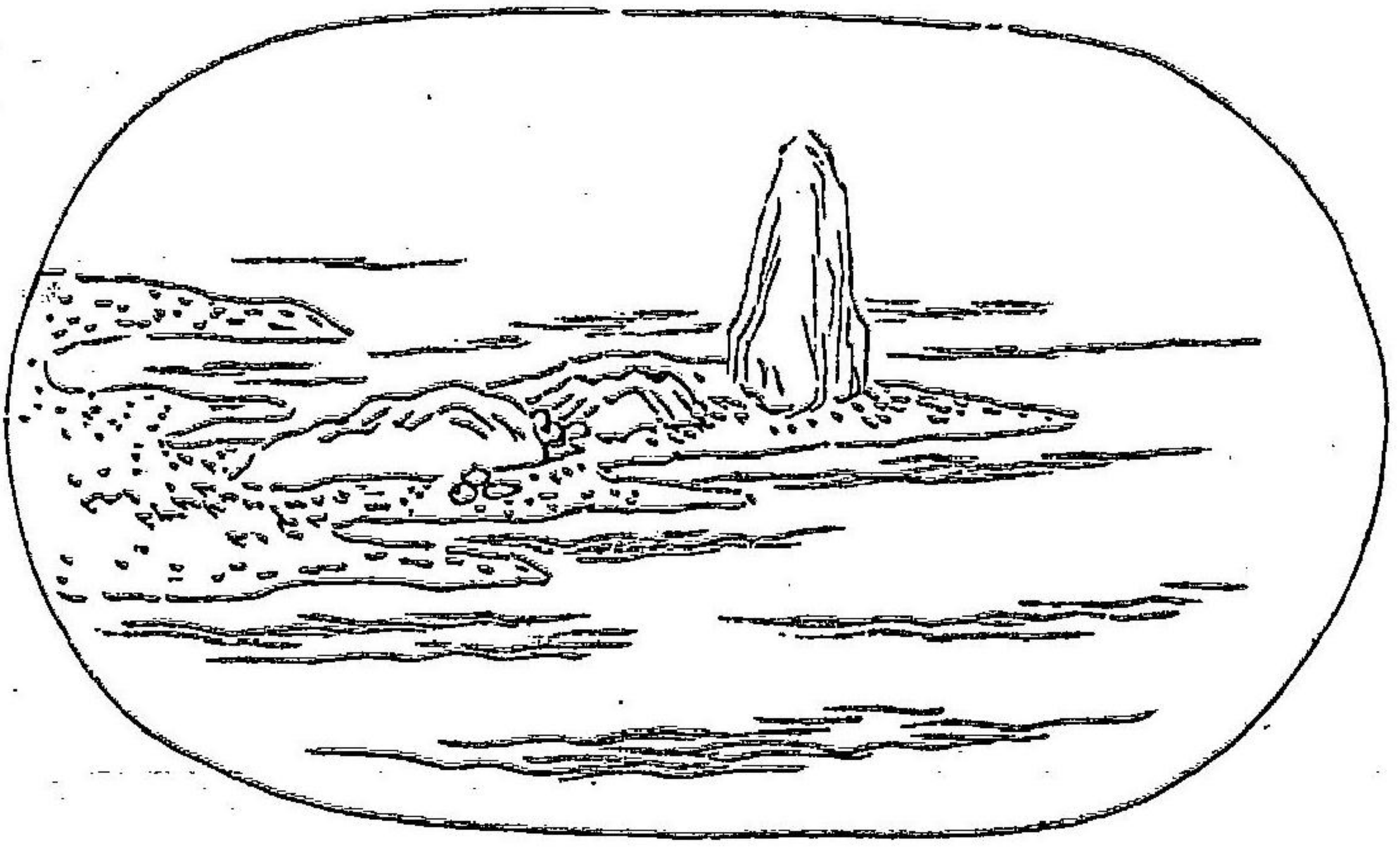


婚禮納采
筑後國千峯川



任官
番入
目見

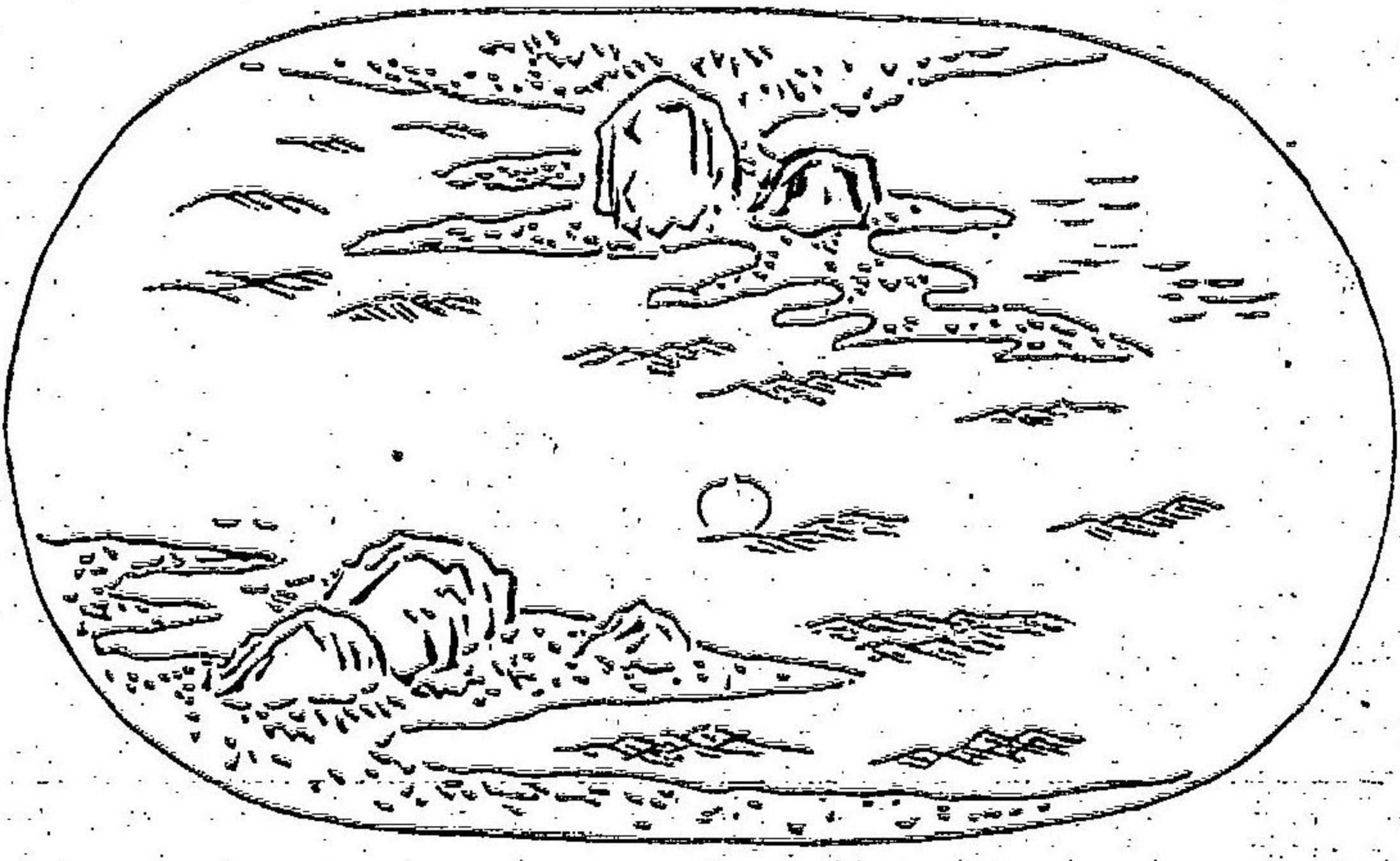
飛驒國位山



轉宅

移居

攝津長居浦



第八章 盆山法

本書總論の條に於て盆石盆山盆景には各區別あること而も其區別の混同し易く爲に盆石を以て盆山と爲し盆山を見て盆景と信ず、勿論此れ充分の研究なきもの、混同する處ならんも、而も現今師匠と稱し先生と呼ぶる、内にも亦此類の者尠しとせず、些細に觀察研究すれば其間に章々として明なる區別あるものなり、少しく前の區別を今又茲にて記するは重複するの嫌あらんも是れ斯道の研究上最も必要な處と信ずれば實に止むを得ざることを、云ふべし、只石のみにて見れば則ち盆石なれど之を山川等の形になせは盆石にあらずして、盆山なり、盆山は盆石より少しく人智の美術的軌道に進行せしもの、其より更に進みたるを盆景とする旨を前條に於て記述せり

凡そ天地間の物體にして荷も形態を存するものは、何物と雖も皆左右前後及び上下の面を有するものなり、而して石の如きものは何人が之を観るも明に其然るを知る、既に其使用する石に左右前後あるを知らば又盆面に立つるに當りて

も前面の部は以て前面とせざるべからざるや論を俟たざるなり、即ち盆山に於ては石の表の面を以て之を南として日に向はしむるなり、従つて其裏面の部分は之を北とす、其表面に向つて左りの面を想像すれば是即ち西にして、其右の面は之を東とするなり以上の如くにして其東西南北の方位に對しては石の前後左右を觀察すべきなり、次に其石を立つるに如何なる場所を石を立つべきかと云ふに、凡そ盆の正中の位置を指定して其所に立つべきなりとす是即ち眞の立て方なり、而して盆中其中央の位置にあらずして或は左方に偏し或は右方に寄して立つるは略なり之れは行と草との時に於て使用する砂を略して使用せざるを云ふものなり、之を要するに左方若しくは右方と何れの方に立つるとするも其偏寄の比は正に七分三分、前後は四分六分の位置を取るべきなり

器具

盆山の器具は前に記述する處ありしなり、即ち茲に簡單の方法を以て再記せば、さじ、砂打へら、羽箒の類なり盆は實に器具中の最も必要なものにして古實にはうつら盆あり、桂盆とは、楕圓形の黒塗りなるものとす、又神佛節句には

白木盆を用ふ、之を桐の盆臺に載せて莊るなり、備は其網目の大小に従つて一號より六號までありとす、一般に羽根は鶴とす

砂打

砂を打たんとする法は、先づ第一に、石を立つるなり、而して地砂を蒔くなり砂の大小は心まかせとす、其後の打方は百花爛熳として春色萌えんとする様も可なり、夏の山に般々たる瀑布も亦可なり、月は高く金天に掛りて秋氣肅然たる状亦可なり、野に菊花あり山に紅葉ある晩秋亦可なり、寒風凜烈として肌を冒し窓外浙瀝として降雪の状亦可なり、宜しく四時の風光を考慮して盆山の範圍に於て打つべきなり

石

盆山に於て用ひらる、石は大き五寸乃至六寸五分にして高さは三寸より三寸半までを用ふ、而して其形状は素より自然のものとする故に其形態を奇にせん爲めに殊更に手を入れるが如きことあるべからず斯様な石は死石として嫌はる、但し止を得ざる場合に於て其根を切りて平坦となることあり、参考に供

するの目的を以て今昔日より名石として非常に珍重せらる、もの、名稱を擧ぐれば

淺間山 (京都) 末の松山 (京都) 萬里江 (近江) 庭山 (京都)

九山八海 (京都) 飛龍 (土佐) 殘雪 (京都) 八橋 (夢の浮橋)

等尙ほ數へ來れば只に此れのみならずと雖も悉く列擧するに遑あらず一般に賞用する形態及色澤は

富士山の如き形態あるものを第一とす

嶺岳市邑備りたる石も可なり

谷川の石は盆山に使用するなり

海中の石若しくは山の石は使用せずと云ふ

等とす、尙繁雜ながら終りに述ぶべきは見立如何に好きも其石に難相を具ふるものは使用せず、是れ前の故意に其形態を變じたるは用ひずとせるものと一對なり記憶の範圍より必ず脱せしむべからざる事なりとす

石のうた

石の歌とは盆山に於て石を處置するに必要なる法則を敢て條項に依て記述せずして、其れが歌を作りて法則とすべき事項を咏みしなり

春青し夏山黒く秋紅葉

冬白妙となる雪の山

春は花秋はもみぢに冬は雪

かわらぬものは夏山の色

雪などの時にもなき山の

山下に有はもちひざりけり

残雪の日陰は消て日表に

白みの有は背たるなり

雲などは山の腰までめぐりけり

山下にあるは雲といはれず

おもて黒く裏一面に白くとも

それは日陰の雪といふなり
 たつに細く瀧とも見えぬ白筋は
 見立なければ嫌なりけり
 時には雪はなくとも日かげなる
 麓白きはこれはもちひよ
 谷川と見ゆる白みはかみしもと
 山の所をきはざりけり
 紅葉する頃には花も雪もなし
 白と赤きは用ひざるなり
 石はたゞふんばり強くほね高に
 谷峯ありて岡も江もあり
 盆山打法の本意は乃ち次の詠歌を以て表示し得るなり
 盆山の前にふたつの濱ひさし
 後に遠き海はえならぬ

是の歌は彼の足利七代將軍にして東山公と稱する義政の詠みしものなり

砂打法

春は磯の波しづかにして沖の浪磯の波より高し故に洋々として麗らかなる體を可とす、沙干のかたも打つなり
夏は磯の波しづかにして沖の浪も同じく静かなり、涼しく納涼によき様子有り、浪は小細なる波をきれいに打つべきなり
秋は波の高きものと低きものと打まじへて荒き時もあり又しづかなる時もあり、湧々として廣々としたる様にすべし、中秋大潮の景色なんと考へて打つべきなり
冬はいその波あらくとして沖の波は高く打ち凄しく寂しき景色に打べきなり
花の砂の打様には石に依て見立つるなり
月の砂は石によりて見立あり、或は寒水石を丸くして地に置くこともあり
もみぢの砂は主石に依りて見立つるなり
雪の砂は廣々として寂しくある體とす或は又石に依りて見立あり

雨中の砂打様は小砂にて地砂さいくとうつなり

雨後の砂あらひたる様に小砂をきれいなる様にうつ

遠き砂うち様は小砂にてうつ

近き砂打様は大砂及中砂を混ぜ合せて打つなり

朝なぎの事前へに色砂をうつ

夕なぎの事後に色砂をうつ

眞の砂打法一色の石を立て三段五段に砂うつべきものとす

行の砂打ち法には瀝びさしといふものあり

草の砂打ち法には砂の大小共に打ち混ぜて以て使用するものなり

祝言の砂打ち法としては泰山不動の體の石あり陰陽石など云ふもあり此等を使

用するなり

神事に關するときは砂打ち法は拜石といふものあり

佛事の時に於ての砂打ち法は靈鷲山などの體を用ふるものなり

祈禱の場合に於ての砂打ち法は降神石と云ふ石あり之を使用するなり

五 徳

盆山は決して遊戯的のものにあらずして、技術的なるものなり、禮儀的なるものなりと云ふことは前々記述する處に徴するも明かに其然るを知るなり、而して其盆山を爲すに五箇の徳あり、徳とは之を平易に解釋せば五箇の利益あることなり、即ち盆山を爲せば下の五箇條の如き利益あるものなり

第一、盆山を飾りある場所にありては物の障礙なく一家の祈禱となる徳あり

第二、盆山は元來に於て清淨にして且無垢なるものなれば百事に付て幸福を引くと云ふ徳あり

第三、盆山を打ちて之れを座敷若しくは床の上へに置けば座敷の裝飾となるの徳あり

第四、盆山を飾り置きて神氣充りたるが如き時に之を視れば大に視感を楽しめ精神を爽快となし頗る氣力を増進す即ち保養となる徳あり

第五、石は水火に逢ふも如何にさるゝも破損したり若しくは磨滅するの憂なきものなれば所謂萬世に亙りて存するなり依て祝儀として用ゆるの徳あり

此の五徳の外に尙盆山に付ては三感なるものあり次に之を記さん

三 感

- 第一、石は犬猫魚類の如く生命を有するものにあらずと雖も其勢や堅固にして侵すべからず
- 第二、石は其勢や堅固にして侵すべからずとは前に記せり、而して其勢の固きにも似ず之を莊り之を視れば虎狼に等しき勇夫も亦其心を和らぐるものなり
- 第三、石は天然所謂人工的にあらずして既に名山の形態を存するものなり
- 生明石
- 盆山に於て生明石として名山の形態具備せるものを非常に尊鄭す、之れ生明石は天神地祇悉くうつるとし口傳ある爲にして詩に吟じ歌に詠じて之を稱揚するなり
- 盆山は床に置くも若しくは平座に置くも其儘置くものにして、物を敷きて置くとなしとす

結論

盆石、盆山、盆景の秘訣は實に以上數章に於て記述せし處なり、之を以て世の斯道を修めんと欲するものは、一度帙を繙かば乃ち諸家の秘密なり秘傳なりと稱して、猥りに傳授せざるの秘訣を了り、能く其蘊奧極意に達するを得ん、既に本編を通覽して以て盆面に向へば、神通の奇技妙手を此が面に打ち得んこと蓋し難きにあらざるなり、故に著者は茲に本編を完結せんと欲するも、敢て責を讀者に得るなからんと信ず、然れども百尺の竿頭更に一步を進め、秘中の秘訣中の訣なるものを記し、以て其痒き所に手を致さんとす、其大々的の秘訣とは何ぞ、則ち排置の法なり、凡そ如何なるものにても之が排置をなすには必ず一定の犯すべからざる位置の存するものなり、而して美術的の技術に於ては殊に然りとす、寫真師の位置を注意し、畫伯の位置を注意する等、其他種々の技術に於て吾人等の目撃する所なり、故に其位置にして法に背き居らんか、看るに足らざる拙劣を繪くに至る、目下世の盆景家と稱する士にし

て主義なく、理想なきものは皆な此位置に注目するが如きこと無く只だ石砂を盆に撒布するが如くに心得へ居れど、其は談するに足らざる輩と云ふべきなり、今其位置に付て論せば、即ち盆面を縦に四等分し、横に五等分したりと假定し、其の等分は線にて區畫せば、縦横の線は交互に交錯して、其交錯を生ぜん、其交錯したる點を陽とし、交錯せざる所を陰と定む、斯く盆面に陰陽の點を假定し置き、其陰の點には陰に屬するもの、陽の點には陽に屬するものを排置すべきなり、之を四際五横の法と稱し大々的の秘訣として古來より、尊重せしものなり、學者此法に従へば實に整然たる盆景を打ち得るものなり、勿論盆の形状は圓形あり、角形あり、扇形あり、楕圓形ある等、種々の形状を存して、其四際五横の法を施すに一定し難きの感ならんも、其は一々の形状に就て説明するの要なし、即ち學者の應用を俟つに外なしとす、此四際五横の法は又之を陰陽呂律の法とも稱す、陰と云ふも呂と云ふも同性なり、又陽と云ふも律と云ふも同性なり、以上の説明は實に大々的の秘訣にして、斯界の虎の巻たり之を讀者に授け以て盆石、盆山、盆景の終を結ばんとす、更に章を重ねて盆庭に及ばんとす

第九章 盆庭總論

本章に於ては盆庭を論せんとす、盆庭は目下世人の盆景と稱しつゝあるものなり、而して之を盆景と云はずして盆庭と云ふは前章の盆景の條に於て論じたるが如くなれば爰に又記するは徒に煩はしければ敢て言はず、畢竟之れを盆景と稱するは眞の盆景を知らざるの致す所なり、元來盆庭は盆景より轉じたるものにして昔時は鉢山水と稱せしものなり、鉢山水とは我國の風光名美の地を鉢に移寫せしものなり、精密に論せば昔時の鉢山水と今日の盆庭とは全く同じものにあらず、然れども其大部分に於ては異ならざるなり、即ち今日の所謂盆庭は昔時の鉢山水が變じたるものとす、只世人の之を盆景と稱するものは其誤謬も亦甚しと云ふべし

盆庭を造るには和歌、唐歌の意を以てするものにして空に一定の標本もなくして造るべきものにあらず、一定の標本なきものは兒童の玩弄する函庭と同様になるなり、又能く陰陽呂律の法に適ふべきを要するなり

其材料となるべきものは草木、木、石、土、砂、燒物、鉢盆等及二三の道具とす、盆庭家として心得置くべきことは自分が土を捏ることなり、之は時に依ると随分困難なるものなれども、人に依頼しては其硬軟の度合を適當になし能はざることあればなり

盆庭法

盆庭は草木及び燒物を用ゐて工夫するものなり而して其の多く用ゐらるるものは榆、柘榴、杉、扁柏、松、櫻、竹、蘆等なりとす、而して盆庭を志すものは之に要する草木の培養法を知らざるべからず、若し然らざる時は構造僅に數日を出ずして草木悉く枯死し、恰かも冬の枯野を見るが如き感起さしむるは拙の至りなり、勿論枯野の風景を最初より構造するは可なれども、自分は春風駘蕩として諸木將に萌え出んとするを造れるに、其結果は北風寒き枯野となりしが如きは採らざる處とす、以下順に従ひ序を逐ひて培養の概略を記述し以て一斑の知識を知得せしめ他日の經驗と相俟て、完全の技倆を表はすことあらしめんとす

土質

草木が發生して、成育し生活し得る主要なる基原は土壤に依頼せざるべからず（尤も草木の或る物は或は石の上に或は水中に發生、生育、生活を經營し得るなり）されば土壤は草木に最も肝要のものなり

草木即ち地球上に散在するの草木は其種屬一ならずして互に異種の系統を以て存す、而して甲地に於ては發生、生育共に完全を得る草木も之を遠隔の乙地に移植せば、以前と其趣を變じて其發生、發育共に不充分にして却て萎縮し終には枯死するに至るものあり、一例を擧ぐれば下總の國には桔梗の發生し發育するを見ず、偶々之を他國より移植するも、終に生を保つを得ずして枯死するなりと、此れ等は土壤と草木との關係を示すものなり

昔日の人は曰く天慶の時代に平親王將門、下總、常陸等の國々を掠奪して朝廷に抗す、時に藤原秀郷なる者あり弓術に精巧、婦桔梗姫の忠言に依て將門を討ち亡ぼす、將門の靈之を怨みて下總に桔梗を生活せしめざるなりと、之れ文明の今日、何人も首肯するを價せぬ伽話なれども其桔梗を生せざるは事實なりと

す、之れ畢竟土壤の適せざるに依るなり

又蛙草と云ふ一種の草は加賀の國金澤の城下に發生するものにして、東京に見ざる所なり、之を態々其土地の土と共に東京に移すも二三年の内には悉く枯死す

其他甲乙丙丁と順次に論せば其際限のある處を知らざるべし、兎に角に植木は黒土を好むあり、赤地に適するもあり、眞土を嫌ふものあり、砂に發生せざるものあるなり

土の種類

土の種類は之を區別して忍土、黒土、赤土、黒ぼく、黄土、眞土、砂、田土、けとふ土、肥土、三和土、陰土等なり順次に其性質を論せば

忍土
深山には木の葉落つるも之を掃き寄せる者としてなく、自然に堆積して層をなし、數年間雨露の爲に洒さる、を以て腐敗をなし、自然に變化して土となりしものにして草類を植えるに良し、此土は又木の葉を土中に埋むる事七八箇月間にし

て生ずるものなり。又掃溜の底にある土も之と同じ性質を有す

黒土

黒土は一名を武藏野と稱す。色は黒き程良しとす。少しく赤色を呈するは之に次ぐ。多くは竹藪野原を掘る時に出す。粘り氣無し

赤土

蘭、百合、萬年青を植えるに用ゆる土にして、肥し氣無く質は堅く粉末となし難し

黒ぼく

此れは前説黒土の堅牢なるものにして容易に細末と爲し難し。植にて打ち碎き篩にてふるひて用ゆるものなり。眞の黒土と比較すれば少しく赤味を帯ぶ

黄土

此れは土色黄にして粘性あり。粗大に碎ひて鉢の底に入るれば水の滲透良く。従つて植木の根の腐敗せしむるが如き愁なし。地下三四尺を掘れば即ち得らるものなり。赤土又は野土と混交して蘭、蘇鐵等に用ゆれば良し

眞土

此土は砂に似て手觸りはさらさらすれども砂氣有るに非ず。色は黒し。砂の少しく混りたるものは能く之を篩にて分別して用ゆ。水仙、或は柑子類に適す。又砂の交りたるものは芍薬に好し。其實乾燥し易きを以て、盆栽に用ひて草木を栽るには不適當なり

砂土

砂土は白色のものを上品とし。赤色のもの及黒色のもの等は良しからず。是は砂地と稱せらる。地より出づる土を云ふものにして、川より流れ寄たる砂は同様の質なり。然れども海より出でたる砂は鹽分を含有する故に用ゆるときは植物を害す

田土

稻を植えたる田の土を云ふなり。又沼池などの自然に埋まりたる土は泥土の變化せしものにして小石を混入す。質堅にして乾燥し易し。或は濕り勝なり。之を能く篩に掛けて得たるものを草にても木にても根を高くし植ゆれば林檎、桃

等には最も適當なるものなり。之に黒ぼくを合せたるものは朝靨、櫻草、松葉牡丹等を培養するに大に善し。けとふ土。

此の土は稻の株若しくは蕨の根の如きもの、數年土中にありて終に土に化したるものをいふ。山より此種の土を掘ることあるは其は同一のものにあらず、黒色にして軽く能く水を吸引する性あり、之と鹿角菜とを鍊合せて任意の石形を作りにて夫れに葱、石菖等を栽する時は能く水を吸引するを以て生長するなり。肥土。

山野、畑の通常の土質に冬至後寒入の前に於て下肥を撒布して、寒冷の利用に依て之を凍結させ其肥の乾きたるものには又下肥を撒布す斯くの如く三四回同法を繰返して後は之を俵にて包みて蓄藏し置くなり。故に之は天然の肥土にあらず、人造に係るものなり。春分の期節に及んで之を日光に曝露して混入せる小石或は草の根を除き植木を栽るに際し適度に和して用ふるなり。三和土。

之は野山の土三、赤土一、眞土一と云ふ割合に混和し小砂利を篩ひとり下肥一を鍊合せ二箇月も置て用ゆるものにして。之に薬灰又は糠を焦て交加すれば其効果尤も良きものなり。

陰土

陰土は、山の陰若くは塚下の土にして常に日光に當らざるものなれば濕氣を含み地性冷かなり、之に下肥と油糞とを交へて用ゆるときは木を栽るに尤も宜し。然れども草類には用ひ難し。其は莖と葉とのみ生長して花を生ずること少なければなり。

草木の性質

盆庭は種々の草木を以て一の景色を作るものなれば、其要する處の草木の如き必らずしも其土地に産するもの、みならず甲は暖國に産し、乙は寒國を好む等種々あれば斯の道を志すものは深く注意すべし。若し暖國の物なれば南方の日當りよき處に栽え、寒國のものなれば北方に栽ゆるなり。

草木の移植

移植せんとするときは能く其草木を移し植ゆるに適當なる時節を知らざれば枯死するか或は完全に生長せぬものなり、夏季に至りて繁茂する水は春は緑葉の出ざる時、秋は葉落て後に植え替へるを可とす

常盤木とて冬に至るも落葉せぬもの例へば松、杉、柏の如きものは夏季其新葉の延び固まりたる時を以て植替を行ふべし

移植するときに注意を要するは根なり、凡そ植物は其根より營養物を吸収して自體の生活を保つものなれば、之を掘り採るときには根を毀損せざる様にすべし、若しも毀傷を受けしめしときは直ちに截り捨つべし、若し其儘に放任し置くとときは其部分より腐敗し始むるものなり斯くして終に植物は枯らさるゝに至る

又他國より運送されし植物は大抵其根頭の枯死し居るものなれば能く觀たる上に於て其頭部を切斷すべし

春季に移植を行はんとするときは植込むべき穴を穿ちて直ちに植ても可なり、

植えて後ち根際の地上を肥料にて覆ひ置くのみにして可なり、然らずして肥料を埋むれば其根を熱し隨て夏季炎熱の早魃に堪へずして枯死せしむるが如き愁あり

秋の末方に移植するには植え込む可き穴の底に厩肥を埋むるものなり

今數植木に付て詳述すれば

黄梅 三月四月の頃に植替ふべし

榧 三月と九月

楓 四五月頃と九十月頃

海棠 三月初め

唐橘 春秋によし、此木は常に日蔭に置くべし冬は窓中に入れ置くべし

南天 何時にても可

梅 三月が九月、冬にても寒中ならざれば可、夏は枯るゝこと多し

柳 三月九月

松 之は甚だ難しきものなれど三月の頃縁の延び掛りし時を可とす、暑中

櫻 是不可なり其他の月に於て移さんとせば根を廻しおきて移すべし
十月頃より三月頃までとす

柘榴 三月、九月

櫻桐竹 三月と九月性甚だ寒氣を忌む故に霜を避くべし

薔薇 植移は何時にても可なり

石菖 四五月の間に鉢に鉢に取り根を分るべし

檜扇 三月中旬に根を分けるべし

櫻草 九月の中旬に根分するかよし

福壽草 九月頃

播種

植物は繁殖せしむるには接木挿木分殖法等種々あれども其種子を生ずるものは
種子を蒔きて蕃殖せしむるを可とす、種より蕃殖せしめんには能く其種子を検
査して充分の勢力あるや否やを知るを要す、又秋收穫してより來春まで貯蓄し
置くに能き方法を爲さるべからず

種は春に實るものと秋實るものとありて一定せずと雖も既に實らんとする時期
來れば何人も認め得るものなり、先一粒の種を割て中の核を見るに、肉部に
満ち、核は殼に満ちて堅硬なれば之れ實りたるものなり、既に其熟したるもの
は二三日間日光に曝して濕氣を去り、之を紙の袋に入れて釣し置き時期の到る
を待て蒔くべし、又採蒔とて實を採りて乾かさず直ちに蒔くこともあり、而し
て蒔く地には代を作りて之に蒔くべし、直ちに地に蒔けば發生も後きのみなら
ず十分に花を開かぬものなり、既に代に於て發生したるものは鉢に移し取るべ
し

代は一坪にても又は之より廣きとも狭きとも四方は菰か炭俵にて圍ひ、其内の
土を耕し、糞を厚く敷きて其上へ砂と土とを交合せたるものを布き又其上へ
灰と下肥とを混和し腐らしたるものを一面に撒布し、其上に種子を蒔き細かな
る土を淺く撒ひ掛け置くなり、而して土を深く掛くれば苗は腐敗して發生せず
種子の細小なるものは土に交へて蒔くべし、然れども風雨の爲めに流れ失せぬ
様に注意すべし、輕き性の種子は發生するに至るまでは雨撥をなして失せぬ様

にすべし
 如何なる種子にても蒔て後直ちに水を撒くべからず
 種子を收めたる後直ちに蒔かすして時へ遅くときは枯死するものは、直ちに蒔きて其蒔きたる年の冬には霜避けをなすべし
 果物は凡て皮と共に蒔くべしといへど皮と共に蒔くときは發生時期後し、且生せざる前に腐朽するに至ること數々あり、故に核のみ蒔くを可とす

害虫驅除

根切虫 色は鼠 芋虫の如しと雖も小なり、常に土中に棲息し早春出で、芽を喰ふ
 地虫 根を喰ふ色は碧、頭部は黄色なり
 之れ等の虫を驅除せんには石灰水を根元に注げば地に滲み込む故に虫は死す、然し石灰水を滲透せしめし根の所に二三日を経過せば水を注ぎて洗ふべし、然らざれば却て石灰水の爲めに木を枯らす愁あり
 木虱 空氣の流通の良しからざる處に多く生じ、初めは新葉につき漸次葉の裏

面に簇生す、斯くせらるゝときは芽は枯れる
 之を驅除せんには煙草の殻を水に漬て撒布するか鰻の骨を焼て薫らすにあり
 糸虫 形は糸の如く長さ二三分白色なり、草根を喰ひ枯らす、之れ畢竟肥料の過量に依て生ずるなり
 驅除法には取り除くなり
 毛虫 種々あれども木の岐にありて新葉を喰ふものは害あれば驅除すべし
 燈油を巢に注入せばよし
 蟻 蟻は有害といふには非ず却て他の有害虫を殺すなり然れども蟻に擧らるゝを好まぬときは
 驅除法としては其の木の側に砂糖を撒布すべし、蟻は之に族りて木に擧らず
 挿し木
 挿さんとする草木に依りて三四月の頃にするものと、梅雨中にするものと、又秋の彼岸前に挿すものとありと雖も其多くは大抵入梅中にするなり
 挿木すべき日を撰ばざれば折角の功も徒勞に屬すること多し故に其日を撰ぶは

必要なり、即ち朝曇りたる日に早くすべし。又其挿すべき枝は勢の能く延びて芽の未だ出でざるものとす。今年の新枝を挿さんには、其枝に附着しある葉の莖が硬くなりし後二三寸位の長さに截り、二三枚の葉を残して他は悉く落して挿すべし。

玉挿しとは土を丸めて團子の如くにし其れに木を挿すを云ふなり。堅き性質の木は元の部分を二つに割りて小豆粒を挟み土に入れ置くべし。凡て挿し木の切り口は斜めにすべし。

第拾章 盆庭各論

以上は一般に園藝の知識を得る爲めに載掲せしものなれば特に此盆庭に就ては不必要と感せらるゝものもあらん然れども、盆庭に要する草木の培養法に至つては常に目下の盆庭に必要なもののみならずして他の多くの草木に就ても知り置く方利あらんと老婆心を以て一般を記せり今本章に於ては實際に目下使用せらるゝものに付きて記述する處あらんとす。

土

盆庭の庭地は多く黄土を用ゆ、黄土は色黄にして少しく粘り氣あり、之を碎きて鉢に入れば水を能く滲透するが故に草木の根を腐敗せしむることなし。

けとふ土

けとふ土は草の根の變化したるものにして、其性粗鬆にして、黄赤の中間にある色を帯ぶ、粗鬆なるが故に水を吸収すること他の土類に勝るを以て山を築くに用ゆ、此土にて築きたる山の草木は枯死すること稀なり、之れ庭地に與へたる水を能く吸収する故に水の供給十分なればなり、畑地を三四尺程掘れば得るものなり。

石

石は盆景に於けるが如く何處其處と云ふて本場とするものはなし、只だ其形の奇なるを尊重するなり、大さは種々あり、然し庭の廣さが既に限りあれば之に適當する大さのものを使用すべし。

小石

小石は根岸、天神、御影等なり、根岸は色茶なり、天神は白茶、御影は白色とす、其使用法は盆庭を造るべき器の色澤に關係するものなり、即ち一例を擧ぐれば、器が白色なれば根岸、天神等を使用し、器が青なれば御影を用ゆべし、之を要するに器と小石と其色澤の調和すべき様にせば可なり

砂

砂は根岸、六合川、邊のものを使用すべし、又往々色砂を使用することあり、其れは雪の景に於ける流を打つときにして色は青とす、此青き砂を造るには御影石の粉末にせるものにきんべろ坊間の薬店にて賣る繪具を水に溶かして之に浸せば可なり

草木

盆庭にて普通に使用する草木は、外松、杉、玉杉、岩小手毬、雪柳、檜、楓、黄楊木、楡、土茯苓、迎翹、龍毛、苔、等とす

松實生のもの、種子は春の彼岸前後の比に蒔くべし、其種類には黒松、赤松、垂松、黒鹿毛松、赤鹿毛松、等あり凡て松は乾きたる地を好むものなれば、眞土に移えるを可とす、此外銀杏松、海松あり、銀杏松は矮きものなり松の肥料は油の糟を多く使用す、又獸類の骨を焼きて灰としたるものを根に入る、なり、肥料は多きに過ぐるときは蟲を生ずる愁あり

杉

杉は實生のもので、三月の末より四月の初めに掛けて下種す、杉は林立を好むものなれば較や密植するを良とす、下種すれば上面に細末土を篩ひて掛けるべし、發芽したる後には、其附近に生える雜草を取り捨てるべし、夏は日覆をなし、冬は風避けをなすべし

玉杉

之れは杉を玉挿しにせしものなり其挿す期節は三月より四月の比とす

杜松

杜松は實生のもので下種は春の彼岸前後なり

檜も實生とす下種の期節は春の彼岸の前後とす

楓は實生とす下種は前と同様なり

樅も實生とす。土質は松の如くに乾きたる粗鬆を良とす下種は前同様なり

榲は乾燥の地よりも濕潤の地の方早く成長するものなり三三月の比に下種するなり

此木は挿木をなすべし。挿木のことは前にあり

之れは灌木にして三月より四月の頃に挿木をなすべし

黄楊木
雪柳

雪柳は實生のものか或は根分をなすべし

土茯苓

土茯苓は春彼岸後に根分けせしもの

小連翹

小連翹は秋に根分を若しくは、下種するものなり

龍毛

龍毛は田の中に生ずる一見葦に似たるものなり

苔

苔は房州石或は伊豆石の表面に生ずる平滑なる天鵝絨に似たる苔なり、即ち天鵝絨の名あるは此故ならん

葦

葦は入梅中に土三分砂七分を混合して、之れに、節以下五分程切りて之を挿して其節を隠す迄土を掛くべし

盆庭に於て用ゆる松、杉、檜、等の喬木類は實生を用ゆるものにして、其實生

のもの、盆に植えらるゝには發生後三四年を費すべし

山

山は土にて築くものあり、又石にて築くものあり、富士山を擬するには焼物の富士を据へることあれど、新法として先づ初めに土にて富士山の形を造り、之に苔を附すときは、焼物よりは一層高尚優美の山を作り得るなり

橋

橋は好みにて種々の木を用ゆるものなれど船板の朽ちたるものにて造りたるはよし

又池の杭などは海岸にある粗朶の朽ちたるものを用ゆ

盆庭造り法

造り方は畫幅若くは和歌に據りて造るなり其位置に至つては能く其陰陽呂律の方に従ふべし、秘訣とする所は、大山尺樹寸馬豆人なりとす
尙ほ圖解に付きて詳細を悟るべし

第拾壹章 盆庭圖解

伊勢 二見ヶ浦の景

二見ヶ浦を造らんとするときは、先づ圖の如く一印の岩を少しく前面に配り、二印の岩を少しく後面に置き、三印の富士及び山は後面に成るべく、抵く造るべし、而して一印二印の岩は黒崖を疊み若しくはけとふ土にて造りて苔を附すべく、又浪分石は小なる磁崖を以て適宜に配置し、繩は麻絲を用ひて之れに附すべき若しくは帆に用ゆべきものは人造象牙の如きゴム製の品を用ゆべし、殊にゴム製のカラ、カフスの用品を用ひて造る時は極めて妙なり、又鳥居は必らず木製を用ゆべく、水面は鉢盤の色に依り其色と異なりたる小石、即ち

二見ヶ浦の景



即ち

根岸

御影、天神等適宜に用ゆべし

京都 加茂の社の景

加茂の社の景を造らんとするには、先づ圃の如く杉或は玉杉等を以て森を造り、而して鳥居を置き柵を設けて、其内に宮を置くべく、鳥居の前後にある道路は川砂を敷き、道路の両側は苔を附べく、又柵前に植ゆべき樹木は松の古木を用ゆべく、鳥居は石を用ひ社殿は焼物若しくは銅製を用ゆべく柵は木にて造るべきなり

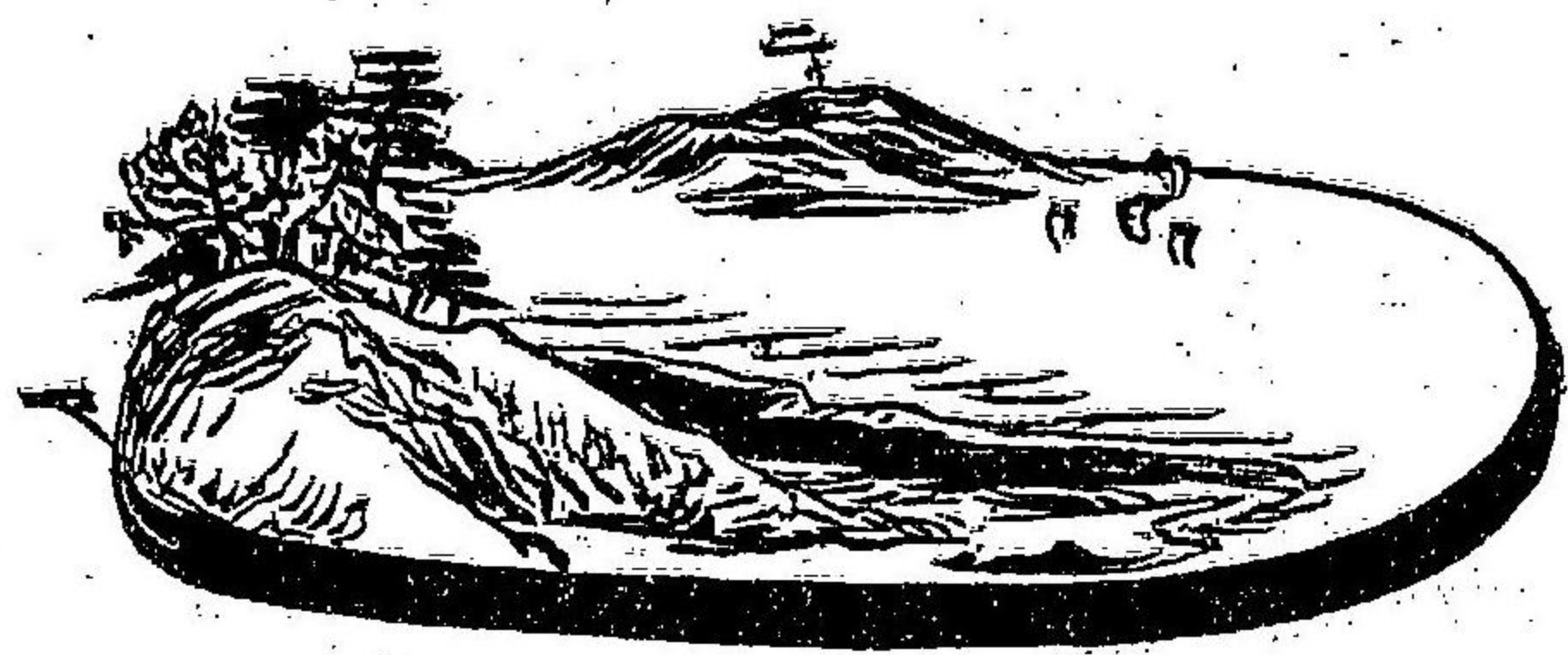
加茂の社の景



相模 稻村ヶ崎の景

稻村ヶ崎の景を造んとするには、圖に示せる壹印の山を成るべく高く造りて苔を附し、樹木は杉、玉杉、松の類及び樺等を植込み、其山下の岸邊は川砂及び眞石を敷き、二印の遠山はけとふ土にて造り苔を附し、或は石にて造り、遠帆はゴム製のカラ、カフス等の不用品にて造るべく、水面は御影、根岸、天神等其鉢盤の色に従ひ適宜に用ゆべきなり

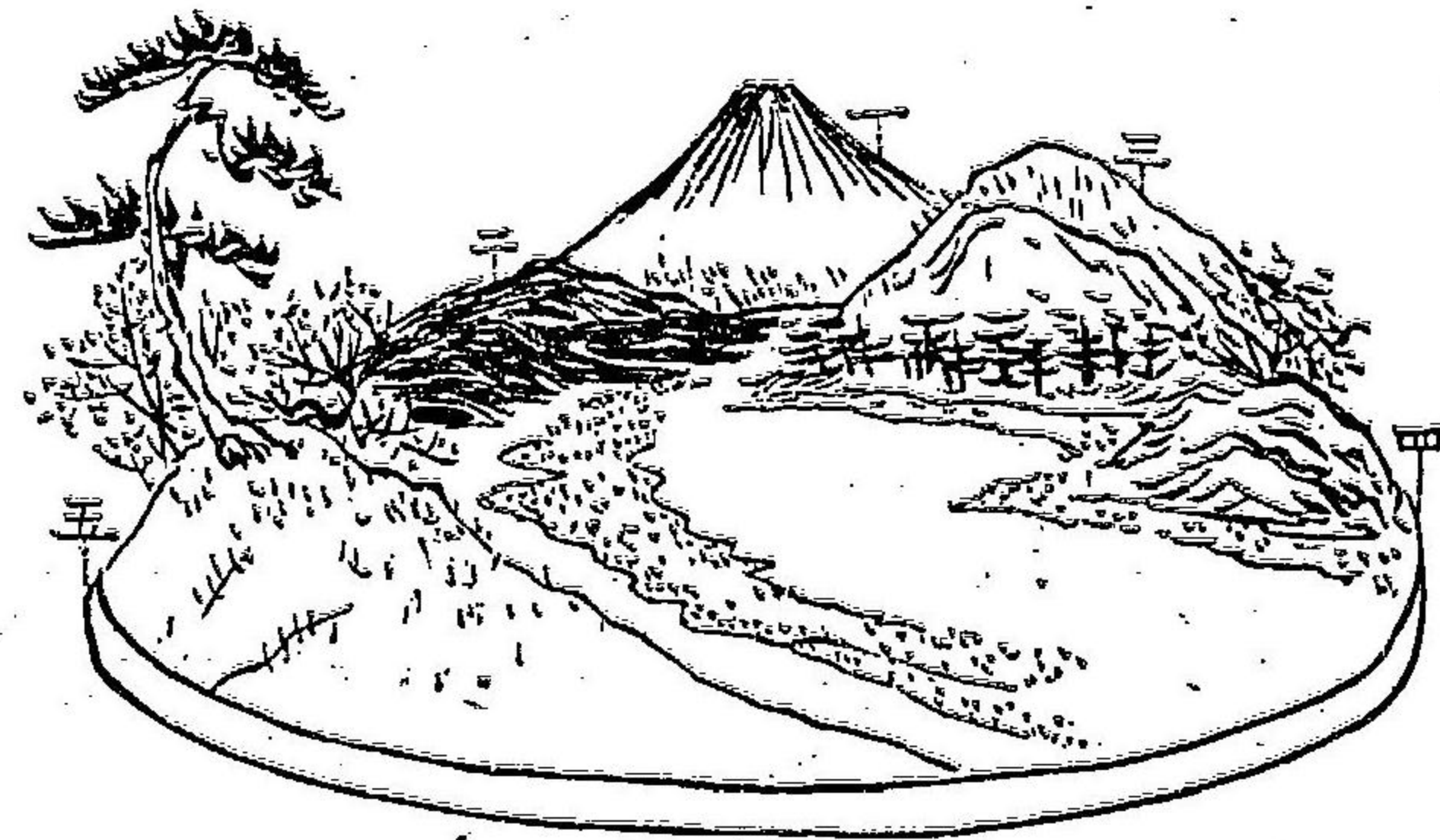
稻村ヶ崎の景



駿河 富士川の景

富士川の景を造らんとするには、先づ富士山を主眼とすのものなれば、圖の如く壹印の富士山をけとふ土にて造り、之れに青苔干苔等を附して半白の斑點を示すことを要す、次に二印の山を造りて順次三印四印の山に至る、而して五印の岡は其地こぶを成るべく高く造り、樹木は五印に松及び黄楊木を植へ、四印に黄楊木或は榎、三印に松、杉、玉杉等の類を植込み、水面の河原は川砂を敷きて真石の小なるものを交へ水面は御影、根岸、天神等適宜に用ゆべきなり

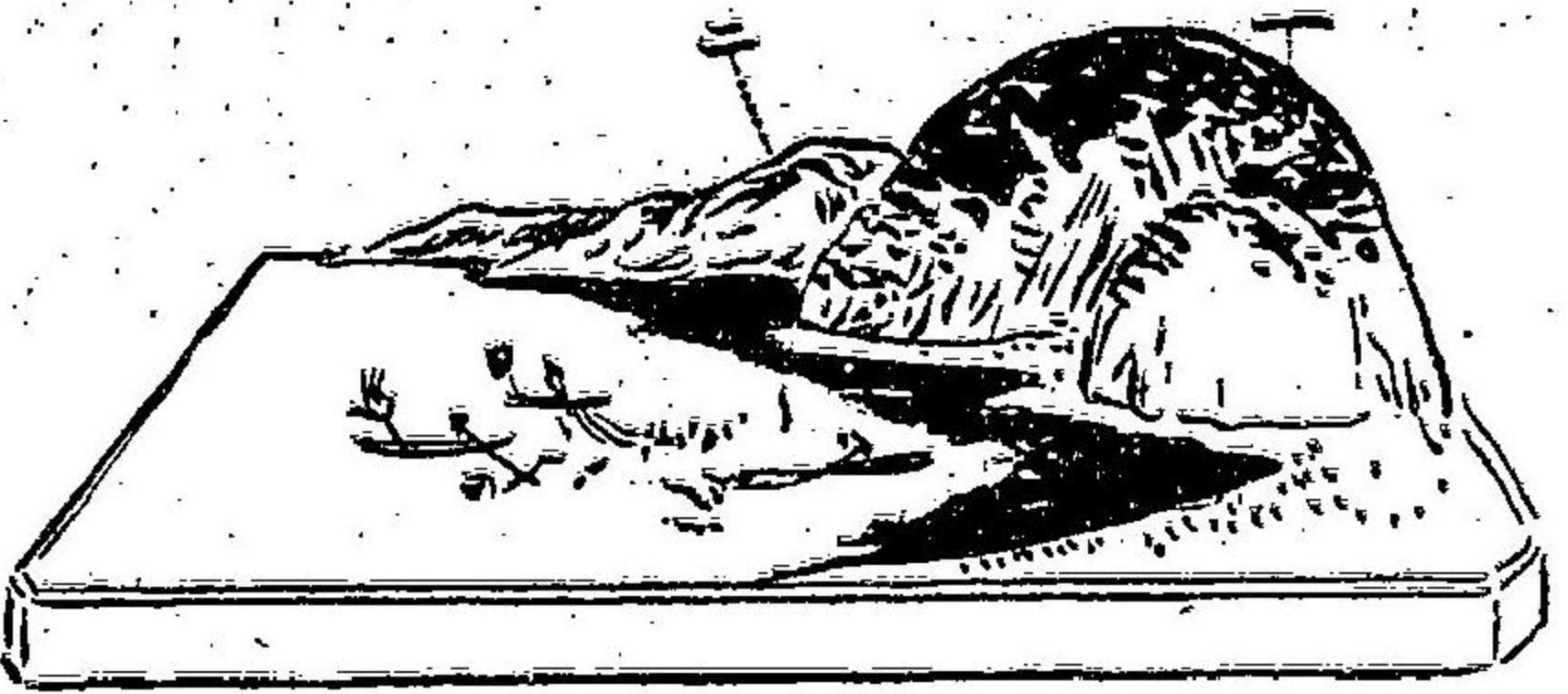
富士川の景



美濃 長良川の景

長良川の景を造らんとするには、先づ圖の如く壹印の山をけとふ土にて造りて苔を附し、山下の岸邊は眞名の小なるものを敷き、次に二印の遠山をけとふ土にて造り苔を附し、水面は御影、根岸、天神等其鉢盤色に應じて適宜に用ひ、又鶺鴒舟は焼物或は銅製何れに依るも宜ろしとすれども、銅製を用ふるは大に雅致あり

長良川の景



武藏 中野深大寺の景

中野深大寺の景を造らんとするには、
 圖の如く壹印の山を大に造りて、
 其岡を造り二印の岡に至る。山は
 苔を附し岡は川砂を敷く。而して田
 の面は苔を附し、畔は川砂を敷き樹
 木は樟、榆、黄楊木の類及びひ松、玉
 杉等を植へ、堂宇、家屋は焼物若し
 くは銅製を用ひ架橋は銅製或はくろ
 もじ等にて造り、水面は御影、根岸
 天神等適宜に用ゆべきなり

中野深大寺の景



播摩 箕子ヶ浦の景

箕子ヶ浦の景を造らんとするには、
 先づ圖の如く壹印の海岸をけとふ
 土にて造り、次に二印の遠山をけ
 とふ土にて造り苔を附し、或は石
 にて成るべく抵く造り、樹木は黄
 楊木、榆、柳等の類を植ゆべく、
 又燈臺は焼物を用ひ、船舶は焼物
 若しくは銅製を用ゆべく、而して
 水面は根岸、天神、御影等の小石
 を其鉢盤に應じて適宜に用ゆべき
 なり

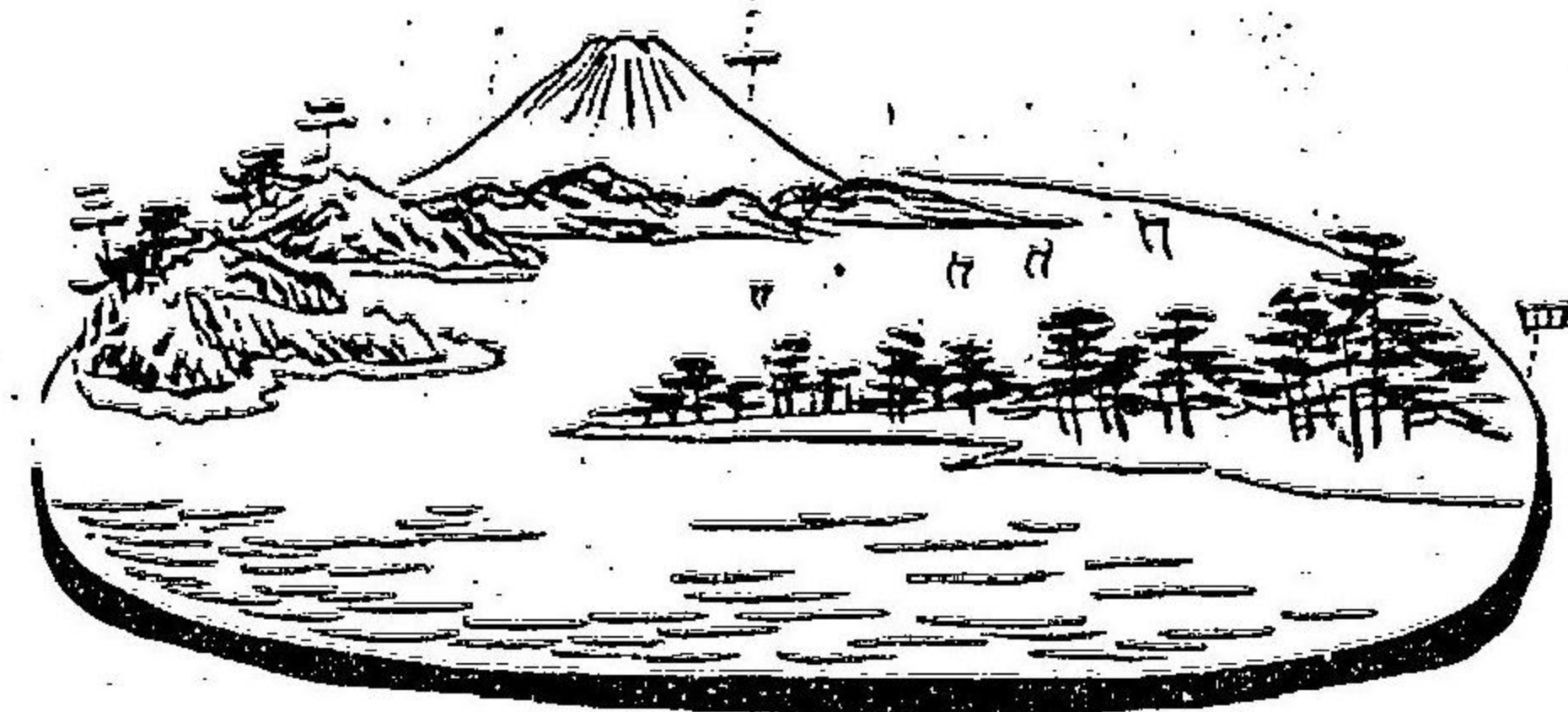
箕子ヶ浦の景



遠江 三保の松原

三保の松原の景を造らんとするには、富士山を主眼とするものなれば、圖の如く壹印の如く富士山を造りて其位置を定め、次に二印の山を低く又三印の山は少しく高く造りて四印に至る、而して之れに植込むべき樹木は遠州松、若しくは朝間松の古木にして小なるものを撰みて用ゆべく、水面は御影の小石を用ゆるを以て大に宜ろしと雖ども、其鉢盤の色白色なるときは、他の根岸、天神等の小石を用ひて其鉢盤色と水面の色と能く配合せしむること肝要なりとす、又遠帆はゴム製のカラ、カフス等の不用品にて造くること妙なり

三保の松原



武藏 日野玉川の景

日野の玉川の景を造らんとするには、先づ圖の如く壹印の遠山及び岡を造り、次に二印及び三印の岡を造る、而して植込むべき樹木は壹印の岡に小松を用ひ、二印の岡に樺、楡の類を用ゆべく又三印の岡に黄楊木の類を用ゆべし、橋は壹印より二印に架するものは焼物或は木製を用ゆべく、二印より三印に架するものは土橋を造るべく、家屋は焼物若しくは銅製にて宜ろしく、水面は其鉢盤の色に應じて御影、根岸、天神等適宜に用ゆべきなり

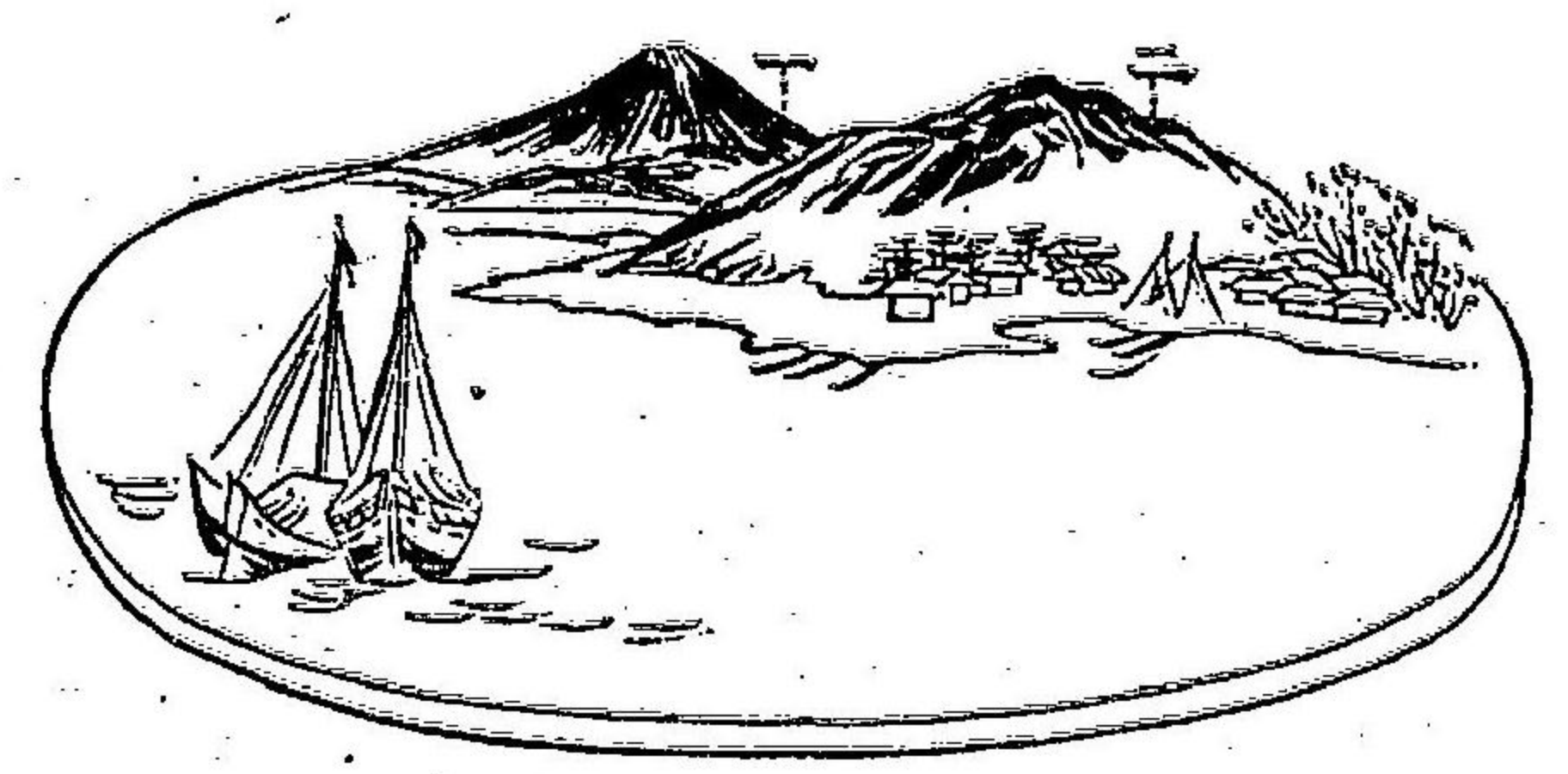
日野玉川の景



下總 濱野海岸の景

濱野の海岸を造らんとするには、
圖の如く壹印の富士山は焼物若し
くはけとふ土にて造り之れに苔を
附し、二印の山及び岸を造るべく、
山は苔を附し、岸は川砂を敷き、樹
木は小松及び雪柳、黄楊木等を用
ひ、家屋及び船舶は焼物或は銅製
を用ゆべく、水面は其鉢盤の色に
應じて御影、根岸、天神等適宜に
用ゆべきなり

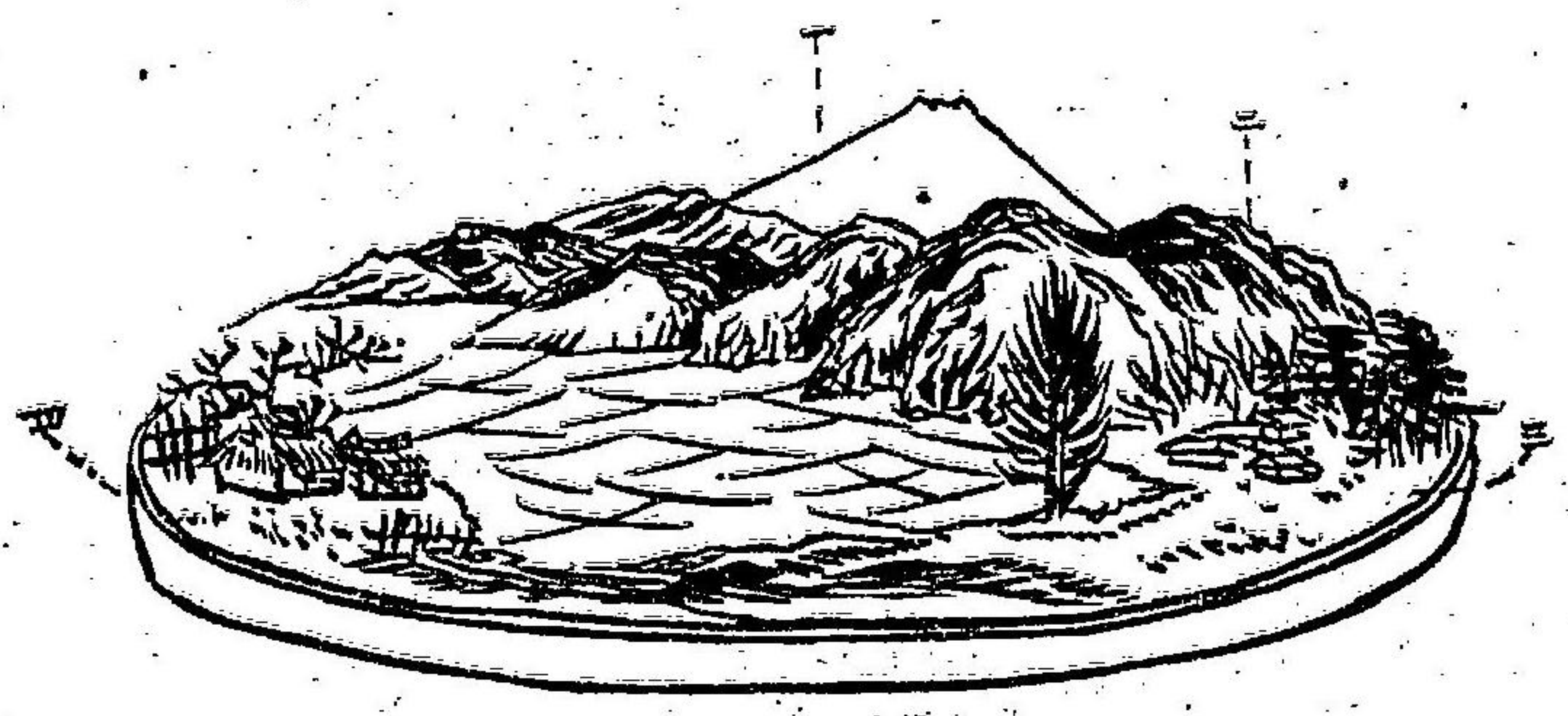
濱野海岸の景



武藏 府中本宿裏富士を眺る景

府中本宿裏富士の景を造らんとする
には、先づ圖の如く壹印の富士を造
りて其位置を定め、次に二印の山を
造りて苔を附し、而して三印、四印
の岡を造る岡は凡べて川砂を敷き、
田の畔は苔を用ひて田面は根岸、天
神等の小石を敷くべく、樹木は玉杉
、松、黄楊木等を用ひ、水面は御
影を用ゆべく架橋は古板にて造るべ
く、垣はくろもじを用ひて、人家は
焼物若しくは銅製を用ひて可なり

府中本宿裏富士を眺る景



相模 多古の浦の景

多古の浦の景を造らんとするには、先づ圖
 の如く壹印の富士及び遠山を焼物若しくは
 石にて造り、次に二印三印の山をけとふ土
 にて造りて苔を附し、海中の島は又けとふ
 土にて造り苔を附して小松を植込み、三印
 の山及び山下の樹木は松、檜若しくは黄楊
 木を用ひ、海中の岩は磯崖、黒崖を適宜に
 用ゆべく、人家は焼物或は銅製を用ひて、
 海岸は川砂を敷くべく、水面は御影、根岸
 天神等適宜に用ゆべし、又遠帆はゴム製の
 カラ、カフス等の不用品にて造るべきなり

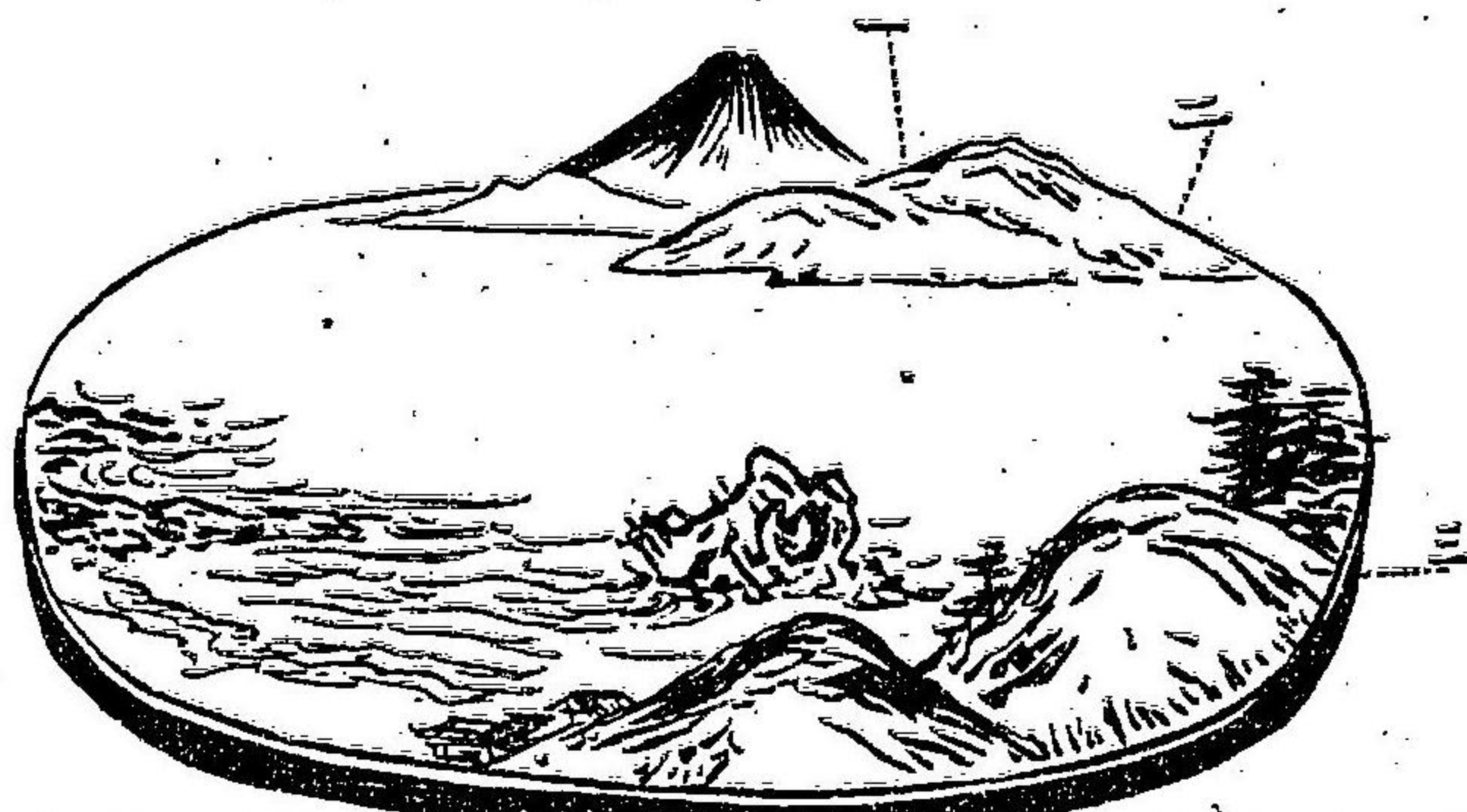
多古の浦の景



下總 銚子の浦の景

銚子の浦の景を造らんとするときは、
 圖の如く壹印の遠山を焼物若しくは
 石にて造り、次に二印の山をけとふ
 土にて造りて三印の山に至りて苔を
 附し、海岸は川砂及び小石を用ひ海
 中の岩は磯崖、黒崖等にて造り、樹
 木は杉、玉杉、松の類を用ゆべく、
 人家は焼物或は銅製を用ひ、水面は
 御影、根岸、天神等其鉢盤の色に應
 じて適宜に用ゆべきなり

銚子の浦の景

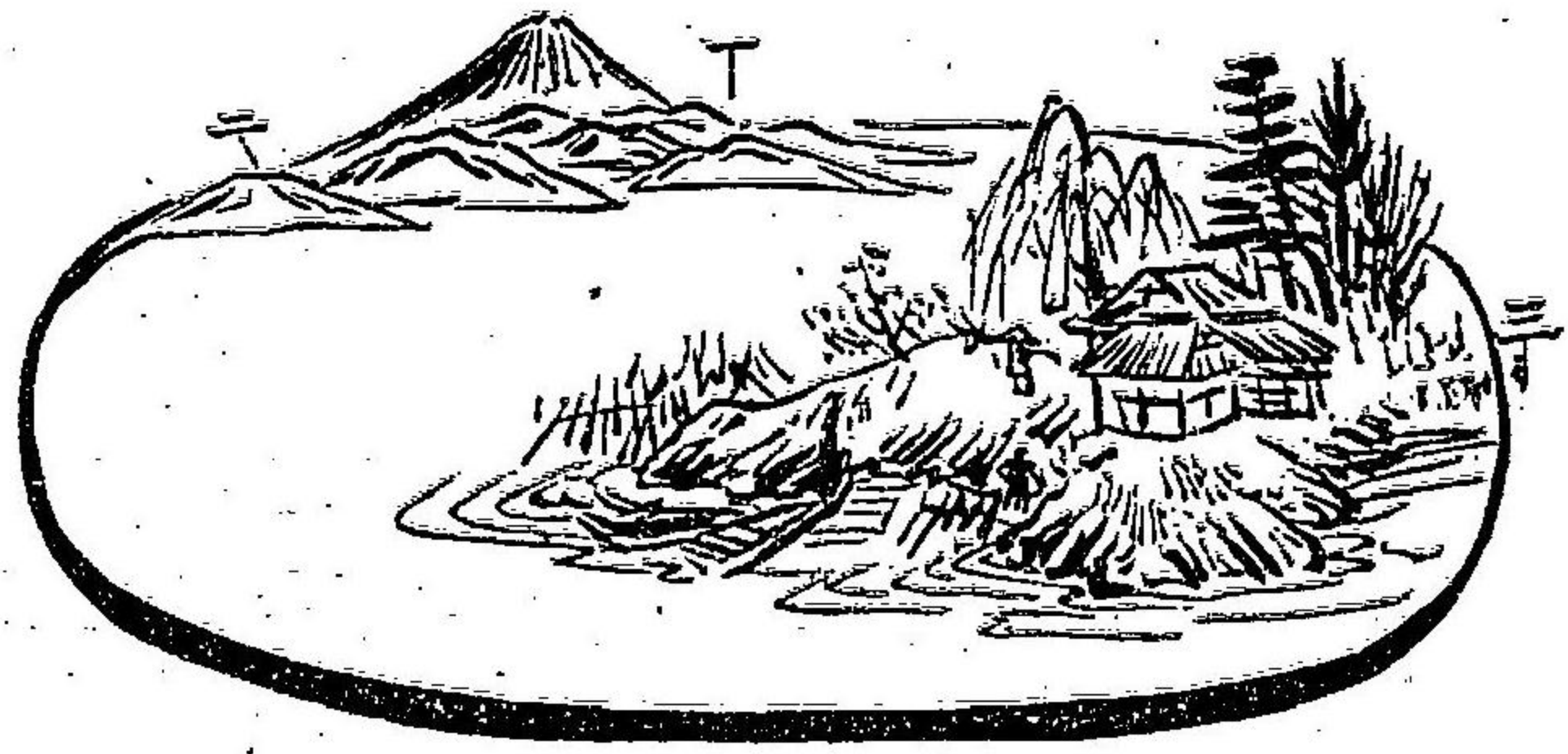


武藏 關屋の里舊景

關屋の里は往古の景に依りて造りたるものは大に趣味あるものなれば、茲に往古の景を示して其造り法を記さんとす

關屋の里を造らんとするには、圖の如く壹印の富士山を抵く焼物又は石にて造り、次に二印の遠山をけとふ土にて造りて苔を附し、三印の岡をけとふ土にて造り苔を附し、柳、松、杉、玉杉、黄楊木等を植込み、水中の岸邊には芦或は龍藻を植へ、家屋、舟等は焼物若しくは銅製を用ひ、水面は御影、根岸、天神等其鉢盤の色に應じて適宜に用ゆべきなり

關屋の里舊景



武藏 綾瀬橋の景

綾瀬橋の景を造らんとするには、圖の如く壹印の富士山を低く焼物若しくはけとふ土にて造り、次に二印の岡及び田面を造るべく、而して岡は川砂を敷きて田の畔はけとふ土にて造りて苔を附し、田の面は根岸、天神等を敷き、夫より三印四印の岡を造る樹木は杉、松、玉杉、黄楊木、樺等を用ひ、鳥居は石にて造り、燈籠及び家屋橋等は焼物を用ひ、遠帆はゴム製のカラ、カフス等の不用品にて造るべく、水中の岸邊には龍藻芦の類を植へ、水面は御影の小石を用ゆべきなり

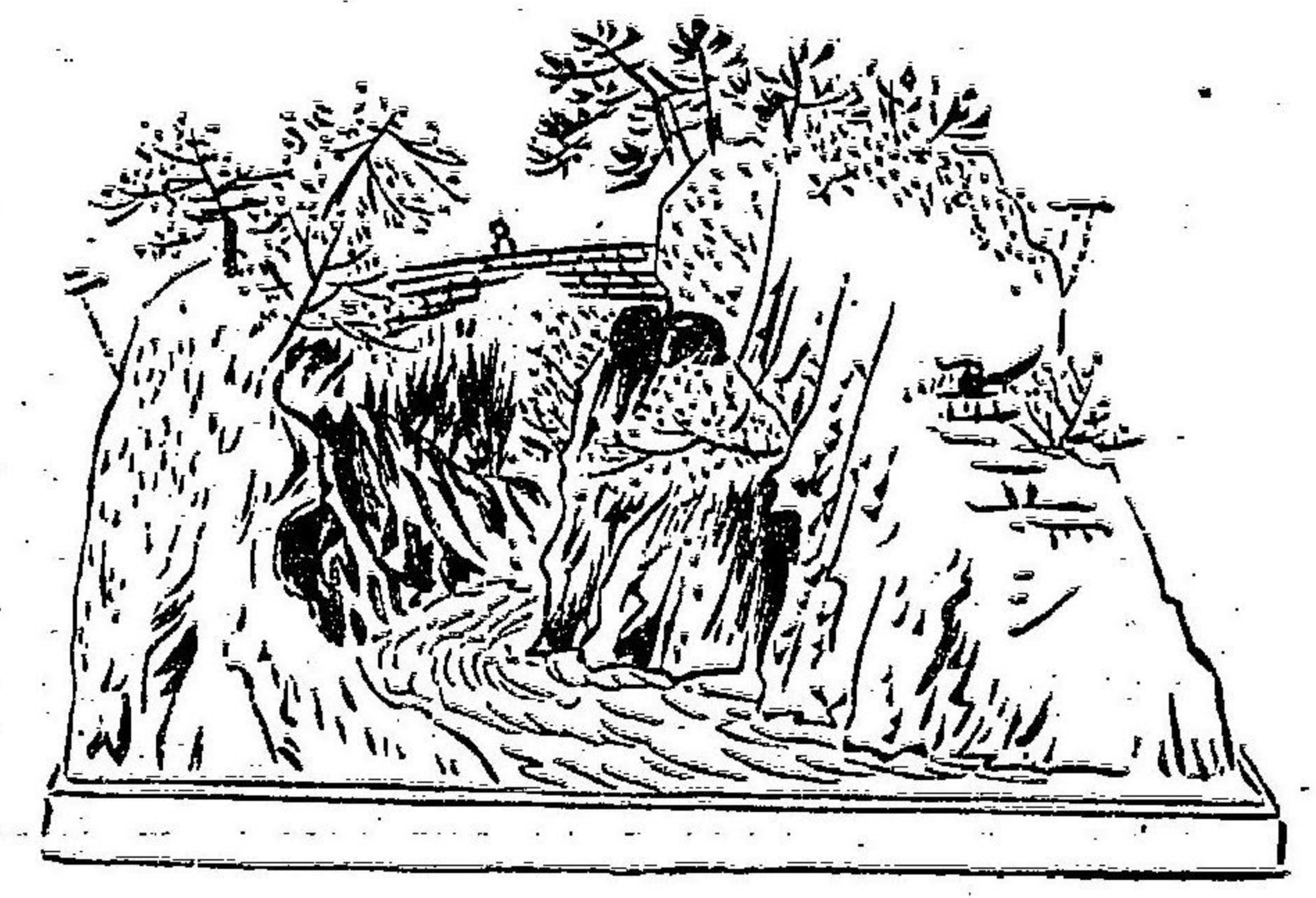
綾瀬橋の景



甲斐 猿橋の景

猿橋の景を造らんとするには、先づ圖の如く壹印の山を造る。而して其山の半分以下は黒崖にて疊み其半分以上は、けとふ土を以て造りて苔を附し、次に二印の山も又壹印の如く半分石に半分土にて造る。樹木は松、玉杉、杜松の類及び檜、榎等を山上に植込み、山の中段即ち崖の所には土茯苓を植ゆべく橋桁は萩若しくはくろもじ等に造り、橋板は家根板の如き片木にて造るべし。水面は、根岸、天神、御影等其鉢盤に應じて適宜に用ゆべし。

猿橋の景



近江 堅田の景

堅田の景を造らんとするには、圖の如く壹印の地こぶをけとふ土にて造り苔を附し、松、杜松の類を三本程植込み、次に二印の山を又けとふ土にて低く造りて苔を附し、水面の岸邊には龍藻を植込み、浮御堂は銅製を用ひ水面は御影、根岸、天神等其鉢盤の色に應じて異なりたるものを適宜に用ゆべきなり。

堅田の景

